

令和6・7年度 富士市教育研究指定 学習指導

個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実

授業案集

1. 国語科【3年生】
2. 社会科【3年生】
3. 保健体育科【3年生】
4. 総合的な学習の時間【3年生】
5. 英語科【2年生】
6. 理科【2年生】
7. 数学科【1年生】
8. 美術科【1年生】
9. 授業案研修資料

令和7年11月6日（木）

富士市立岳陽中学校

3年4組 国語科授業案

授業者 青木 千波

1 日 時 令和7年11月6日(木曜日) 第5時

2 単元名 俳句の味わい “青春を生きる 15 歳の今を俳句で表現する” (5 / 8)

3 単元目標

- ・理解したり表現したりするために必要な語句の量を増し、俳句を創作することを通して語感を磨き、語彙を豊かにすることができる。 (知識及び技能) (1)イ
- ・表現の仕方を考えたり資料を適切に活用したりするなど、自分の考えが分かりやすく伝わる文章になるように工夫することができる。 (思考力、判断力、表現力) B (1)ウ
- ・言葉がもつ価値を認識するとともに、自己を向上させ、我が国の言語文化に関わり、想いや考えを伝え合おうとする。 (学びに向かう力、人間性等)

4 本単元における言語活動

句会を開き、“青春を生きる 15 歳の俳句”を読み合う活動进行しよう。

(関連：〔思考力・判断力・表現力等〕 B (1)ウ)

5 単元構想 ※網掛け部分…本構想において重要だと考えたスキル

国語科では、自分の思いや考えを最も適切な言葉で表現することを目指し、様々な言語活動において言葉にこだわる活動を行ってきた。生徒は中学2年時に“近代の短歌”の単元において、歌の言葉にこめられた世界を想像し、短編小説として表現する活動を行った。その活動を通して 31 音という限られた音数の中に果てしなく広がっている世界を味わうことができた。

古代から現代まで、短歌は人々の生活に密接に関わり、幅広い世代や身分の人々が人生の悲喜こもごもを歌に託して表現してきた。本単元で扱う“俳句”は、短歌がもつ形式が時代と共に変化し発展していった、世界で最も短い詩歌であり、短歌同様、現代でも多くの人々に親しまれている。短歌よりさらに短い、たった 17 音の中にある世界を読み取ったり、創り上げたりする活動は生徒にとっても魅力あるものであると考える。近現代の代表的な俳人の句を読み味わう活動や、自ら俳句を創作する活動を通して、凝縮され、選び抜かれた“言葉”のもつ力を感じながら言語感覚を磨くと共に、試行錯誤しながら自分の思いを言葉に乗せていく面白さを味わうことができればよいと考えている。

本単元では言語活動として俳句の創作を行い、句会を開くことを計画している。しかし俳句の創作に対して、苦手意識をもっている生徒も多いであろう。そこで、導入で生徒の俳句創作へのハードルを下げるために、自分の名前を使って俳句を作る活動に取り組む。これは、自分の名前と季語を使って俳句を作るというものである。例えば「カレー大好き鈴木ゆい」や「高橋かずやは腹減った」、「空を飛びたい佐藤はる」など、名前に言葉を付け加えて 12 音とし、そこに“秋の風・秋の空・イチョウ散る・流れ星・山ぶどう”など、用意した 8 つ程度の季語の中から一つ選び、17 音とする。自分で考える部分は名前と季語以外の 5 音程度なので、生徒にとっては作りやすいと思われる。作成した作品をロイロノートに提出し、共有する。「秋の空山田あきひろ今日も行く」や「イチョウ散る渡邊ゆかりは迷ってる」など、身近な仲間の名前の入った句は楽しいものとなると思わ

れる。生徒の句をロイロノートで一覧にし、「これは全て俳句です。」と提示する。生徒にとって、「こんなに短時間でできるんだ。」や、「こういう感じでいいんだ。」と、俳句に対する“難しいもの”“何を作ったら良いかわからないもの”という考えを払拭し、これからの活動に意欲がもてるような楽しい時間にしたい。

俳句へのハードルが下がったところで、この単元の最終的な課題である「なぜ俳句は人々に親しまれてきたのか。」を示す。そこへ向かう活動として「青春を生きる、15歳の今をどう表現したらよいか」という課題のもと俳句を創作し、句会を開くことを伝える。“名前で俳句創作”を通して「俳句ってなんだかおもしろそうだ。」と感じている生徒たちは「自分にも作れそうぞ。」や「どうやって作るだろう。」と、これからの学習に興味を示すであろう。そしてその思いを大切にしながら、句会を開くまでの過程で考えたり感じたりしたことから、俳句という文学作品のもつ魅力や価値に気付いてほしいと考える。また、授業の流れを表にしたものをもとに、俳句を味わうためのものの見方や考え方、俳句を創作するためのスキルを学んでいくということを説明し、今後の学習に見通しがもてるようにしたい。さらに「“名前で俳句”の際に作った、12音を日記として書きためておこう。」と投げ掛け、授業内でも随時メモできるようにしておく。

15歳とは、人生の中で最も揺れ動くと言っても過言ではない時期である。その有限の時間の中に生きる生徒の、一見何気ないように見える日常生活の中には、喜怒哀楽にあふれたたくさんのドラマが潜んでいる。そんな日常の一場面の光と影を切り取り、17音に凝縮していく過程の楽しさや、他の作品に触れ、俳句のもつ世界の広がり、一音一音の言葉のもつ力を実感できる単元にしていきたい。

単元の流れがつかめたところで、俳人堀本祐樹さんによる俳句の鑑賞文を読み、俳句の決まり事や、俳句をどのように読むとその魅力を味わうことができるのかを学ぶ。俳句の作者が何に目を付け、何を感じ、それを表現するためにどのような語を選んでいるのか、という“ものの見方や感じ方”に着目し、その感覚に触れる活動にしたいと考えている。中学2年時の短歌や随筆の学習において、生徒は“独特のものの見方や感じ方”が作品の魅力につながることを学んでいる。例えば“枕草子”では、明け方の微妙に移り変わる空の様子や暖を取るために炭を持ち運ぶ様にその季節らしさを感じるなど、日常の中の一瞬の美しさや、見落としてしまいがちな何気ない出来事の中にある良さに目を向けて表現している。そのようにして書かれた文章は、今読んでも新鮮な、魅力あふれるものとなっている。**自分なりのこだわった『ものの見方を持つ』ことは、俳句を読む上でも、創作する上でも重要なスキルとなる。**中学2年時の既習事項と関連付けながら『俳句を読むため、創るためのスキル』としてワークシートに記入し、必要時には振り返るようにしたい。

次に2つの句を比較し、批評する活動を行う。活動の中で、俳句の読み取りや創作に向けた見方や考え方、スキルを見いだすための時間である。

同じテーマで作られた句や、助詞のみが異なる句、語順を変えている句、などいくつかのパターンを用意し、どちらの句が魅力的か、を比較分析して考える。まず、〈①“合唱祭響く歌声きれいだな”〉と〈②“秋空をふるわす歌声合唱祭”〉という句を比較する。「どちらの句の方が「いいな」と思える？」と問う。「①はどのような様子かわかるけど、“きれいだな”と言ってしまっていておもしろくない」、「Bの句は“きれい”のような、様子を表す表現は入っていないけれど歌声がすごく迫力があることが想像できる」など、様々な意見を出すであろう。そこで、「魅力ある俳句とはどのような俳句なのか？」と問う。「よくあるような表現をしたものはだめだと思う。」や「ふもとの俳句を書くとき“きれい”や“楽しい”、“すごい”とかいう言葉を言わずにそれを

表現した方がいいと先生に言われた。」など、年間何回か行っているふもとの俳句作りについて触れる生徒もいると思われる。そこで、「なぜそれらの言葉を使わない方が良いのだろうか。」と問う。「“きれい”や“楽しい”では単なる説明になってしまう。」、「イメージが固定されてしまう。」、「おもしろくない。」などの意見を期待したい。意見が出たところで、それらを集約し、“魅力ある俳句”を定義づける。俳句の魅力とは、読み手はその研ぎ澄まされた言葉からイメージを広げ、その世界を想像するところにあると考える。つまり読者に想像の余地を与える作品になることが大切である。ふもとの創作の際によくある“場面を説明しすぎてしまう”ことを例に出しながら、岳陽中3年生における“魅力ある俳句”の定義を次のように決める。

【読んだ人が、イメージを広げることができる、想像の余地のあるもの】

この定義を示した後に、おーいお茶コンテストの秀句を紹介し、「確かにこの句だとイメージが広がるぞ。」と、実際の句から“魅力ある句”を実感できるようにしたい。

その後、定義をもとに、いくつかの俳句の比較分析の活動を行いながら創作活動に向けてのスキルを整理していく。

まず、先ほどの句を例に出し“意味の重複”について触れる。17音しかない俳句にとっては一音一音が非常に重要である。無駄な音は一音もなく、全ての語は厳選されなければならない。先ほどの句を例に、「より魅力ある句にならないだろうか。」と問う。一音の重みについて考えることで、意味の重複に気付けるようにしたい。「“合唱祭”とあるから、すでに“歌声”と言わなくてもわかるよね。」や「意味が重なっていて、もったいないね。」、「違う言葉にできないだろうか。」などという意見が出るだろう。そこで「例えばどのような語だと説明し過ぎず、ドラマのある俳句になるか、考えてみよう。」と問い、全体でいろいろな意見を吸い上げて当てはめてみる。“秋空をふるわす絆合唱祭”や“秋空をふるわす思い合唱祭”など、“歌声”を入れなくても空をふるわせているのは“歌声”であることをイメージできる、という感覚を味わえば良いと考える。このように、生徒の言葉を拾いながら“魅力ある俳句”にするために意識するポイントとして、『意味が重複していない』や『一音の重みを考えて言葉を選ぶ』ということもスキルの一つとしてワークシートに記しておく。

また、助詞や語順が異なるパターンの句を提示し、「どのような印象の違いがあるか。」と問う。「“が”が“は”になっただけなのに、もう句の雰囲気が違う。」、「語順が少し変わると強調されるな。」など、俳句における助詞や切れ字の役割の重要性や、“少し変える”ことで句の雰囲気がガラリと変わるということに気付く姿を期待する。『助詞や語順を変えてみる』ということも、今後の創作活動におけるスキルの一つとする。

ここまでで獲得するスキルや、既習事項から今回の活動に応用するスキルを整理してみる。まず、“魅力ある俳句”にするための基本スキルは、『①説明し過ぎない』こと、『②一音の重みを考え、意味が重複しないような言葉選びをする』こと、『③ありきたりな表現を使用せず、自分だけのこだわったものの見方をし、オリジナリティのある表現をする』こと、の3点とする。これらは十七音という非常に短い音数での表現という俳句の性格上、必ず意識し、使用するものとしてワークシートにまとめておく。また、さらに俳句の魅力を引き出すためのスキルとして、『①助詞、季語、を変えてみる』こと、『②語順を変えてみる』こと、『③カタカナ、ひらがな、漢字など、表記を変えてみる』こと、『④会話やつぶやきを入れてみる』こと、『⑤固有名詞を使ってみる』こと、『⑥オノマトペを使ってみる』こと、『⑦表現技法を取り入れてみる』こと、の7点を示す。これらは過去の学習で獲得したスキルであることを確認しながら端的に説明し、主に俳句の推敲の際に

使用する。

さて、俳句の面白さを味わう力を養うために、多くの句に触れることは必要不可欠である。そこで、教科書の“俳句十五句”を読む。大意や区切れ、切れ字を一覧に示したプリントを渡し、「心が動かされた句はどれだろう。」と問う。春夏秋冬それぞれの季節の句や、季語のない句、自由律俳句など俳句の世界を代表する俳人の句から、自分が心を動かされた句を選び、その語から想像の世界を広げてみる。そしてどの語からどのようなことを想像したのか、ワークシートに書き込んでいく。“卒業の兄と来ている堤かな”を選んだ生徒は「卒業したのは中学かな、高校かな。」と考えるであろう。そこから「高校を出て、大学に行くのかもしれない。一人暮らしをするために家を出るのではないかな。」や「“堤”とは堤防のことだな。小さい頃から何度も一緒に来た堤防なのではないかな。」、「潮のにおいがしそうだ。静かな夕方のイメージだ。」、「家を出てなかなか会えなくなってしまうことへの寂しさと応援する気持ちが入り混じっているのではないかな。」、「何かを話そうと思っても何を言ったらよいかわからないのかもしれない。」、「寂しいとは書いていないのに、何かそんな感情を想像できる。」など、17 音にそぎ落とされた語から心情・景色・時間帯・季節・登場人物の表情、距離感など様々なことを想像する姿を期待する。また、同じ句を選んでいても、全く違う解釈をしている生徒の例を取り上げ、全体に示す。俳句の解釈は自由で、作者の考えと、読者のそれが異なっても良いということ押さえたい。ここでは、日常の一場面を切り取り、厳選された言葉で紡いだ一見シンプルにも見える 17 音の世界が広がっていく奥深さを、生徒が実感できれば良いと考える。

生徒は第 1 時から第 3 時までに、俳句を読み味わう見方や考え方を学び、魅力ある俳句にするためのスキルなどを得た。また俳句の世界の奥深さにも触れた。それらをもって、第 4 時から俳句を創作する活動に入っていく。まず俳句を作る技法として“①一物（いちぶつ）仕立て”と“②取り合わせ”を紹介する。俳人夏井いつきさんがこの手法を紹介している動画を視聴し、実際に穴埋めのような形で俳句を創作してみる。

“一物仕立て”とは、季語のことだけを詠んだ句のことで、“取り合わせ”とは、季語と、それとは関係のない 12 音を合わせて創作した句である。（取り合わせの手法を用いて俳句を創作するために体裁を整えた 12 音を、夏井さんは“俳句のタネ”と名付けているため、ここでもその名称を用いる。）

例えば“紫陽花”という季語についての以下の句がある。“①紫陽花の大きな毬の皆褪（あ）せし”、“②紫陽花やきのふ（きのう）の誠けふ（きょう）の嘘”

①は一物仕立ての句であり、生徒になじみのある創作方法であると思われるが、②のような“取り合わせ”の句を創ったことがある生徒はいないであろう。俳句のタネと季語の取り合わせの面白さを実感でき、イメージの広がり期待できるため、今回は②の取り合わせの手法を使って創作活動を行う。型にあてはめる方法は、創作活動に苦手意識をもつ生徒にとっても作りやすいものであり、また、得意とする生徒にとっても季語によって句の世界観が変わることを実感でき、より魅力ある句を追究する意欲が湧くだろう。また、取り合わせは生徒の思考が狭まるという懸念があるが、“型にはめる”という制限が、上記のように生徒の思考を広げることや、創作の意欲にもつながると考える。

そして単元のはじめに提示した「青春を生きる、15 歳の心をどのように表現したらよいだろう」と提示する。再度俳句づくりの流れや決まりごとを確認し、まずは、俳句のタネとなる 12 音を創る活動を行う。“名前で作る俳句”の際に、12 音と季語を取り合わせる活動を行っていて、日記を書いた

めておくよう投げ掛けている。今回はそれに書き足していく。題材は、特別な場ではなく、日常の何気ない一場で良いことを前時までの学習を振り返りながら再度伝える。ワークシートに、今目にしているものや、考えていること、最近あった出来事などを書き出していく。例えば「窓を開けると遠くにはうっすら海が見える。」や「小学生が下校している。赤い帽子をかぶっている。」、「工事をしている人が重そうな黒い鉄骨を持っている。」など、目にしたことや、「昨日京都で買ったキーホルダーを落としてしまった。」や「部活でシュートがうまくいった。」など、一言日記のようなものでもよい。その出来事を七五、もしくは五七になるような“12 音日記”にしていく。

「落とした鹿のキーホルダー」や「遠くにうっすら海がある」、「赤い帽子の小学生」、「黒い鉄骨背負ってく」、「フリースローを二本決め」など 12 音日記にまとめていく。その際、前時に習得したスキルである、『人があまり目を付けないところに目を付ける』ということも意識したい。

なかなか 12 音日記が書けない生徒は、目に付く五音のものを探し、それを説明する七音をその上に持ってくる方法を紹介する。例えば「掛け時計・保健室・絵の具箱・シャープペン」などのような五音のものを探した後は、「友にもらったシャープペン」や「5分遅れた掛け時計」、「白が欠けてる絵の具箱」、「けが人ラッシュ保健室」などのような形にしていくことで、12 音が作りやすくなる。このように、すべての生徒が 12 音の日記をいくつか作った状態で次時へ向かいたいと考えている。

本時である第5時と次時の第6時では、前時に見つけた“俳句のタネ”となる 12 音と季語を取り合わせ、俳句を創作する。

今回は、五音の季語と、12 音の“俳句のタネ”とを取り合わせる方法で行う。まず前時に創作した 12 音日記をグループで共有する。前時に定義した【読んだ人がイメージを広げることができる、想像の余地のある俳句】により近づくことができるよう、「前に学習した語順や助詞、切れ字などに変化をもたせてみて、12 音日記を俳句のタネにしてみよう。」と投げ掛け、既習のスキルを活用できるようにする。「手紙」というキーワードから、「友達に手紙を書きたいな」と思った。これは俳句のタネになりそう。」「十二音だから…“友達”を“友”にして、「友に手紙を書きたいな」はどうか。」「“～な”はあまり良くないな。「友に書きたい手紙かな」…でも“手紙”と来れば、“書く”ということはなくともいいかもしれない。」「どんな手紙なのか、ということ想像できるように、「またね、で終えた手紙かな」はどうか。」「ハッとする言葉を入れてみてもいいね。」「「書いてはまるめて…」うまく字数が合わないな」、「「出さないままの手紙かな」はどうだろう。グループの仲間に聞いてみよう。」「“出さない”を“出せない”にしてみよう。なぜ出せないのだろう、と読んでいる人に想像させられるぞ。よし、これに合う季語を探そう。」というように、もととなる 12 音をいろいろなスキルを使ってより魅力ある“俳句のタネ”になるよう試行錯誤する姿を期待する。活動はグループで行い、生徒が仲間に意見を聞きやすいようにする。

12 音の俳句のタネができあがったら、それに合う季語を季語一覧から探す。この部分が、生徒にとっては難関となると思われる。季語と俳句のタネが、一見全く関係ないものに見えるが、12 音のイメージに合うものでなくては全体のバランスが悪くなってしまう。その絶妙なバランスの中にドラマが生まれる。12 音に感情を込めない代わりに、“季語”に感情を託すのである。わかりやす過ぎても、わかりにくくても良くないのである。読者の想像力を駆り立て、且つ、ありきたりではない表現となるような季語を選べるよう、例となる句を上げながらアドバイスできるようにしていく。

「自分の心情にマッチし、ドラマを生み出す季語はどれだろう。」と投げ掛け、いろいろな季語と

の取り合わせをした中で、自分がじっくりくものを選べるようにする。「夏の季語にしたいから、“夏祭り”はどうか。“夏祭り出せないままの手紙かな”“秋近し”だとあまりドラマが生まれないな。もう少し場面が想像できる季語にしたいな。」、「「アイスティー出せないままの手紙かな」はどうだろう。アイスティーを飲みながら手紙を書いていて、でも出せないという迷う気持ちが感じられるのではないかな。」など、試行錯誤しながら最も適していると思われる季語を見つけ出してほしいと考える。

12 音と季語を取り合わせ、17 音の俳句が出来上がったら、推敲の作業に入る。俳句づくりに終わりはなく、正解もないため、より魅力ある句を追究する姿を称賛していきつつ、技巧ばかりに走らず、等身大の自分自身を表す表現を大切にしていけることも伝えていきたい。

このような創作の授業は、得意不得意により活動に大きく差がでてしまいがちである。しかし、先述の通り、俳句作りに終わりはなく、早い段階で 17 音にまとまった生徒に対しても「究極の一句に仕上げよう。」と投げ掛け、粘り強く考えることができるようにしたい。また、季語 5 音＋俳句のタネ 12 音の取り合わせ以外の句としてもう一句作ってみたり、句またがりや破調、自由律俳句など、発展的な創作にもチャレンジしてみたりできるような資料も準備し、積極的に取り組めるようにしたいと考える。

単元末にはそれぞれが作った俳句をロイロノートに提出し、句会を行う。まず教科書にある“俳句を創作して、句会を楽しもう”を読み、イメージをつかめるようにする。手順としては、まずロイロノートに出句する。次に選句を行うが、その際に、「本授業における魅力ある俳句の定義は何か。」と問い掛け、その視点で選ぶことを意識できるようにする。「この句はわかりやすいけど、イメージが広がらないな。」、「この擬音語がいいな。」、「秋の風と、宿題に追われる夜の絶妙な取り合わせがおもしろいし、勉強に行き詰まっているところに窓から風が入ってきた様子が思い浮かぶ。この句が特選だ！」など、学習の過程で得てきた俳句の鑑賞の仕方や魅力ある俳句にするためのポイントなどをもとに自分の琴線に触れる句を選句していく。一番魅力を感じた句を特選、次を佳作として紙に書き、投票する。自分の句は選ばないことも事前に伝えておく。特選が 2 点、佳作が 1 点として集計する。集計にはやや時間がかかるため、その後選んだ作品について自分のもったイメージや感想を述べ批評していく、“選評”を行う。「“朧月君と話した 5 分間”という句を選びました。“君”は、友達なのか、好きな人なのか、迷いましたが、季語が“朧月”だからなんだかほかない感じがして、好きだけど思いが伝えられない切なさを季語に込めたのかなと思いました。」など、自分なりの俳句のイメージを伝えられると良い。なかなか選べない生徒には、「わかりやすい句ではなく、これってどういうことだろう、と考えたうえで自分なりの答えが出そうな俳句を選んでみよう。」とアドバイスする。また、“魅力ある俳句にするため”のポイントが書かれたプリントや、今までのワークシートなどを参考に選ぶと良いとアドバイスする。その後得点が高かった句を発表し、その句についてのイメージを出し合う。そして“名のり”を行う。その句を創作した人は誰か、名のり出て自分の作った句について説明する。生徒は、「えっ！この人がこの句を？」、「そうか、この季語にはそのような意味を込めていたんだね。」という様々な思いを抱くだろう。生徒それぞれが思いを持って選んだ多様な 17 音の表現に触れ、自分の語彙や感性を磨くことや、俳句の面白さや奥深さを実感することにつながる活動にしたい。

最後は学習の振り返りを行う。最初に提示した“なぜ俳句は人々に親しまれてきたのか”を再度示し、振り返りカードに記入する。今までの学習を通して、17 音に思いを託す面白さや、試行錯誤しながら言葉を選ぶこと、多様な解釈の仕方が許されていること、俳句の創作は難しいことではな

いことなど、俳句の魅力や言葉の力など、様々な角度から今までの学びを振り返り、自分の思いを書く。例えば、「たった 17 音だからこそ、余分なものをそぎ落として言葉を厳選していかなければならないんだな。だから魅力ある句は、パッと見た感じはとてもシンプルな感じがするけど、実は奥深いんだ。」、「17 音の言葉に作者のこだわりが詰まっていて、それを自分なりに想像できるということがすごくおもしろいと思った。」、「俳句作りは難しいと思っていたが、そんなことはなかった。自分の思いや感情をはっきり言わなくても、伝わってくところがすごいと思った。きっと俳句が長年親しまれているのは、そういうところだと思う。」、「いいこともそうでないことも俳句に託すことで、人は自分の気持ちを整理してきたのかな。“なぜ物語が必要なのか”の、人が物語を作りながら生きている、ということに似ているな。」、「これからも自分の思いや考えを一番自分に合った言葉で表せるようにしたいな。」など、俳句の楽しさ、面白さに加え、他の教材と関連付けたり、俳句を詠んできた人々の気持ちも想像したりしながら自分の思いを具体的に書く姿に期待する。そして、この単元を通して、生徒がこれから出会うであろう喜びや悲しみ、日常の何気ない一場面、うっかり見過ごしてしまう日々の中にある輝きに目を向けたり、その中にある喜びや悲しみなどの様々な思いを、こだわりをもって選んだ“言葉”に託して表現したりしようとする姿勢を養うことができればよいと考えている。

6 単元の評価計画

時数	学習内容	評価について				評価方法
		知	思	主	評価規準	
1 2 3	- 俳句とはどのようなものか確認し、名前で俳句を作る。 - 教科書の俳人堀本裕樹さんの俳句の鑑賞文を読み鑑賞のヒントを得る。 “魅力ある俳句”とはどのような俳句か、比較し批評しながら考え、俳句を読んだり作ったりするためのスキルを捉える。 『俳句十五句』を読み、一句選んでイメージを広げ、鑑賞する。		○	○	思：文章を批判的に読みながら、文章に表れている物の見方や考え方について考えている。 主：進んで表現の仕方について評価し、学習課題に沿って批評しようとしている。	- ワークシート - 観察
4 5 6	- 俳句作りの手法である“一物仕立て”と“取り合わせ”とはどのようなものか知る。 - 十二音日記を作る。 “取り合わせ”の手法を使い、12 音と季語を合わせて“青春を生きる 15 歳の俳句”を創作する。 - 作った俳句を推敲し、一句を選出する。	○	○	○	知：理解したり表現したりするために必要な語句の量を増し、語感を磨き語彙を豊かにしている。 思：表現の仕方を考え、自分の思いが効果的に伝わる俳句になるように工夫している。 主：より良い表現を目指して粘り強く創作や推敲の活動に取り組もうとしている。	- ワークシート - 俳句作品 - 観察 - ワークシート

7	・句会を開く。			○	主：進んで俳句の良さに目を向け、作品を批評しようとしている。	・観察
8	・俳句が人々に親しまれているのはなぜか、自分の考えを書く。 ・学習を振り返る。		○	○	主：言葉がもつ価値を認識すると共に俳句の創作を通して自己を向上させ、我が国の言語文化に関わり、思いや考えを伝え合おうとする。 思：表現の仕方を考え、自分の思いが効果的に伝わる俳句になるように工夫している。	・振り返りシート

7 本時の授業

(1) 本時の目標

身の回りにある物事や日常生活の中から考えた 12 音日記を“助詞や語順を変えてみる”、“オリジナリティのある言葉を使ってみる”、“意味が重複していないか確認する”などのスキルを用いてより良い表現になるように試行錯誤したり、自分の思いに合う季語を選択したりする活動を通して、自分の表したいことを、より適切に表現する言葉は何か考え、一音一音の言葉にこだわりながら俳句を創作することができる。

(2) 授業過程

教師の発問と予想される生徒のあらわれ	形態等	◎教師の支援 ☆評価
皆さんが作った 12 音日記を“俳句のタネ”にするために、どのようなことをすればいいのだろうか？ ・“鹿の”を“鹿や”にしてみようかな。“じゃらり”という擬音を入れよう。 ・“うっすら”を比喻で表して“布を重ねた”にしてみようかな。ありきたりかな？ ・“雨”と“降る”は意味が重複しているから“降る”はカットしよう。	個 グループ 【スキル獲得】	◎どのように変えたら良 いかわからない生徒に は、オリジナリティの ある語を入れる、意味 の重複を避ける、語順 を入れ替える、助詞を 変える、などの前時ま でに獲得したスキルを 活用できるようワーク シートを見直すようア ドバイスする。
青春を生きる 15 歳の今を、俳句で表現するにはどうしたらよ いのか。 〈季語〉 ・人のエネルギー や高ぶる気持ち に合う季語がい いな。“秋祭 り”にしようか な。それとも “秋の海”もい いかな。 〈助詞〉 ・“校舎の前に” を“校舎の前 の”にしてみよ う。“や”もい いかな。助詞を 変えると意味も 変わって来る な。 〈語順〉 ・“2本決めたぞ フリースロー” の“ぞ”が気にな るな…。語順 を変えて、“フ リースローを2 本決め”にしよ う。 〈重複〉 ・“コーラ”と “飲む”は意味 が重なる。“飲 む”は無くても 通じるからカッ トしよう。その 代わりにどんな 語を入れよう。 〈言葉〉 ・“じゃらり”と “キーホルダー” のイメージ は被るな。鹿が どこかへ走って いった面白さを 足して“駆けて く”にしよう！ 〈言葉〉 ・“時を重ねる” はありきたりか な？オリジナリ ティのある見方 を生かして “時”を海に “溶かす”のは どうだろう。	個 グループ	◎基本的には配布した季 語一覧から選ぶが、他 のものを見たいという 生徒には季語コーナー にある歳時記を使用で きるようにする。 ◎季語を選ぶ際は、その 季語が持つ意味も捉え るよう声を掛ける。 ☆より魅力ある俳句にす るためのスキルを用い て、一音一音の言葉に こだわり試行錯誤しな がら俳句を創作してい る。 《【思・判・表】ワークシート》 ◎季語が選べない生徒に は、一覧表から色々な 語を当てはめ、自分の 句のイメージに合うも のを探そうと伝える。 ◎早々に完成としてしま っている生徒には、 ある俳句の定義であ る【読み手のイメージ を広げることができ る】に当てはめ、 読み手の想像力をか きたてるドラマが生 まれている句になっ ているか再検討する よう促す。
・“風光るフリースローを2本決め” うん、いいな。次の時間は少し季語を変えてみよう。 ・“天高しじゃらり駆けてく鹿と僕” 意味が分かりにくいかな。やっぱり元に戻そうかな。 ・“夏休みコーラと君と自転車と” 夏のウキウキ感が感じられるかな。君はひらがなの方がいいかな。班の仲間に聞いてみよう。		◎試行錯誤した結果、元 に戻すということも選 択肢の一つであるとい うことも助言する。

3年1組 社会科授業案

授業者 山本 典良

1 日 時 令和7年11月6日(木曜日) 第5時

2 単元名 三権分立のしくみと私たちの政治参加(9/17)

3 単元目標

- ・国会を中心とする我が国の民主政治の仕組みのあらましや政党の役割、議会制民主主義の意義、多数決の原理とその運用の在り方について理解することができる。また、国民の権利を守り、社会の秩序を維持するために、法に基づく公正な裁判の保障があることや、地方自治の基本的な考え方について理解することができる。(知識及び技能)
- ・対立と合意、効率と公正、個人の尊重と法の支配、民主主義などに着目して、民主政治の推進と、公正な世論の形成や選挙など国民の政治参加との関連について多面的・多角的に考察、構想し、表現することができる。(思考力、判断力、表現力等)
- ・民主政治と政治参加につて、現代社会に見られる課題の解決を視野に主体的に社会に関わろうとしている。(学びに向かう力、人間性等)

4 単元構想 ※網掛け部分…本構想において重要だと考えたスキル

本校社会科では、単元の導入時に、単元を貫く課題を設定し、どのようなことが分かればその課題が解決できるのかを生徒自身が考え、全体で共有している。その中で、生徒が、様々な種類の資料から何を選択するか、構造的な理解を深めるために、学習をどのようにまとめるかを自由を選択することで個別最適な学びを実現していく。同時に、全校で確認した、どの仲間も大切に関わり合うための“岳陽中の学び方”を大切にすることで協働的な学びの実現を目指している。

本単元について生徒は、小学6年時に国会、内閣、裁判所といった機関の基本的な学習をしてきている。しかし、記憶も曖昧になっており、国会と内閣をまとめて「政治をするところ」や「裁判所は裁判をするところ」と認識している生徒が多い。また、修学旅行で国会議事堂を見学したものの、三機関の働きが自分たちの生活に直接連動していることに気付いていない生徒が多い。本単元は、国会を中心とする民主政治や議会制民主主義、公正な裁判、地方自治の仕組みについての理解を基に、民主政治の推進と公正な世論の形成、国民の政治参加との関連について多面的・多角的に考察し、地方自治や我が国の政治の発展に寄与しようとする自覚や自治意識の基礎を育成することを目標としている。民主政治がテレビやインターネットで見るような遠いものである生徒たちの意識を、多数決や選挙など普段から経験していることや歴史で学習した民主政治に関わる内容、ニュースの事例を活用していくことで、身近なもの、自分事として捉えていけるようにしていきたい。課題を追究する際には、これまでに学習した『効率と公正』、『多面的多角的視点』、『個人の尊重』というスキルを活用する。社会の様々な仕組みが、個人の権利を尊重しながら、1つの社会的事実がもつ様々な側面や様々な立場の人から見て、できる限り無駄がなく正しさをもとに整えられていることを理解していく。

単元の導入では、これから学習することのイメージを掴むため、復習の写真資料を提示する。写真は、“選挙の様子”、“衆議院本会議の様子”、“閣議の様子”、“裁判の様子”を使用する。これらを見た生徒は、「家族と一緒に投票所に行ったことあるよ。」や「国会議事堂の中だ。」、「小学生の時に行ったな。」や「今の総理大臣が中心に座っているぞ。」、「裁判所って行ったことがない

な。」「この辺に裁判所ってあるの？」などと反応するだろう。そこで、「政治に対してどのようなイメージがありますか？」と問う。すると、「国を動かすため。」や「日本を強くするため。」、「日本を良くするため。」、「頭のいい人たちが政治をしている。」と答えたり、「選挙で与党が負けた。」や「国会議員は寝ていることが多い。」、「給料をもらいすぎている。」、「裏金問題がある。」などとネガティブなイメージ答えたりすると思われる。そこで、「自分の行動で政治を変えようと思いますか？」と問う。生徒は、ネガティブなイメージから批判はするが、自分たちが変えられる、変えようという思いをもつまでには至らないだろう。その後、日本財団が18歳に行った“国や社会に対する意識調査”について考える。日本人の国に対する後ろ向きな意識や、国や社会に対して自分が主体的に何かをしたいと思う気持ちが低い現状を読み取った生徒は、「日本や私たちはこのままで良いのだろうか」と不安な思いを抱くだろう。しかし、「国を良くするためにできることは、選挙かデモ活動ぐらいなので？」と思っている生徒も多いはずである。そこで、単元の学習課題を「社会をより良いものにするために、主権を持っている私たちはどのように政治に関わるのが良いのだろうか」として学習を進めていくことを確認する。選挙やデモ活動が政治に参加する方法であると考えている生徒が単元の学習を通して、民主政治とはどのようなものでそれを実現するために選挙の仕組みがどのように整えられているのか、国会や内閣はどのような働きや仕組みがありそれぞれがどのように結びついているのか、法の支配や司法への参加が民主主義の実現のためにどのような役割を果たしているのかについて理解すること、自らの一票や政治行動がもつ意味の大きさや自分自身の行動に国や社会を変える力があることを自覚し、主体的に政治に参加して社会を良くしていこうとする姿になっていくことが目標であると確認する。

第一次(2～6時間目)では、民主政治と選挙について学ぶ。選挙や政党など、様々な人の意見をまとめ、課題を解決するためにどのような仕組みが整えられているかを理解するとともに、民主政治の推進と公正な世論の形成との関連について考察する。最初に「民主主義って何だろう？」と生徒に問う。生徒は「話し合うこと。」や「みんなで決めること。」、「多数決すること。」などと答えるだろう。さらに、「みんなで決めることってどうして大切なのだろうか？」と問いかけると、生徒は「自分で決めることができるから。」や「自分の意見が言えるから納得できるから。」と答える。そこで、資料“スイスの直接民主制”を確認する。すると生徒は、既習の『効率と公正』のスキルを活用し、「これはみんなが意見を言っていたら終わらない。」や「多数決するにしても数えきれない。」、「効率が悪い。」、「みんな自分の意見を言えるから納得できるね。」、「一番公正だ。」と様々な考えをもつだろう。そして、規模が大きい集団で物事を決める際には、効率と公正の視点から、代表者が話し合いをした方が良いことに気づき、「代表者が話し合いをして物事を決定する議会制民主主義がより多くの人々が納得できる、バランスの取れた方法なんだ。」ということを理解する。次に、「話し合いをする代表者はどのように決められるのだろうか？」と問い返すことで、次の選挙の仕組みの学習につながっていく。生徒は選挙の仕組みについて、自分たちが経験している生徒会選挙をイメージする。そこで、資料を用いて選挙の仕組みを理解していく。「小選挙区制は自分たちが行っている生徒会選挙とほぼ同じで、得票数の高い人が当選するんだな。」や「比例代表制の仕組みは難しいぞ。」、「ドント方式というやり方で、得票数に応じて当選者を割り当てていくんだな。」ということに気付く。そこで生徒は「なぜこのような複雑なやり方をするのだろうか。」や「小選挙区制だけじゃだめなのかな。」という疑問をもつ。そこで、「なぜ2つの選挙制度を同時に行っているのだろうか。」という課題が生まれ、『効率と公正』、『多面的・多角的視点』、『民主政治の実現』のスキルを活かし追究していく。「小選挙区制は効率が良いが死票が多くなる。」や「比例代表制は当選する人がバ

ラバラで効率が悪いよ。」、「落選した人に入れてしまった人からすると、比例代表制は自分の意見が反映されやすいな。」、「死票が多いことはより多くの人が幸せになるという民主政治の理念からは離れているよ。」といったメリットデメリットに目を向けるだろう。そして、「小選挙区比例代表並立制が、自分たちの意見を適切に政治に反映し、民主政治を実現する方法なんだ。」ということを理解していく。一方で、選挙権の年齢引き下げ、年齢別の投票率の推移、一票の格差の問題など、現在の選挙制度が完璧なものではないことも学ぶことで、自分たちがより良い有権者となっていく意識を高めていきたい。そこで「私たちの願いを実現するためには、誰に投票したらよいのだろうか？」と学習課題を立て、追究していく。政党政治の仕組みの資料を読み取ることで、「効率よく民主政治を実現するために政党があり、第一党から総理大臣を出すことが重要なんだ」ということに気付く。ここで、自由党や立憲改進黨など、歴史分野でも政党について学習したことを思い出し、「だからあの2人は政党を作ったのか。」と理解を深めるだろう。そこで、「投票するために、党についてどうやって情報を得たら良いのだろうか？」と問い掛ける。テレビや新聞、インターネットなど様々なメディアがあり、生徒は日常生活の中で情報を得ることができる。そこで、世論調査や新聞記事などマスメディアの影響、フィルターバブルやフェイクニュースの危険性について学ぶことで、「有権者としてメディアリテラシーを持つことが、民主政治を実現する上で大切なんだ。」ということに気付いていく。このように、第1次では、社会をより良いものにしていくために、議会制民主主義によって民主政治を行うことが必要で、そのために効率と公正のバランスをとった選挙制度が整えられており、自分たちはメディアから正しく情報を得た上で、候補者や政党に投票していく必要があることを理解し、『民主政治の実現』というスキルを獲得する。

第二次(7～10時間目)では、国会と内閣について学ぶ。国会と内閣がそれぞれどのような仕組みで成り立っており、双方がどのように関わっているか、それが民主主義を実現する上でどのように重要なのかについて考察する。まず、「国会と内閣ってどう違うの？」と問う。生徒は第1次で政党政治の仕組みについて学習しているため、その時の資料に立ち返り「選挙で国会議員が選ばれるんだよね。」や「国会議員の中から総理大臣が指名されるって書いてある。」ことまでは分かるだろう。しかし「政治をしているのは国会議員？」や「内閣って総理大臣以外に誰がいるの？」と分からないことは多い。そこでまずは、「国会と内閣はどんな違いがあり、それぞれどのような役割をしているのだろう。」と課題を立て、追究していく。生徒はワークシートをまとめていく中で、国会議員には衆参二種類の議員がいることやそれぞれの違い、国会の種類や国会議員の仕事(立法権)、内閣総理大臣が国会議員の中から指名されることや国務大臣の過半数は国会議員から任命されること、内閣の仕事(行政権)について理解していく。その中で、「効率と公正」のスキルを活かし「なぜ衆議院の優越があるのだろうか？」という課題について考えることで効率的に国会を運営するために必要であることや最新の国民の意見が反映されているという点で、衆議院により強い力があることが公正であることを理解していく。このように、それぞれの違いや関わりについて理解した上で、本時の課題に迫っていく。本時では、日本が議院内閣制を行っている理由をアメリカの大統領制と比較し、民主政治についての理解を深めていく。まず初めに、近年の日本の総理大臣及びアメリカの大統領の氏名と任期が表になった資料を確認する。生徒は「この総理大臣懐かしいな。」や「トランプ大統領は2回目なんだよね。」、「日本は総理大臣がよく変わるなあ。」と感想をもつだろう。資料を読み込むことにより、「日本は総理大臣によって任期が全く違うが、アメリカ大統領は4年か8年だ。」という気付きから、「そういえば日本は内閣不信任案が出たら辞任することがあるんだな。」や「アメリカ大統領は就任日が同じだ。途中で辞めることがないのかな？」と前時で学習したことを『スキルとして活用』

することで、思考が深まっていく。更に「日本の総理大臣は任期がないのかな？」や「そもそも総理大臣と大統領ってどう違うの？」と疑問に感じるだろう。そこで「総理大臣と大統領にはどんな違いがあるのだろうか？」と問い、資料を読み込む。「選ばれ方の違いで総理大臣か大統領かが違うみたいだ。」や「日本の選び方を議院内閣制というんだ。」ということが分かる。また、「国会の役割を学習した時、総理大臣は国会議員の中から指名されるって学んだな。」と既習事項を復習する。そこで、「みんなは議院内閣制と大統領制、どちらが良い？」と問い掛ける。生徒たちは「自分たちで選びたい。大統領制が良い。」と口々に答えるだろう。そこで「これだけ多くの人が良いと思っているのに、なぜ日本は議院内閣制を採用しているんだろう？」と切り返す。そうすると、生徒は「もしかすると総理大臣を選ぶことにメリットがあるのかもしれない。」や「逆に大統領制にデメリットがあるのかな？」と疑問をもちはじめ、本時の中心課題へと自然に焦点化されるだろう。生徒は、「それぞれの仕組みの特徴やメリット、デメリットを比較すれば、課題が解決できるだろう」と考え、資料「議院内閣制の仕組みと大統領制の仕組み」「閣法と議員立法の成立件数の比較」「衆議院の優越」「世論とマスメディア」「政党政治の仕組み」「日本の選挙制度」を読み込んでいく。資料の多くは、単元の中で前時まで読み込んだことがあるものである。生徒は、「与党が内閣を形成しているから、閣法の成立件数が多くなっているんだよね。」や「衆議院の優越は効率的に国会を運営するためや最新の国民の意見が反映されているという公正さが理由だったな」、「有権者としてメディアリテラシーを持つことが、民主政治を実現する上で大切だったな。」、「「効率よく民主政治を実現するために政党があり、第一党から総理大臣を出すことが重要なんだったな。」、「小選挙区比例代表並立制が、自分たちの意見を適切に政治に反映し、民主政治を実現する方法なんだよね。」とこれまで学習した内容を確認する。その中で、初めて見る「議院内閣制と大統領制の仕組み」を読むことにより、議院内閣制については「お互いに辞めさせ合う権利があるんだな」や「内閣の過半数は国会議員から選ばれるんだな」、「議院内閣制は内閣と国会の結びつきがとても強いな」と理解する。また、大統領制については「弾劾って何だろう？…大統領を辞めさせることはできないんだな」や「各省の長官は議員以外から任命するんだな」、「法案を拒否できるんだ」、「大統領は総理大臣と比べてより強い権利がありそうだ」ということを理解する。その上で、『効率と公正』、『多面的、多角的視点』、『個人の尊重』、『民主主義』のスキルを活用して結びつきの強さについて読み解いていくことで、「最新の民意を反映したリーダーが政治を行うことが民主政治において大切だ。」や「内閣と国会がけん制し合うことで、政治が暴走しないようになる。」、「内閣と国会の結びつきが強いことで、政治がスムーズに行える。」といったメリットに気づき、議院内閣制が民主政治の実現に重要な役割を果たしていることを理解していく。一方で、「リーダーが変わらない方が安定して政治ができる。」、「結びつきが強い方が危険なこともあるかもしれない。」という大統領制のメリットにも気付くだろう。どちらにもメリットはあることが分かったうえで、日本は議院内閣制を採用していることを踏まえ、「国会議員を選ぶことが大切なので責任ある1票を入れたい。」や「世論で内閣に声を届けることが大切だ。」、「SNSを正しく活用して世論を形成する必要がある。」とこれまでの学習と結び付け、第二次のまとめとしたい。

第三次(11～14時間目)では、司法と三権分立について学ぶ。国民の権利を守り社会の秩序を維持するために法に基づく公正な裁判の保障があることを理解するとともに、国民の司法参加の意義について考察し、司法に対する国民の理解が深まり、信頼が高まることを期待して裁判員制度が導入されたことについて理解する。まず、身近な問題として、近隣トラブル「柿の実是谁のもの？」について考える。生徒は「Aさんの自宅側に枝が伸びているからAさんのものだ。」や「木がBさんのものだから」

らBさんのものだよ。」「じゃあ枯れ葉はどうなるのかな?」「実がなっている場合と落ちた場合で違うのかな?」と予想を立てたり疑問をもったりする。そこで、「どのように解決したら良いだろう?」と解決方法について問い掛けると「AさんとBさんが話し合う。」や「町内会長が間に入る。」「地域住民で多数決をする。」「裁判をする。」と考えるだろう。その中で、『効率と公正』のスキルを生かし「裁判するとかめんどくさいよ。効率が悪い。」や「でもその方が公正だよね。」といった意見が出てくる。その後、「この問題はどうなれば解決と言えるのか。」を考えていく中で、被害者の権利の回復、損害の賠償、権利を侵害した者の処罰など様々な視点から、公正な裁判を行うことがそれぞれの人権を守り、社会の秩序を守っていく方法であることを理解していく。次に、裁判の仕組みについて確認する。生徒は、「有罪と無罪だけだと思っていたけどそれは刑事裁判というんだ。」や「賠償金は民事裁判で決めるんだな。」「裁判によって関わる人が少し違うな。」といった刑事裁判と民事裁判の違いについて理解する。ここで、民事裁判では原告が国となることもあることを確認することが、以後に学ぶ三権分立の学習につながっていく。また、誰もが裁判を受ける権利を有している理由や、三審制の仕組みがとられている理由を『効率と公正』、『多面的、多角的』、『個人の尊重』のスキルから考察することで、国民の権利が守られていることを理解する。司法がより良い社会を実現する上で必要なものであることを理解した上で、「裁判に関する仕事に就きたいと思っている人はいますか?」と問う。数名が手を挙げるものの、多くの生徒は「弁護士や裁判官になるのは難しいよね。」や「そんなにたくさんの法律を覚えられない。」など否定的な意見を出すと思われる。そこで、司法制度改革の一つとして、裁判員制度があることを学習する。生徒は「司法の中にも自分たちが関わる機会があるんだな。」と思うと同時に「責任が重たそうで嫌だな。」や「心理的プレッシャーが…。」と不安を口にするだろう。資料からも、不安に感じる声が多いことを読み取る。そこから、「何のために裁判員制度があるのだろうか?」と疑問をもち、追究していく。資料から判決に国民の意見が取り入れられることを読み取り、司法への理解や信頼が深まることへの期待がもたれていることを理解する。一方で、「これまでに起きた問題を考えると、やはり裁判員にはなりたくない。」と思う生徒がいる。そこで、「どのようにしたらより良い裁判員制度になるのだろうか?」と課題を立て考えることで、より良い社会を考えるきっかけにしていきたい。第三次では、公正に裁判を行うことが全ての人の人権を守ることになり、より良い社会の実現につながっていくことや、私たちは最高裁判所裁判官の国民審査や裁判員制度を通して司法に関わる機会があるため、責任をもってその機会に参加することがより良い社会の実現につながっていくことを理解していく。

第四次(15~18時間目)では、地方自治について学習する。地方公共団体の政治の仕組みや住民の権利や義務について理解するとともに、主体的に地域社会を良くしていこうとする意欲を高めていく。初めに、富士市長選挙の候補者一覧を見ると、「12月に選挙があるんだよね。」や「前の市長さんは出ないんだって。」「富士市のリーダーは自分たちで選べるんだね。」「どんな人か詳しく知らないな。」などの意見が出ると思われる。「次は誰になるのかな?」と疑問をもったところで、「誰になったら良いと思う?」と問い掛ける。「公約が分からないと決められないな。」や「富士市の財政を良くしてほしいな。」とイメージを膨らませたところで「富士市の政治にどのように関わっていったらよいのだろうか。」と学習課題を立て、追究していく。地方政治の仕組みについて学習する中で、「地域の特色を生かして地域ごとに特色ある政治をすることが大切だ。」や「大統領制のようにリーダーと議員を選ぶんだな。」「署名を集めることで自分たちがより強く要求することができるんだな。」と国の政治との違いを理解するとともに、国政よりも参加できることが多いことに気付く。候補者の公約を見る中で「その公約、本当に実現できるのかな?」や「富士市ってそんなにお金がある

の？」と疑問をもったところで、富士市の財政をもとに地方財政について学んでいく。こうすることで、「人口の多い地域の方が、自主財源が多いんだな。」や「富士市は人口が減りつつあるからこれからが心配だな。」、「人口を増やすことを公約にしている候補者がいいんじゃないか。」と学習がつながっていくだろう。最後には、自分が願う富士市の姿があり、その考えに近い公約を打ち出している候補者を選ぶことができるようになっていく。ことを望む。

単元のまとめとして、単元を貫く課題「社会をより良いものにするために、主権を持っている私たちはどのように政治に関わるのが良いのだろうか。」について改めて考え、自分の意見をまとめる。私たちが政治に関わる機会は選挙、世論の形成、国民審査や裁判員制度、地方自治であることを確認し、「メディアから正しく情報を得た上で、日本を良くしてくれる候補者や政党に投票していく必要がある。」といった意見や「ニュースから正しい情報を得たり、SNS等を活用してより良い世論の形成をしたりしたい。」という意見、「裁判員制度の意義を考え、きちんと責任を果たしたい。」という意見や「富士市をより良くするために住民投票権や請求権を行使したり、富士市の政治にもっと目を向けるようにしたい。」という意見など、より良い社会の形成者たる主権者として、自分ができるようなことを見出す姿を期待している。

このように本単元では、単元を貫く課題を軸にしてこれまでに獲得してきた『効率と公正』、『多面的・多角的視点』、『個人の尊重』のスキルを意図的に繰り返し活用していくことで新たに『民主政治の実現』というスキルを獲得する。生徒が資料をどのスキルを活用して読み取ったり結び付けていったりしたかを焦点化していくことで学習の個別最適化を実現し、それらを生徒同士の関わり合いの中で深め合うことで、協同的な学びを実現していきたい。

5 単元の評価計画

時 数	学習内容	評価について				評価方法
		知	思	主	評価規準	
1	【単元の導入】 - 単元を貫く課題を確認する。 - スキルを確認する。 - 資料の使い方を確認する。			○	主：より良い社会の実現のために、自分たちが政治にどのように関わっていけば良いかを考えている。	・ワークシート 観察
第一次 (2 3 4 5 6)	【民主主義と日本の政治】 - 民主政治とはどのようなものか理解する。 - 選挙の仕組みと民主主義の関係について理解する。 - 選挙制度の課題について考える。 - メディアとの正しい関わり方について考える。	○	○	○	知：選挙に参加することの重要性について理解を深めている。 知：議会制民主主義の意義や、多数決の原理とその運用の在り方について理解している。 思：民主政治の推進と選挙との関連について多面的・多角的に考察し、分かりやすく表現している。 主：有権者としてどのように選挙に関わっていくべきかを自分なりに考えている。	・ワークシート ・ワークシート 振り返り ・ワークシート 観察 振り返り ・まとめ

第二次 (7 8 9 10)	【国会と内閣】 ・国会の役割と二院制のしくみを理解する。 ・国会の仕事と国会議員の活動を理解する。 ・内閣の仕事について理解する。 ・議院内閣制と今後の行政の課題について考える。	○	○		知：国会、内閣を中心とする我が国の民主政治の仕組みとその意味を理解している。 思：議院内閣制の意義について多面的・多角的に考察し、分かりやすく表現している。	・ワークシート ・ワークシート 観察 振り返り ・小テスト
第三次 (10 11 12 13 14)	【司法と三権分立】 ・裁判を行うことの意義と裁判の仕組みについて理解する。 ・司法制度における課題と司法制度改革について理解する。 ・権力分立制の意味について考察する。	○	○	○	知：国民の権利を守り、社会の秩序を維持するために、法に基づく公正な裁判の保障があることについて理解している。 思：権力分立制の意味について多面的・多角的に考察し、分かりやすく表現している。 主：自分がどのように司法に関わることができるかを積極的に調べたり考えたりしている。	・ワークシート ・ワークシート 観察 振り返り ・ワークシート
第四次 (15 16 17 18)	【地方自治と住民参加】 ・地方自治の基本理念や政治の仕組みについて理解する。 ・地方自治における住民の権利や義務について理解する。 ・地方財政の現状や課題について理解する。 ・どのような候補者が富士市の首長にふさわしいか考える。	○	○		知：地方公共団体の政治の仕組みや住民の権利と義務、地方財政の現状について理解している。 思：公約を基に富士市長にふさわしいと思う人物を考えることができる。	・ワークシート ・ワークシート 観察 振り返り ・小テスト
19	【まとめ】 ・単元の課題について自分の意見をまとめる。			○	主：よりよい社会の形成者として、自分がどのように政治に関わっていったら良いか考えている。	・ワークシート

6 本時の授業

(1) 本時の目標

日本で議院内閣制が採用されている理由を、『効率と公正』、『多面的・多角的視点』『個人の尊重』、『民主主義』のスキルを活用して大統領制と比較して考えることを通して、民主政治の仕組みやあらましについて理解を深めることができる。

(2) 授業過程

教室の発問と予想される生徒のあらわれ	学び方	◎教師の支援 ☆評価
歴代の日本の総理大臣とアメリカの大統領の表を比べてみよう。 ・日本は安倍さんがとても長くやっているな。 ・とても短い総理大臣もいる。任期がバラバラだな。 ・アメリカはどの大統領も4年間だけど、2回しかやっていない。 ・どうして日本とアメリカで、リーダーの任期が違うのだろう？ 日本とアメリカでは、どのように総理や大統領を決めているのだろう。	一斉	◎任期の違いに気付かない生徒には、日数以外に気になる数字が無いか探すよう助言する。
・総理大臣は国会議員の中から選挙されるって前回の学習で学んだよね。 ・総理大臣は国民が選挙した国会議員の中から選ばれるけど、大統領は国民から直接選挙されるんだな。 ・日本には内閣の不信任案と衆議院の解散があるから、総理大臣が変わることが多いんだな。 ・アメリカの大統領は弾劾されるだけで、辞める必要はないんだな。 ・日本の制度を議院内閣制、アメリカの制度を大統領制というんだ。 ・日本も大統領制にすればいいのに。直接選びたいよ。 ・なぜ日本では、議院内閣制なのだろう？	一斉 【スキル獲得】	◎名前の違いにしか気付かない生徒には、国会の仕組みとはたらしき学習した事項との関連で気付くことはないか助言する。
なぜ日本では、議院内閣制を採用しているのだろう。 ・これまでの授業で見たことのある資料が多くあるね。 ・議院内閣制の仕組みと大統領制の仕組みには、選ばれ方以外にどんな違いがあるのかな。 ・議院内閣制はお互いに辞めさせ合う権利があったり、内閣の過半数は国会議員から選ばれたりするんだな。 ・議院内閣制は内閣と国会の結びつきがとても強いな ・弾劾って何だろう？…大統領を辞めさせることはできないんだな。 ・各省の長官は議員以外から任命するんだな。 ・法案を拒否できるんだ。大統領は総理大臣と比べてより強い権利がありそうだ。 ・議院内閣制は国会と内閣の結びつきが強く、大統領制は大統領と議会が強く独立をしていることが分かったぞ。 ・結びつきが強いことはどんな意義があるんだろう？ ・これまでずっと考えてきた、効率と公正や民主主義の視点で考えてみると…	グループ	◎結びつきや独立性の強さに気付かない生徒には、不信任、解散、弾劾、拒否といった語句に着目するよう促し、違いに気付けるようにする。

【効率と公正】 ・選挙ごとに最も新しい国民の意見が取り入れられることは、効率が良いことだと思う。 ・選挙の結果、国民から最も支持されている政党からリーダーが出ることが、民主政治として公正なんじゃないかな。 ・リーダーと議会の意見が違うまま4年間も過ごすのは効率がとても悪いことだと思う。	【個人の尊重】 ・不信任と解散があることで、独裁政治のようになることを止める効果があると思う。 ・選挙の回数が多い方が時代の変化に対応した政治ができ、人権を守ることにつながると思う。 ・政党と内閣が一体化してしまうようになり個人の意見が大切にされなくなってしまうんじゃないかな。	【民主主義】 ・大統領制だと、SNSの影響によって結果が大きく左右されてしまうと思う。 ・議会と大統領で国民の気持ちがずれることは、民主主義として正しくないんじゃないかな。 ・内閣と国会の結びつきが強いと閣法の成立件数が多くなり、スムーズに政治を進めることができるんだね。
今日分かったことについて、自分の言葉でまとめよう。		
	個 ・日本では国会議員を選ぶ選挙制度によって民主政治を行おうとしているから、議院内閣制が採用されているんだと思う。 ・大統領制は行政と立法が強く独立しており、リーダーが変わらず安定した政治ができるメリットがある。でも私は、時代に合わせてリーダーが変わることの方が、メリットが大きいと思う。 ・議院内閣制では選挙が多く、衆議院と首相が何度も選ばれる。こうして自分たちの意見が政治に反映されていくことが分かった。 ・議院内閣制にも大統領制にもメリット、デメリットがある。その中で日本は議院内閣制をとっているのだから、国会議員の選挙が総理大臣を決めることにつながることを意識したいと思った。	◎議院内閣制の良い点に気付かない生徒には、議院内閣制の仕組みと既習事項がどのように結びつくか考えるよう助言する。 ◎大統領制のメリットにのみ気付いている生徒には、立法と行政が独立していることのデメリットを考えるよう助言する。 ☆民主政治の仕組みやあらましについて理解を深めている。 【知】観察、ワークシート ◎複数の事柄をうまくまとめられない生徒には、資料の中から読み取れた議院内閣制のメリットを1つ書くよう助言する。

3年3組 保健体育科授業案

授業者 勝又 陽一

1 日 時 令和7年11月6日(木曜日) 第5時

2 単元名 南中ソーラン(10/10)

3 単元目標

- ・南中ソーランの由来や、踊りの特徴を捉える言葉や用語を活用して自身や仲間の動きを分析することができる。また、ニシン漁の荒々しさが伝わるようにリズム感や力の緩急、動作の大きさに留意して踊ることができる。(知識及び技能)
- ・南中ソーランで表現したい内容が伝わるよう練習の工夫をすることができる。また、踊りの質を高めるために、ねらいをもって仲間との意見交換を行うことができる。(思考力、判断力、表現力等)
- ・『感動ある南中ソーラン』にするために、粘り強く何度も練習に取り組んだり、学習を調整したりすることができる。また、意見交換の際に根拠をもって考えを表現しようとすることができる。(学びに向かう力、人間性等)

4 単元構想 ※網掛け部分…本構想において重要だと考えたスキル

本校保健体育科では、単元のはじめのガイダンスで単元を貫く課題を提示し、「〇〇の練習をすれば、遠くに跳べるようになるかもしれない。」や「〇〇の動きを〇〇すれば、課題解決につながるだろう。」とその課題を解決したり、学習を深めたりするための予想や見通しを、生徒自らが立てることを大切にしている。また、課題解決のために必要となる手段(インターネットや実技書などの書物による情報収集、映像や動画での客観的分析)や練習方法(学習形態の選択、反復・段階的・発展的練習)、基礎的な知識・技能(運動にかかわる基本的な用語や行い方、技能の習得・向上に関する基本的な要点)を『教科のスキル』と定義し、そのスキルを身に付ける手立てを充実させることで、自信をもって活動に取り組んだり、自身の考えを、根拠をもって語れるようになったりすることができるような単元を構想している。スポーツには“する”、“みる”、“支える”、“知る”という様々な関わり方があり、『する』以外の視点にも焦点を当てることで、『教科のスキル』の向上を目指している。

本単元は、ソーラン節の学習である。広見小、丘小のどちらの小学校でも“よさこい節”を学習している。基本的なステップや動きを身に付けて、表現に必要な掛け声や鳴子を用いて運動会で踊り、「音楽に合わせて踊るのは楽しいな。」や、「自分が練習してきた演技を見てもらおうと達成感があるな。」という想いを抱いている。そこで、中学校では、3年間を通して“見せる”から“魅せる”に転換することをねらいとして、北海道の民謡であるソーラン節をアップテンポにアレンジした曲を用いた踊り“南中ソーラン”を取り上げる。本校では、体育大会を本単元における披露の場として設定しており、体育大会において1・2年生は一つの集団として披露し、3年生が最終プログラムで披露する。3年生の演技は、3年間の集大成としての場であるとともに、後輩へ伝統を引き継ぐ場と位置付けている。このため、中学校1年時は、2年生から振り付けを教わり、基本の振り付けを習得している。中学校2年時は、1年生へ振り付けを教えるために、振り付けを図示したワークシートを自作したり、参考動画を撮影したりと工夫を凝らした関わり方をしていた。また、

“力強い南中ソーラン”という課題を解決するために、グループで教え合う姿には後輩との活動が
生きている場面が多く見られた。

3年3組の生徒は、ハードル走の単元で、一連の動作を“スタートから1台目へのアプローチ”、
“ハードリング”、“インターバル”の3つの局面に分けて追究した際、「同じハードル間で走っ
ているのに、HYさんとAKさんのインターバルの歩数は違うね。」や「僕よりKKさんの方がハ
ードルを低く跳び越すことができているね。」と仲間との違いに気付く姿があった。しかし、その
違いに気付いても、「どうしてインターバルの歩数が違うのだろうか？」と疑問を抱いたり、「僕は
インターバルの歩数を何歩にしたら良いのかな。」と自分に置き換えたりすることができず、課題
解決自体を諦めてしまうことがあった。そこで、本単元では、生徒のつまずきから、練習方法や基
本的な要点を準備することで、生徒は必要とする場面を繰り返し確認したり、動画撮影の角度や再
生速度を自身で判断したりする姿が見られるだろう。このようにして、自ら学習を調整しながら粘
り強く学習に取り組む力を身に付けていく。南中ソーランに対する事前アンケートでは、本学級の
約6割の生徒が体育大会で南中ソーランを披露することに対して、「後輩や保護者の前で良い姿を
見せたい。」「昨年度先輩の演技を超えたい。」と肯定的な意見をもっている反面、約4割の
生徒が「人前で踊るのが恥ずかしい。」や「体育大会で踊る理由がわからない。」といった否定的
な意見をもっている。そこで、本単元では、単元を貫く課題を“感動ある南中ソーラン”とし、先
輩の演技を参考にしたり、後輩へ振り付けを教えたりしてきた生徒が、最上級生として単なる技術
習得にとどまらず、“感動ある南中ソーラン”とはなにかという考えを自分なりに構築することで、
思考力や自分の考えを表現する力を育んでいくことをねらいとする。また、南中ソーランにおける
ニシン漁における網を引いたり、舟を漕いだりする生活動作を模倣した身体表現の追究と、掛け声
や動作を揃えることでの集団美の追究していく活動を通して、南中ソーランについての理解を深め、
自分なりの考えをまとめていくことで、南中ソーランを踊ることに対して否定的だった生徒が、肯
定的な考えへと変容していく姿を期待したい。

はじめに、生徒は、課題解決のために必要な知識技能や手段、練習方法、より良い南中ソーラン
にするための要点を学ぶことで、今後の学習に見通しをもつ。次に、“感動ある南中ソーラン”と
はなにかという考えを明確にするために、自分なりの運動の取り組み方を考えていく。生徒は、I
C Tを活用して調べ学習をしたり、自身の演技を撮影して分析したりと、一人ひとりの能力や適性、
興味・関心に合った方法で学習するだろう。また、意見交換会を通して互いの考えを共有し、自身
の考えを広げたり、修正したりすることで、“感動ある南中ソーラン”に対する考えを再構築して
いくとともに、南中ソーランという日本の民謡やその踊りが持つ魅力や価値に生徒が気付いていく。

第1時では、ロイロノートに保存されている昨年度の自身の演技や、見本映像を見ながら既習事
項である南中ソーランの振り付けや要点を確認していく。「櫓漕ぎの動きがスムーズにいかない
な。」や「“どっこいしょ”の動きが3種類あるけど、順番が思い出せないな。」など、振り付け
の曖昧さや技術面につまずきを見せるだろう。そこで、昨年度に使用したワークシートの活用や、
再生速度を遅くするなどの動画視聴の要点を紹介することで、生徒自身が自分のつまずきを改善し
ていくだろう。また、「“構え”の姿勢を低くすることがポイントだった気がするな。」や「振り
付けを大きくすると、力強さが伝わるんだったな。」と昨年度学習した踊りの要点をつぶやいたり、
仲間同士で会話したりすることが予想される。このようなつぶやきや会話をもとに、「力強さを表
現するために必要なことはなんだろうか？」と投げ掛ける。すると、「振り付けに強弱をつけるこ
とでメリハリがつくよね。」や「櫓漕ぎのときは、常に左手の小指を見るようにすると体重移動が

大きくなるよね。」、「指先に力を入れて伸ばすと力感が伝わるな。」、「動作に高低差をつければつけるほど迫力が出るな。」と、昨年度に学習したことを確認し合うだろう。そして、『受け手に力強さが伝わる踊り方』の要点を生徒の言葉でまとめ、スキルとして定義していく。『受け手に力強さが伝わる踊り方』スキルをロイロノートにまとめておくことで、生徒は今後の活動で必要に応じて見返すだろう。第2時では、単元を貫く課題“感動する南中ソーラン”における自身の考えをまとめるために、マインドマップに自身のイメージをキーワードとして可視化していく。生徒は総合的な学習の時間で、マインドマップでの思考の可視化を『課題設定のスキル』として習得しているため、戸惑うことなく活動に取り組むことが予想される。マインドマップに記される内容は、「南中ソーランは北海道で生まれた民謡。」や「北海道のニシン漁を表現している。」などの南中ソーランにおける歴史的背景や、「体育大会で披露する。」や「後輩だけではなく、保護者や地域の方も観戦する。」などの本校での取り組み、「櫓を漕ぐ様子を表現した振り付けがある。」や「ニシン漁の網を引く動作を表現している。」などの既習事項、「なぜ“どっこいしょ”と掛け声を言うのかな？」や「南中ソーランが作られた目的はなんだろう？」などの小さな疑問の他、「仲間と揃う迫力。」や「努力の積み重ね。」のような感動につながる要素など多岐にわたるだろう。可視化された思考を根拠に、「〇〇をすることで、△△となるから感動する南中ソーランとなる。」と課題に対する自身の考えをまとめていく。「何を書けばよいかわからない。」と、活動が停滞する生徒に対しては、昨年度の体育大会における3年生の演技を見せ、「どこがすごいと思ったかな？」と投げ掛け、「感じたことを書いてみよう。」と“みる”、“知る”の視点にも着目していくことで、運動に対する捉え方を広げていく。第3時では、前時にまとめた自身の考えを確かめるための取組内容を検証するための練習計画を立てていく。生徒は、「2時間後に意見交換会があるから、次の時間で調べ学習を済ませなければいけないな。」や「体育大会まであと6時間しかないのか。次回までに参考動画を見ずに踊れるようにしないといけないな。」など、考えをまとめていくために、何をどのタイミングでどれぐらいの時間をかけて行うのか自分なりに学習を調整してくだらう。「どうしても時間が足りないな。」や「時間が余ってしまうな。」など、学習計画を立てることに苦戦する生徒には、前時にそれぞれが立てた仲間の考えを、ロイロノート上で閲覧できるようにするとともに、「自分と似た考えをもっている人はいるかな。」と投げ掛けることで、仲間の考えを確認したり、自身と似た意見をもつ仲間の取組を参考にしたりするなど、自分なりに学びを進めるだろう。さらに、「図書館へ行って調べ学習をしたいな。」や「南中ソーランの歴史について深く知っている人にインタビューをしてみたいな。」という生徒には、学び方の選択肢を用意することで学習意欲を高めたい。特に第3時以降の活動については、「うまくいかなくても大丈夫だよ。」、「次に生かせば良いからね。」と失敗を受容する雰囲気づくりを心掛けることで「ここまでやっても大丈夫なんだ！」や「失敗しても良いからチャレンジしてみよう！」と、失敗を恐れず粘り強く取り組む姿を期待したい。

第4・5時では、前時に立てた取組内容を基に自身の考えを確かなものにしていく。運動が得意なKOさんは、「力強い動きを追究していくことが観客の心を動かす。」と考え、第1時で獲得した『受け手に力強さが伝わる踊り方』スキルに着目するだろう。さらに、そのスキルを生かした振り付けが表現できるようタブレットで自身の演技を撮影し、参考動画と比較しながら活動することが予想される。分析が得意なMSさんは、「振り付けに込められた想いを理解して踊ることで、そのこだわりが観客に伝わる。」と考え、図書館で参考文献を読んだり、タブレット端末を用いて調べたりして南中ソーランの歴史や変遷、振り付けに込められた意味について理解してくだらう。

また、「一体感のある踊りが観客を夢中にさせる。」と、課題に対する考えが類似していたMEさんとASさんは、ペアを組み、振り付けが揃っているか確認し合うだろう。「一生懸命踊ることが大切。」など、漠然とした考えにより、取組の視点が曖昧なSNさんには、「どうしてそう思ったの？」や「実際にやってみてどうだった？」と問い、自身の活動を振り返ったり、「〇〇さんは△△な活動をしているよ。」と情報提供したりすることで、自身の取組の選択を選択できるようにしていく。それに加えて、ロイロノートに“課題に応じた取組内容”、“取り組んでみての収穫や課題”、“自身の考えの裏付けとなった場面”を適宜記録し、全員の進捗状況を蓄積するとともに、ロイロノートで共有し、常に他者の取組や活動を参照できるようにしておく。これによって活動が停滞した際に、異なる考え方や行い方に気付き、自身の考えを吟味するきっかけとなるだろう。なかには、「〇〇さんの振り返りを参考にすることで、考えが整理できたよ。」というように、さらなる学習意欲の向上につながることを期待したい。

第6時では、意見交換会Ⅰを行う。はじめに、第4時と第5時の実践を踏まえて、単元を貫く課題“感動ある南中ソーラン”に対する自分の考えを仲間に発信していく。つぎに、仲間の考えを聞いたり、気になる内容を質問したりして、「〇〇さんの考えは自分には思いつかなかったな。次からは△△も取り入れてみよう。」、「目標からずれてしまっていたな。こまめに友達や先生に確認する必要があるな。」と、活動を振り返ったり、自分の考えを再構築したりしていく。交換会を通して、「振り付けを揃えるだけでは、感動を与えられないと思った。あえてタイミングをずらしたりして、よりレベルの高い一体感を表現してみよう。」や「腰を落とした方が、力強さが伝わる理由を聞かれて説明できなかったな。もっと追究する必要があるそうだ。」など、課題についての自身の考えが深まったり、新たな疑問が生まれたりするだろう。そこで、ベン図やフィッシュボーン図といった思考ツールを活用し、思考を整理するとともに、仲間の考えと比較したり、関連付けたりして今後の練習内容や取組内容を明確にしていくとともに、新たな自身の考えをつくっていく。

「力強い動きを追究していくことが観客の感動につながる。」と考えて取り組んできたKOさんは、「腰が低い踊り」と「腰が高い踊り」を見比べ、腰が低い方が重心が安定し、手や上半身の動きにも力が伝わりやすいことに気付き、より細部にこだわって『受け手に力強さが伝わる踊り方』スキルを追究するだろう。「振り付けに込められた想いを理解して踊ることで、そのこだわりが感動となる。」と考え取り組んできたMSさんは、『課題設定のスキル』を活用し、第2時に取り組んだマインドマップを再活用し、それぞれの動作が表している生活動作を書いたり、“声”や“表情”など感動につながる要素を付け加えたりしていくだろう。「一体感のある踊りが観客を夢中にさせ、感動となる。」と考え取り組んできたMEさんとAKさんは、“感動する演技”と“ただ揃えるだけの演技”の共通点と相違点をベン図に整理し、表現力の工夫が必要であることに気付くだろう。

「ここからどう進めていけばいいかわからない。」と活動が停滞している生徒は、単元のはじめと、中盤に差し掛かった本時の演技や考えを比較し、図や文章で整理することを教師が促し、成長の過程や思考の変容を可視化することで、今後の見通しを立てていく。

第7・8時では、意見交換会Ⅰを踏まえて再構築した自身の考えを確かめていく。「力強い動きを高いレベルで体現することが感動につながる。」と考えたKHさんは、『櫓漕ぎのときは、指先が地面に着くぐらい姿勢を落とす』や『視線は常に指先を見る』など、第1時に確認した『受け手に力強さが伝わる踊り方』スキルの中からいくつか選択し、チェックポイントとして、振り付けを仲間同士で見合うだろう。「振り付けに込められた想いをより多くの人に理解してもらうことで、感動につながる。」と考えたKAさんは、仲間に伝えるために、ニシン漁における生活動作を表し

たそれぞれの振り付けを図解し、意見交換会で仲間へ掲示できるよう資料を作成するだろう。「あえてタイミングをずらすことも一体感につながり、観客を感動させることができる。」と考えたMEさんとAKさんは、隊形移動をしたり、後追い動作を取り入れたりするなど試行錯誤するだろう。

特に教師は、模範となる学び方や関わり方をしている生徒の姿や、効果的な課題への迫り方をしていいる生徒の表れを強く価値付けていく。第9時ではパフォーマンステストと、次時に行う意見交換会Ⅱに向けての資料作成を行う。パフォーマンステストでは、3年間の集大成となる体育大会での披露を終え、踊りの特徴を捉え、振り付けを正確に踊り、力強い演技となることを期待したい。

本時となる第10時では、意見交換会Ⅱを行う。前時までに考えを明確にするための時間を確保し、情報発信するための準備を丁寧に行ってきた生徒が、“感動ある南中ソーラン”についての自身の考えを表現していく。生徒は、ロイロノート上に共有された仲間の発表資料を見て、詳しく聞きたかったり、質問したりしてみたいと思った人の所へ出向き議論していく。「力強い動きを高いレベルで体现することが感動につながる。」と考えたKHさんは、自身が踊っている映像をタブレットで見せながら、考えを伝えるだろう。「振り付けに込められた想いをより多くの人に理解してもらうことで、感動につながる。」と考えたKAさんは、作成したパンフレットを仲間へ配布し、考えを伝えるだろう。「あえてタイミングをずらすことも一体感につながり、観客を感動させることができる。」と考えたMEさんとAKさんは、その場で音源を流し、実演しながら考えを伝えるだろう。生徒が自分たちのタイミングや方法、意思で意見交換ができるように、話し合いの材料(電子黒板・視点・ホワイトボード・ストップウォッチ・スピーカー)を用意しておく。考えを伝えることに苦戦しているRNさんには、ロイロノートに蓄積している毎時間の振り返りや、自身の取り組みを再度確認することを促し、考えを整理することで支援とするとともに、質問や意見が出ず、活動が停滞しているグループには、「どうして観客を感動させられると思ったの？」と教師が発表者に投げ掛けることで支援とする。最後に、単元を通して考えがどのように変容したのかを振り返ったり、課題に対しての考えをまとめたりする。豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育てるとともに、論理的思考力やコミュニケーション能力、実社会の中などで汎用的に生かすことができる力を育成していくことを大切にしていきたい。

5 単元の評価計画

時数	学習内容	評価について				評価方法
		知	思	主	評価規準	
1	【ガイダンス】 ・単元目標を確認する。 ・単元を貫く課題“感動ある南中ソーラン”を説明する。 ・既習事項である“南中ソーラン”の振り付けを思い出す。 ・『受け手に力強さが伝わる踊り方』についての共通認識を図る。			○	主：練習に積極的に参加し、授業のねらいを理解して取り組んでいる。	・観察

2	【自身の考えを構築】 ・マインドマップを用いて、課題に対する自身の思考を可視化する。 ・マインドマップに記した自身の疑問や、過去に学んだ知識を根拠に「〇〇の動きを〇〇すれば、感動ある南中ソーランとなる。」と、課題に対する自身の考えをまとめる。	○	○	思：課題に対する考えを思いつくかぎりマインドマップに記している。 主：踊りの特徴を捉える言葉や用語を活用して、自身の考えをまとめようとしている。	・ロイロノート ・観察 ・ロイロノート ・振り返り
3	【取組内容を計画する】 ・前時にまとめた自分の考えを確かめるための取組内容を計画する。 ・取組内容に合わせた練習方法や、学習形態を選択する。		○	主：練習の目的を明確にして、活動に見通しをもって取組内容を計画している。	・ロイロノート ・観察
4 5	【実践Ⅰ】 ・自身の考えを確かめる。	○	○	思：自身や仲間の課題解決のために、練習方法を選択したり、自身の考えを伝えたり、練習内容を工夫したりしている。 知：南中ソーランの由来や踊りの特徴を捉えた言葉と用語を活用し、自身や仲間の動きを分析している。 主：計画に沿って練習方法を工夫しながら、粘り強く取り組んでいる。	・ロイロノート ・観察 ・観察 ・ロイロノート ・観察 ・振り返り
6	【意見交換会Ⅰ】 ・これまでの実践を踏まえて、考えを仲間に共有するとともに、仲間の考えを聞く。 ・意見交換会Ⅰを踏まえて、自身の考えを再構築する。		○	思：課題に対して、考えを言葉や動きで仲間に分かりやすく伝えている。 主：仲間の意見を聞くだけではなく、自分の意見も言うなど、話し合いに積極的に参加している。	・観察 ・観察 ・振り返り
7 8	【実践Ⅱ】 ・自身の考えを確かめる。	○	○	思：自身の考えに応じた取組を選択したり、仲間の意見を踏まえて、取組内容を工夫したり、調整しようとしている。 知：南中ソーランの歴史的背景や動作の意味を理解し表現に生かしている。 主：練習の目的を明確にし、見通しをもって学習を調整しようとしている。	・ロイロノート ・観察 ・観察 ・ロイロノート ・観察 ・振り返り

	体育大会					
9	【パフォーマンステスト】 ・南中ソーランの振り付けに対する理解度をパフォーマンステストで確かめる。 ・意見交換会Ⅱに向けて、発表資料の準備をする。	○			知：踊りの特徴を捉えて、振り付けを正確に踊り、力強く表現している。	・生徒の演技をタブレットで撮影して映像で評価する。
10	【意見交換会Ⅱ】 ・“感動ある南中ソーラン”についての考えを表現することができる。 ・これまでの実践を踏まえて、考えを仲間に共有するとともに、仲間の考えを聞き、根拠を明確にして考えをまとめる。		○		思：課題に対しての自身の考えを言葉や動きで仲間に分かりやすく伝えている。 思：課題に対して、根拠を明確にして考えをまとめることができる。	・ロイロノート ・観察 ・観察 ・振り返り

6 本時の授業

(1) 本時の目標

“感動ある南中ソーラン”について自身の考えを構築し、検証してきた生徒が、考えを仲間に伝えたり、仲間の考えを聞いたりする活動を通して、根拠を明確に示して自身の考えをまとめることができる。

(2) 授業過程

教師の発問と予想される生徒のあらわれ	形態等	◎教師の支援 ☆評価
・EKさんの考え、私と似ているな。 ・私にはこの考えは思いつかなかった。この人に訊いてみたい。 ・やる気が伝わる踊り方って具体的に何だろう。質問したいな。 ・力強さがどうして感動に繋がるんだろう…？ ・統一感がある踊りを実際に踊ってみてほしいな。	個	◎聞きに行く友達が決まっていない生徒には、ロイロノートに共有された仲間の発表資料を見直すようアドバイスする。
誰の意見を聞くか決めたかな。周りを確認してみよう。	一斉	
・誰のところへ行くかまだ決まってない。どうすればいい？ ・聞きに行く友達は決まったけど、質問内容が思い付かないな。どう質問したらいいと思う？ ・私は、力強さにこだわっているKOさんの意見を聞きに行こうと思うよ。似た考えだから、参考になりそう。 ・私は、前回の意見交換会でも聞いたMEさんとAKさんから、もう一度話を聞いてみたいと思ってるよ。前回からどう変わったのか楽しみだな。 ・振り付けに込められた想いを追究していたMSさんの考えを聞きたいな。その想いを動きで表現する要点を質問してみたら面白いと思わない？		

意見交換会をしよう。

- ・踊りの歴史や特徴を捉えることが大切だと思った。自作した資料を見せるね。
- ・振り付けの由来を表現できるよう追究したよ。うまく表現できた場面を踊って見せるね。
- ・力強さを極めることが感動だ。実際の踊りを動画で見せるね。
- ・振り付けにメリハリをつけるとより際立つよ。力強さを表現すべき振り付けを紹介するね。
- ・統一感のある踊りは、一体感を生み出すことに気付いたよ。こだわった振り付けを2人で踊ってみるね。
- ・時間差をつけて踊ると、より一体感を表現できるよ。

- ・うまく自分の考えを説明できないな。せっかくこれまで頑張ってきたのに悔しい。
- ・意見の発表はできたけど、質問ができなかったな。
- ・櫓漕ぎの振り付けはニシン漁の水揚げを表現しているんだな。自分の踊り方で見ている人にその情景が伝わるかな。振り付けを確認してみよう。
- ・目線や指先、姿勢など、クラスで確認した『力強さが伝わる踊り方』を生かすタイミングを限定したほうが、メリハリがあって迫力が出るんだな。
- ・真剣な表情が一生懸命さや、懸けている想いが観客に伝わるな。あまり気にしたことがないけど、全力で頑張っている人の表情は確にかっこ良いと思う。
- ・振り付けを揃えることは意識していたけど、揃えるだけではなく、あえて踊りのタイミングをずらすことで踊りの一体感を出すこともできるな。〇〇さんが教えてくれたことも実践してみよう。

意見交換会を踏まえて、自分の考えをまとめてみよう。

- ・色々考えたけど、『感動ある南中ソーラン』とはなにか、考えがうまくまとまらない。やっぱり難しいな。
- ・KOさんの意見を聞いて、緩急をつけて踊ることで特にこだわった振り付けが強調され、感動につながると思った。
- ・歴史的背景を知ったうえで踊ることで、北海道のニシン漁に起源を持つ南中ソーランの『生き抜く力』や『仲間との連帯感』が重なり、感動を覚えやすくなると思った。
- ・動きを重ね合わせたり、拍数をずらして踊ったりすることで、迫力が生まれる。授業以外でも踊ってみたいな。

グループ【スキルの活用】

☆課題に対する考えを、言葉や文章、動きで表し、他者にわかりやすく伝えている。
 【思・判・表】観察
 ◎考えを伝えるのに苦戦している生徒には、ロイロノートを見て、取り組みを振り返るよう促す。

◎質問ができず、苦戦している生徒には、「なぜ感動すると思ったの？」と課題に立ち返る問い掛けをするよう声を掛け、積極的な意見交換を促す。

個

☆課題に対する考えを、根拠を明確に示し、まとめている。
 【思・判・表】ロイロノート
 ◎考えをまとめるのに時間がかかっている生徒には、仲間に助言をもらったり、ロイロノートを確認したりするよう促す。

3 年生 総合的な学習の時間授業案

授業者 高木 堅太郎

1 日 時 令和 7 年 11 月 6 日(木曜日) 第 5 時

2 単元名 生活と SDGs(25/34)

3 単元目標

- ・SDGs をテーマに探究的に学習する過程で、持続可能な社会を創っていくことの重要性を実感するとともに、直面している複雑で困難な課題を解決するために、社会全体で努力し続けていることを理解することができる。また、学年全体でのローテーションスキル学習(以下、R S 学習)等を通して、課題の解決に必要な知識及び技能(スキル)を身に付け、必要に応じてそのスキルを活用することができる。(知識及び技能)
- ・SDGs に関連する課題を実生活から見だし、R S 学習で得たスキルを活用して探究を進めていくことで気付いた思いや願いなどを、仲間や地域住民に発信することができる。また、様々な意見や価値観を尊重しながら、自分の考えを広めたり新たな課題をもったりすることで、持続可能な社会の実現について、考えを深めていくことができる。(思考力、判断力、表現力等)
- ・SDGs に関連する実社会や実生活の課題を、自分事として捉えて、探究学習に取り組もうとしている。また、自他のよさを生かしながら、積極的に課題の解決に取り組もうとしている。(学びに向かう力、人間性等)

4 単元構想 ※網掛け部分…本構想において重要だと考えたスキル

岳陽中校区は、小中一貫教育として SDGs を総合的な学習の時間で扱っている。生徒は中学 1 年時の総合的な学習の時間で、SDGs について調べた内容等を資料にまとめ、発表することを実施した。この度、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実の指定を受け、一昨年度末に研修部を中心に総合的な学習の時間の在り方を検討した上で、2 年生の総合的な学習の時間では、興味のあることや将来の夢など、自分が追究したいことを SDGs と結びつけながら探究学習を行った。具体的には、①追究する課題の設定、②R S 学習の実施による、自らの課題を解決するためのスキルの習得、③学級の垣根を越え、テーマの似た生徒同士で集まって行う計画の立案、④調べて終わるのではなく、実際にやってみたり、作ってみたりする“実践”の実施、⑤各教室にある総合的な学習の時間の掲示物によるヒントの取得、⑥ロイロノートや PowerPoint、ビデオエディターなどを駆使した発表資料の作成、⑦普段の学級や学年全体での発表、⑧ロイロノートを用いた振り返りと新たな課題の設定などである。振り返りでは、全体の約 2/3 の生徒が「来年度もテーマは変えず、今年できなかった〇〇をやりたい。」や「新たに〇〇という課題が見えてきたから、3 年生では〇〇を追究したい。」など、新たな課題を設定することができていた。

本年度は、昨年度に引き続き、協働する仲間とともに目的意識を高くもって探究できるように、学級を外して課題別のグループで活動している。授業者が担当している総合のクラスに所属している生徒は、昨年度のグループを解散して、新たな課題を設定した生徒が複数所属しており、約 1/3 の生徒が 3 年生になってから教室の変更があった背景がある。生徒が入れ替わったことで、昨年度からの変容がわかりにくいという欠点はあるが、新たな風が入ったことで、「2 年生のときの発表資料を見せてもらっても良い？」や「〇〇さんのグループの計画を参考にしても良い？」など、協働的な学びに

つながる良い学びも見受けられる。一方、昨年度から総合クラスが変わらない生徒は、情報の収集や整理・分析の力に長けていることに加え、「課題が解決したって言うには、〇〇もやる必要があると思うよ。」や「このままじゃ、結果に説得力があまりないよ。」、「この資料では見辛いし、面白くないよ。」などの意見を出し合う力も身に付いたため、根拠を示すことができるだけの質の高い実践や、聞き手が感心するような資料の作成ができていた。しかし、発表するための練習を十分に確保できず、まとめ・表現時に、それぞれのグループの長所が発揮されなかった。また、学年発表をした学級代表のグループは、内容もさることながら、感情豊かで声に抑揚があったり、身振り手振りが大きかったり、アドリブが上手だったりなど、高い発表スキルが発揮されたプレゼンを披露した。それから1年が経過し、昨年度の反省を生かした表現力と、持続可能な社会の実現に向けた思いがあふれる発表を、本時の授業で披露できることに期待している。

第1時は、学年集会を行う。中学3年生としての目標や今後の日程等を確認して、「3年生は何をテーマにしようかな？」や「課題は決まっているけど、どんな取組をしていけば良いだろう？」と、生徒が想起できるようにしたい。

第2～6時は、RS学習を行う。RS学習を実施する理由は、次の二つである。

- ①生徒が課題を設定したり、その課題を解決するための実践をしたりするためには、獲得したいいくつかのスキルから必要なスキルを選択して活用する必要があるため、選択できるだけの複数のスキルを身に付ける必要があるから。
- ②「〇〇について聞きたいときには〇〇先生に聞けば良いんだ!」のように、生徒がより多くの大人と関わりながら課題を解決できるとともに、教員が一つのスキルに絞って教材研究を行うことで、より専門性を高められるから。

昨年度は、年度のはじめに6回、夏休み明けに5回の、計11回のRS学習を実施した。これを受け、3年生で実施するRS学習の内容を、以下の表のように定める。

学習内容	目的
課題設定のスキル	課題設定に悩んでいる生徒が設定できるようにするため
アポイントメントのスキル	インタビューや職業体験を依頼できるようにするため
ディベートのスキル	物事を様々な視点から捉えて議論できるようにするため
企画書作成のスキル	自らの意見をまとめて提案できるようにするため
交流・発信のためのスキル	どこに依頼をすれば自らの課題を解決できるかを学ぶため

第7時は、課題の設定を行う。似ているテーマで昨年度に編成した生徒たちが再び集まり、今年のテーマについて吟味することで、「去年の振り返りで、3年生になったら〇〇を追究しよう決めていたけど、それで良いかな？」や「今年は〇〇をテーマに進めたいから、グループを解散してそれぞれで学習しよう。」、「グループは別々だけど、実践内容が似ているから、実践は一緒にやらない?」、「交流・発信のスキル学習で、CSDや社協の存在を知ったから、今年はそこと連携して課題を解決していこう。」など、個別最適な学びと協働的な学びの良さが共に生まれる姿を期待する。テーマや課題設定ができない生徒には、昨年度の実践やスキル学習で学んだことを確認し、具体例をいくつか提案することで、「〇〇はおもしろそう! やってみたい!」や「〇〇なら、私たちでもできそうだね。」など、前向きに学習を進められるようにしていく。なお、テーマを大きく変えて探究学習を進めたい生徒は、似ているテーマで学習を進めようとしている生徒と同じ教室で学習を進めた方が、その生徒にとっての最適な学びになる可能性が高いと考えられるため、次時以降に教室の移動をする。そこで、生徒や担当教員と話し合うことで、今年のテーマやグループを決められるようにする。また、地域と

連携するためにCSDと関わりたい生徒は、CSD依頼カードに必要事項を書き込み、そのカードを基にCSDと打合せをしたり、CSDを介して地域住民と関わったりすることで、生徒自身が地域の一人であることに気付き、人との関わりの中で成長していく姿が見られるだろう。

第8～11時は、情報を収集するための下準備として、これからの計画を立案して実践に移っていく。第7時でテーマや課題が決まった生徒は、「私たちの課題を解決するためには、夏休み中に〇〇の実践はしたいね。」や「早速アポイントメントを取ろう！スキル学習で学んだことを確認して、相手に失礼のないように練習してからがいいよね。」、「交流が必要だから、まずは皆の予定を確認しよう。」、「CSDが地域の方が集まる会議(学校運営協議会)で提案してくれた結果を確認しに行こう！」など、各々が獲得したスキルを活用しながら、計画を立案するだろう。ここでは、各グループの現状を正確に捉えるために、すべてのグループに声を掛けて状況を確認したり、ロイロノートに提出した計画表を添削したりするなど、入念に支援できるようにする。また、夏季休業を有効的に使えるようにするため、実践計画を確認したり、交流のためにアポイントメントをとったりするなど、第11時までに計画的に支援していくことに留意することも大切にしたい。

第12～14時は、各自の実践から得られた情報を整理・分析して発表用資料の作成をしたり、実践から得られた新たな課題を解決するための実践計画を立てたりする時間とする。第16時で行う途中経過の発表は個人で行うため、グループのメンバーそれぞれが役割を持ってまとめの作業に携わりながら、それぞれが感じたことを自分の言葉で説明できる姿を期待したい。「同じグループだとしても、個人で発表するんだよ。」と課題を投げれば、持続可能な社会の実現に向けた、自分の思いや願いに重点が置かれた資料の作成等を行うことができるだろう。しかし、個人での作業が進むと周りに頼れない生徒が困り始める可能性があるため、「夏休みの実践はどうだったの？グループ皆で情報を共有してから発表の準備に移った方が良くない？」や「いろんなグループの良いところを参考にしたらどう？少し見てきたら？」などと声を掛け、個別最適な学びが協働的な学びへと生かされるように支援していく。さらに、各クラスの総合コーナーに「持続可能な社会の実現に向けて、思いや願いを大切にしたい発表ができるようにしよう！」などの掲示をして、常日頃から生徒自身が目標をメタ認知できるように仕掛けていく。

第15時は、学級での中間発表会前のリハーサルとして、第27時から実施する本番発表用に作成した資料の一部を基に、実践した内容の個人発表を総合のクラスで行う。第16時に行う中間発表会の主な狙いは、普段違うクラスで探究学習をしている仲間が集まって発表を聞くことで、「あの人の実践内容は私の課題の解決に必要なから、話を聞いてみたいな。」や「テーマが似ているから、これからの探究学習中に具体的な話を聞いてみよう。」など、新たな協働的な学びにつなげていくことである。そのため、生徒は、自分たちの探究学習に興味をもってもらえるような発表をするためのリハーサルとなるよう意識したい。授業のはじめには、「大人になると、自分や自社を売り込むための、プレゼンテーションのスキルが必須になるだろうけど、何を意識すれば興味をもってもらえるだろう？」と問い、「ただ聞いているだけだと眠くなるから、周りと相談するみたいに、話し合いをする時間を作れば良いんじゃない？」や「通信販売のCMみたいに、大事なところでは声を張り上げよう。」、「この発表を聞くとどんなメリットがあるか、発表のはじめに話せば良いかな?」、「自信がなさそうだと聞いている方も不安になるから、前を見て堂々と発表したいね。」など、生徒それぞれが考えをもった状態になってからリハーサルを始める。リハーサルは、事前に組んだグループ内で、発表者・聞き手・評価者に分かれ、ローテーション形式で行う。発表者は、聞き手の反応を見ながら発表を行うことで、自身の発表を見直すきっかけとなるようにする。聞き手は、発表終了時に質問をして、発表

者の対応力を引き出せるようにするとともに、自身が発表する際のイメージをもてるようにする。そして、評価者は、発表の様子を観察してメモを残し、最後に発表者に助言することで、発表者だけでなくグループ全員で大切にしたいことを共有できるようにする。

第 16～17 時は、普段の学級で中間発表会を行う。「仲間からの質問を聞いて、まだ〇〇をやらなといけなことに気付いたよ！」や「他の発表者の資料を見て、自分たちに足りないことが分かった！」等、気付いたことから新たな課題を設定したり、次時以降で、第 15 時の構想に書いたような協働的な学習に生かしたりする生徒の姿が見られることを期待したい。

第 18～23 時は、中間発表会で得た新たな課題を解決しながら、本番発表会の資料完成を目指す。仲間と相談しながら進めていき、探究を通して生まれてきた思いや願いを伝えられるような準備を進められるようにしたい。

第 24 時は、次時に向けた最終準備の時間とする。まず、自分が聞き手として聞く発表の資料を読み込む。「どうしてこの発表資料はこういった構成にしているんだろう？」、「私が聞き手のときには〇〇について質問してみよう！」などの質問や、「〇〇を伝えたいなら、こんな資料や根拠が必要なんじゃないかな。」などと助言できるようにしたい。その後は、グループ内で発表練習をしたり、発表で見せる具体物を作ったりする時間とする。

本時でもある第 25 時は、本番発表会に向けたリハーサルとする。これまで磨き上げてきた、まとめ・表現する力が十分に発揮されるとともに、自身の思いや願いを伝えて、持続可能な社会の実現に近付こうとする生徒の姿に期待したい。第 15 時との違いは、他クラスで実践を重ねてきた仲間(3 年 5 組の生徒)がグループに入る。人数が多くなってしまうことで、部屋を 2 つ利用しないと生徒が入りきらないといった欠点はあるが、それ以上に、普段の姿を知らない生徒同士が関わりをもつことで緊張感のある発表になり、資料のまとめ方や発表方法の違いについて触れることができるといった利点が勝るだろう。互いに刺激を受けることで、次時以降の探究学習や、本番発表会の質が更に向上することを期待したい。なお、本校の研修では、生徒の学びの妨げにならないよう、授業中に参観教員が話し掛けないようにしているが、本時の授業においては、これからの未来を生きていく生徒にとって、大人との関わりがより深い学びとなることが考えられるため、授業参観者にグループに入ってもらいたいと考えている。参観者は、聞き手の質問の後に追加の質問をしたり、評価者の助言の後に追加の助言をしたりすることで、深い学びに一步でも近付けるようにしたい。

第 26～27 時は、リハーサルから得た新たな課題や視点を基に探究する、最後の学習の時間とする。思いや願いを軸としたより良い発表ができるための時間となるようにしていきたい。

第 28～31 時は、学級内発表を個人で行う。発表者は、探究学習の集大成としての発表を、質疑応答を含めて 5 分以内で行う。聞き手は、中間発表からの変容を感じながら発表を聞き、「あなたの思いが伝わってきたよ。私も〇〇を心掛けるようにするね。」、「発表が上手で、何が大切なのかよくわかったよ。」など、これまで探究学習を続けてきた仲間を認めるような温かい雰囲気になるような声掛けをしていくと共に、「この発表は、クラス内だけでなく、学年の生徒や地域の人にも聞いてもらって、より多くの人で持続可能な社会の実現を目指した方が良いね。」と、次時以降の学年発表会にふさわしい代表者の選出ができるようにしたい。

第 32～33 時は、各学級で選出された代表者による学年発表会を、体育館で実施する。昨年度も学年発表会は実施したが、生徒だけで行われたものであった。今年度の発表は、交流・発信に携わった地域住民や企業の方をはじめ、保護者にも見に来てもらえるようにして、質疑応答にも参加してもらう予定である。発表者は、より緊張した場面で発表をし、大人からの鋭い指摘に臨機応変に対応する

ことで、中学卒業後以降のプレゼンテーションに生かそうとすることができるだろう。また、発表を聞いている生徒も、「自分もいつか、大勢の前で発表する機会があるかもしれないんだよな。」や「大人になると、そういった視点で発表を見ているんだな。」などの感想をもつことに期待したい。

SDGs 学習最後の第 34 時は、自身の探究学習の振り返りを、ロイロノートを用いて行う。**RS 学習**で身に付いたスキルを活用して実践や発表をすることができたか、探究のサイクルを自ら回すことができるといったスキルが身に付いたか等を振り返る。中学校での総合的な学習の時間を用いた探究学習は第 34 時をもって終了となるが、高校へ進学後も探究学習が続いていくことや、社会に出てからも探究学習で学んだことが生かされることを確認し合うことで、これまでの学習を振り返るだけでなく、**探究学習を今後の生活にも生かそうとする生徒の姿**が見られたところで、本単元を終えるものとする。

5 単元の評価計画

時数	学習内容	評価について				評価方法
		知	思	主	評価規準	
1	【ガイダンス】 ・目標を確認する。 ・評価方法を確認する。 ・テーマを確認する。 ・予定を確認する。					
2 ～ 6	【RS 学習】 ・目標の達成に必要と考えられる 5 つのスキル(※単元構想参照)について、体験型学習を行い、スキルを獲得する。	○			知：課題解決のために必要なスキルを身に付けている。	・ロイロノート ・ワークシート
7	【課題の設定】 ・今年度のテーマや課題を設定する。					
8 ～ 11	【計画の作成】 ・課題を解決するために必要な計画を作成する。 ・交流・発信した内容(情報の収集)を実践レポートにまとめる(夏季休業中を含む)。	○	○	○	知：スキルを活用して、実践を行っている。 思：課題解決のための計画を立てることができる。また、情報の収集を行い、レポートにまとめている。 主：課題を自分事として捉え、取り組もうとしている。	・実践レポート ・ロイロノート ・実践レポート ・実践レポート

12 ～ 14	【探究学習①】 ・実践から得た情報を基に、発表用資料を作成する。 ・実践から得た新たな課題の解決のための計画を立てる。	○			知：持続可能な社会の実現に必要なことを理解することができている。 また、持続可能な社会の実現に向けて、探究を通して生まれた思いや願いを軸とした本番発表用資料を、スキルを活用しながら作成している。	・発表用資料
15	【リハーサル①】 ・作成した発表用資料を基に、『発表者・聞き手・評価者』に分かれて、発表練習をする。			○	主：自他のよさを生かしながら、より良い発表を創り上げようとしている。	・授業の様子 ・ロイロノート
16 ～ 17	【中間発表】 ・ここまでの探究学習について、学級内で個人発表を行う。		○	○	思：自身の実践を表現している。 主：発表を聞き、助言や賞賛を送ろうとしている。 また、今後の見通しを立てようとしている。	・ロイロノート ・ロイロノート
18 ～ 23	【探究学習②】 ・中間発表での反省や新たな課題を基に実践を行うとともに、発表用資料を作成する。	○			知：持続可能な社会の実現に必要なことを理解している。また、持続可能な社会の実現に向けた自分の思いや願い持ち、それらを軸とした本番発表用資料を、これまでに獲得したスキルを活用しながら作成している。	・発表用資料
24	【発表練習の準備】 ・仲間の発表用資料を読み込み、質問や改善点を言えるようにする。 ・次時以降の発表に向けた最終調整をする。					

25 (本時)	【リハーサル②】 ・作成した発表用資料を基に、発表練習をする。			○	主：自他のよさを生かしなが ら、思いや願いを大切にした、より良い発表を創り上げようとしている。	・授業の様子 ・ロイロノート
26 ～ 27	【探究学習③】 ・リハーサルでの反省や新たな課題を基に実践を行うとともに、発表用資料を完成させる。	○			知：持続可能な社会の実現に必要なことを理解している。また、持続可能な社会の実現に向けた思いや願いを軸とした本番発表用資料を、スキルを活用して完成させようとしている。	・発表用資料
28 ～ 31	【本番発表】 ・これまでの探究学習について、学級内で個人発表を行う。		○	○	思：持続可能な社会の実現に向けた思いや願いを表現している。 主：発表を聞き、助言や賞賛を送ろうとしている。	・ロイロノート ・ロイロノート
32 ～ 33	【学年発表】 ・各学級の代表者が、体育館で発表を行う。					
34	【振り返り】 ・自身で実践した探究学習や、学級の仲間や各学級代表の発表を振り返り、今後の生活に生かす。			○	主：探究学習を振り返り自分の言葉でまとめようとしている。また、持続可能な社会の実現に必要なことについて仲間と意見を交わし、今後の生活に生かそうとしている。	・ロイロノート ・意見交換の様子

6 本時の授業

(1) 本時の目標

これまでの探究学習の成果をまとめた資料を基に発表をしたり、発表を聞いて質問や助言をしたりする活動を通して、自他のよさを生かしながら、持続可能な社会の実現に向けた思いや願いが伝わる発表を創り上げようとしている。

(2) 授業過程 ※授業を参観される方も、発表者への質問や助言等をお願いいたします。

教室の発問と予想される生徒のあらわれ	学び方	◎教師の支援 ☆評価
何を意識すれば自分の思いや願いが伝わる発表になるだろう？ ・どんなに思いや願いがあったとしても、ずっと原稿を見ながらで声が小さいと、伝わらないよね。 ・思いや願いが聞き手に伝わり、実践の協力をしてもらうためには、それ相応の根拠が必要だね。 ・前のリハーサルの時みたいに、自分の発表を人に聞いてもらって評価してもらえば、新たな課題が見えてきそうだね。 グループの皆で思いや願いが伝わる発表を創り上げよう。 【発表をする】 ・聞き手の反応を見ながら発表しよう。 ・私の思いが伝わるために、抑揚をつけて発表しよう。 ・アドバイスがたくさんほしいな…。 ・その質問に答えられるだけの準備ができていなかったな…。 【質問をする】 ・質問するのって難しいな…。相手のためになる質問って何だろう？ ・自分が発表する時は臨機応変な対応ができるかな。 ・それを伝えたいのなら、根拠が弱い気がするな。具体的に何をしてきたのかや、なぜそれが必要なのかを聞いてみよう。 【評価をする】 ・発表者をよく見て助言できるようにしなきゃ。 ・発表の仕方や資料はとても良いけど、思いの部分がわかりにくかったよ。 ・こんな実践をやってみた上で、1人の力じゃ足りないことをもっとアピールしてみたらどうかな？ ・発表する際は、質問や助言を受けて、持続可能な社会の実現に向けて、更に実践を重ねる必要があるな。 ・発表者は、皆にも実践の協力をしてもらうために、説得力のある発表ができるようにしなきゃいけないね。 ・たくさん質問が出ていたことで、「自分の発表に質問するとしたら、どこを質問するだろう？」っていう視点をもつことが大切だと気付いたよ。 ・評価をつけたことで、より良い発表について、自分なりの考えを持つことができたよ。 ・評価シートと同じ項目で自分の発表を自己評価してみたら、目線と根拠が弱いことに気付いたよ。これからの課題だな。	一斉 グループ 個	◎思いや願いが伝わる発表の仕方をイメージできない生徒が、仲間の意見を参考にして目的意識をもつことができるように、数人の生徒に意見を求め、考えを繋げていく。 ◎質問や助言に困っているグループには、「発表者の思いや願いは何だったの？」や「わかりにくかった理由は何だろう？根拠は十分だった？」、「思いが伝わったり、願いが叶ったりするためには、これからどんな学習が必要だと思う？」などの声掛けをする。 ※授業参観者も生徒の意見交換が落ち着いたところに、質問をしたり、評価したりすることで、大人の視点から発表のヒントを得られるようにする。

本番発表会に向けて、これから探究したいことや、
本番発表会で意識したいことをまとめよう。

- ・誰かに発表を聞いてもらい、評価してもらうことで、新しい視点が見えてくることがわかりました。
- ・「多くの人に協力してもらうためには、もっと感情を込めた方がよいよ」と評価者に言われたので、本番ではもっとメリハリをつけて、仲間に訴えるように発表しようと思いました。
- ・仲間の発表を聞いて、いろんな課題が山積みであることがわかりました。自分事として捉えて、より良い社会になるように協力していきたいと思いました。
- ・大勢の前で発表することがこんなに緊張するとは思わなかったです。本番までに更に実践を重ねて、根拠をもって発表することで、相手に思いが伝わるようにしたいです。

☆自他のよさを生かしながら、持続可能な社会の実現に向けた思いや願いが伝わる発表を創り上げようとしている。

〈【主】ロイロノート等〉

◎自分の考えをまとめられない生徒には、仲間からどんな助言があったかを思い出すように声を掛けたり、一緒に発表資料を見て、今後の展開を確認したりする。

R7年度 総合的な学習の時間 全体計画

全体目標

SDGsについて、学ぶ主体である子ども自身が、学習材・学習時間・学習環境・学習機器等の学びの選択権を持ち、試行錯誤しながら自分の“最適”を探し続ける。また、そのような経験をした子どもが集う協働的な学びにより、視野が広がったり、相互に得られた気付きや深められた知識・技能が、再び個の学びに還元されたりする。

～日々の授業に選択肢を～

◆各教科においても、「子どもが選択肢を持つ」要素を取り入れる。

総合的な学習は、“個別最適な学び”を実践しやすい学びの1つです。しかし、各教科の授業において、子どもが調べたり、まとめたり、発表したりする際に選択肢を持てるようにしましょう。一斉指導では“個別最適な学び”に限界があります。子どもにとって、「やりたいこと」がある学校をつくっていきましょう。

◆道徳科教育との連携

道徳科の授業には、「SDGs」の目標と結びつけることができる教材が、たくさんあります。教材や発問、学習の支援で、SDGsを関連付けましょう。

◆特別活動との連携

委員会活動はSDGsと関連付けやすいです。「〇〇委員会として、持続可能な社会にしていけるために何ができるだろう？」と、委員長だけではなく、委員会全体のテーマとして、協働的に学べると良いです。
(例)
落ち葉掃きボランティア
残飯0啓発ポスターの作成 など

目標達成のための4つの柱

【子どもに選択肢を与え、自己決定させる】

子どもによって、「1人で学んだ方が効率が良いな」「他のグループに意見をもらいたいな。」「動画より PowerPoint でまとめたな。」など、考え方は様々です。教師から、「グループで実施しましょう。」「パワーポイントでまとめましょう。」と、選択肢を狭めてしまえば、“個別最適な学び”の達成は難しいです。子どもに委ねることに不安はあるかもしれませんが、「みんなで同じことを同じように。」という同調圧力の中で、すべての子どもの成長は難しいです。総合的な学習の時間は、学級担任1人で完結させるものではありません。級外の先生を含めた学年部の教師全員で、学年すべての子どもたちの“個別最適な学び”を支援し、協働的な学びになるようなコーディネートをしていきましょう。

【スキル学習（ローテーション総合）】

子どもに選択肢を持たせるためには、選択できるだけの知識が必要です。そのため、年度初めの総合で、スキル学習を行います。
「課題ってどうやって決めるの?」「まとめる方法ってどんな方法があるの?」「電話でアポイントメントを取りたいけど、どうやってやれば良いの?」そんな疑問を解決するために、講話ではなく、体験型学習で積み重ねていきたいです。そこで、“ローテーション総合”を提案します。学年部の教師全員が1つのテーマについて、8クラスあるなら8クラス(もしくは4クラスを教員2人で)に授業をします。学年部の教員数が12人だったら、12(6)時間分の総合の時間を1時間分の教材研究で賄えますから、教師の専門性が高まることに加えて、日常業務の負担軽減も期待できます。子どもたちも「〇〇について誰に相談しよう?」となれば、担任だけでなく、その授業をしてくれた先生に聞きに行くという選択肢が生まれます。

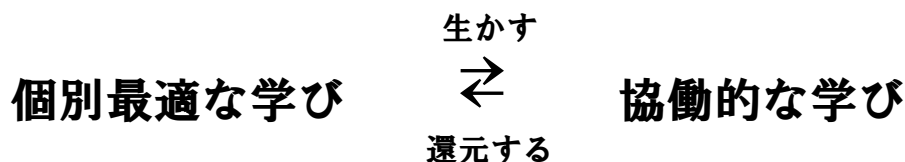
【“総合コーナー（教室掲示）”の実施】

各クラスに、“総合コーナー”を作ります。「この子のテーマは私と似ているな。よし、話を聞いてみよう。」「あの子のまとめ方上手だな。よし、作り方のコツを教えてもらおう。」と子どもが考えたら、それが“協働的な学び”となり、またその後の“個別最適な学び”に還元されるはずです。すべての学級で、背面黒板の一面のスペースを“総合コーナー”にしましょう。スペースが足りなければ、廊下側スペースに広げていきましょう。

【小学校との連携】

丘・広見小学校の総合的な学習の時間を含めた、授業見学に行きます。「小学生はこんなことをしているんだな」「掲示物が参考になるな」「これは“個別最適な学び”にするための手法だな」など、教師の引き出しを多くしていきましょう。そして、9年間を見据えた総合的な学習の時間を一緒に考えていきましょう。

上記の柱に内容を変更して2年目となります。
新たに始めたことをなくすのではなく、改変していきと思っています。
来年度は、一斉研の発表があります。発表があるからどうこうではないですが、



総合的な学習の時間でも、研修主題を意識して展開しましょう。

2年5組 英語科授業案

授業者 稲葉 広将

1 日 時 令和7年11月6日(木曜日) 第5時

2 単元名 Unit6 How can we make a good presentation?(6/9)

日本とフィリピンを比較しながら両国の良さを伝えよう。

3 単元目標

- ・比較級、最上級、同格比較の特徴やきまりに関する事項を理解している。実際のコミュニケーションにおいて、日常的な話題や社会的な話題などについて、事実や自分の考え、気持ちなどを、簡単な語句や文を用いて、またはそれらを正確に用いて話すことができる。(知識及び技能)
- ・コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題などについて、事実や自分の考え、気持ちなどを、簡単な語句や文を用いて、伝え合うことができる。(思考力、判断力、表現力等)
- ・外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的に英語を用いて伝え合おうとしている。(学びに向かう力、人間性等)

4 単元構想 ※網掛け部分…本構想において重要だと考えたスキル

英語科では、生徒が言語活動の必然性をもつために、目的、場面、状況を明確にした言語活動に取り組んでいる。これまで英語科における言語活動では、「富士市の魅力を伝えよう。」や「英語で買い物をしてみよう。」といった生徒の興味、関心を引くような場面設定を提示し、仲間と一緒に活動することを通して、目的、場面、状況に応じて外国語でコミュニケーションを図る力を育成するために取り組んできた。生徒は中学1年時に、「友達に推しを紹介しよう。」や「ALTに富士市のおすすめスポットを伝えよう。」などの言語活動に取り組んだ。この活動を通して、生徒は「自分の考えを英語で表現することができた。」や「友達やALTに自分の英語が伝わってうれしい。」という喜びや達成感を味わうことができた。しかし、英語を話すことや書くことに自信がもてないでいる生徒も少なくない。英語でコミュニケーションを取る喜びや達成感を味わうためには、英語表現の知識や技能の習得を積み重ねていくことが不可欠であると考え。英語科ではこの知識や技能を活用することを英語のスキルと捉えている。日々の授業の中で、英語の文章構造や用法、発音の仕方といった英語の知識や技能を少しずつ身に付けると同時に、英語科で定義するスキルを存分に発揮して、単元中や単元末の言語活動に生かしていけるようにしたい。生徒はその過程の中で学びを実感していくことだろう。そこで単元構想を次のようにデザインした。

今回の単元は、二つ以上のものを比べる比較表現を学習する。単元の始めに、生徒に単元の最終課題を明確に提示することで、生徒が自ら必要感や見通しをもって比較表現の知識や技能を習得していけるよう単元を組み立てていく。今回の単元のテーマは「日本とフィリピンを比較しながら両国の良さを伝えよう。」とした。前単元でALTがフィリピンの学生がどのような学校生活を送っているのかという話題について話をした時に、生徒はフィリピンの学校で学習する教科やクラブ活動、学校の決まりなど、日本の学校と様々な違いがあることに驚き、異文化に興味をもったことが、本単元のテーマ設定の理由である。

単元の導入の第1時では、フィリピン出身のALTの家族が、日本とフィリピンとを比べるとどのような違いがあるのを知りたいと言っている、ということを生徒に伝える。生徒は「気候とか人口とかが違う。」、「日本では人気のあるスポーツは野球やサッカーだけど、フィリピンもそうなのかな?」、「日本とフィリピンの学校生活の違いを伝えられそうだ。」、「フィリピンのことをよく知らないから調べてみたい。」などと反応を示すだろう。単元の終末に、ALTの家族に向けて、日本とフィリピンを比較してその違いや良さを伝える活動を行う。そこへ到達するまでの過程として、フィリピンの文化に対する理解を深めること、比較表現の知識や技能を少しずつ身に付けていくことを説明し、今後の学習に見通しがもてるようにしたい。単元の最終課題を伝えた時に、生徒たちから「フィリピンについてよく知らない。」や「フィリピンについてもっと知る必要がある。」という意見が出てくるだろう。そのため、フィリピンの文化に対する理解を深めるためにはどのような方法があるか、生徒たちに問い掛け、様々な方法で調べる時間を設ける。このような学びの選択が個別最適な学びにつながると考える。「日本とフィリピンの人口を調べてみよう。」、「日本とフィリピンの文化や習慣の違いを調べてみたいな。」、「フィリピンで一番人気のあるアニメって何だろう。」など、生徒が外国の文化に対する知識と理解を深めながら、興味、関心をもって取り組むことを期待する。

第2時から第6時まで比較表現の知識や技能の学習を進めていく。第2時では、二つの物を比べる“A is ~er than B”という比較表現を学習する。生徒にスカイツリーの写真とフィリピンの建物の写真を見せながら「Which is taller?」と問い掛ける。「どっちが高いって聞いているのかな。」や「フィリピンにもこんなに高い建物があるんだ。」と興味を示すだろう。二つの物を比べるために“A is ~er than B”という表現があるということを確認し、日本とフィリピンの気温、山や建物の高さ、川の長さが記載してあるカードを見て、二つのものを比べる文を作り、口頭で繰り返し練習する。また、話したことをまず書くことで理解の定着を図り、二つの物を比較する表現を身に付けていく。また、ロイロノートの資料箱に様々なジャンルのフィリピンで有名なものや人気のあるものを用意し、フィリピンに関する知識を得るための手助けとなるようにする。このことにより、生徒の興味、関心をもとに情報を選び出すことで、フィリピンの文化に対する理解を深めるきっかけになることを願う。

第2時までに、フィリピンの文化や自然に興味をもった生徒に、第3時ではフィリピンで一番高い山、一番高い建造物、一番長い川などのフィリピンに関する情報を生徒に提示する。「フィリピンで一番高い建物よりスカイツリーの方が高いんだね。」や「フィリピンにはこんなに長い川があるんだ。」と初めて知る知識に興味をもつだろう。グループの仲間と比較表現を確認しながら、英文を作成していくことで、新たな表現方法を身に付けていくことを期待する。

スポーツが好きなAさんは、自然や文化だけでなくスポーツにも目が向くだろう。そこで第4時では、「What is the most popular sports in the Philippines?」と問い掛ける。「フィリピンで人気なスポーツって何だろう、野球かな。」と興味をもって考えたり、前回学習したことを踏まえて、「mostってどういう意味?一番〇〇っていう言い方はestをつけるから、popularestじゃないの?」と疑問をもったりするだろう。ここで新たな知識として、比較的長い形容詞や副詞の場合、比較級はmore+形容詞・副詞、最上級はthe most+形容詞・副詞という表現があることを確認する。その後、日本やフィリピンで一番人気のあるものや有名なものの情報を参考にしながら、生徒は自分の嗜好に沿った題材を選ぶだろう。「アニメについて書いてみよう。Naruto is more popular than Detective Conan in the Philippines.」や「日本で一番美しい山は富士山って書きたいから the most beautiful を使えばいいんだよね。」と主体的に日本とフィリピンを関連させた文を作る姿を期待したい。

これまでは比較をする表現を学習してきたが、生徒から「そんなに差がないときはどうしたらいいの？」という疑問があがることが予想される。そこで第5時では、新しい知識として“同じくらい〜である”という意味を表す同格の比較表現を学習する。提示された日本とフィリピンの情報を確認しながら「日本もフィリピンも暑い国なんだね。The Philippines is as hot as Japan.」と外国との違いに興味を示しながら英文を考えていくだろう。

ここまで、日本とフィリピン両国を比較しながら学びを深めてきた生徒は、両国が互いにもつ良さに気付いていくだろう。そこで、本時である第6時では、改めて両国の文化の良さについて考えてみようとして投げ掛ける。文化といっても幅が広いので、どんなジャンルで比べられるかと生徒に問い掛けると、「アニメかな、日本のアニメは海外でも有名だから。」や「食べ物について、外国人にとって和食は人気があるから。」と日本の文化の良さや誇れるところは何かと考える生徒や、フィリピンの文化の良さを紹介したい生徒もいるだろう。ALTが「I like Halo-Halo better than ice cream because Philippines' s Halo-Halo is the best. 」と自国について話をする。生徒は「better は比べる表現なんだね」や「best は一番っていうこと？」と新しい表現に気付くだろう。「好きなものを比べる時は better を使うんだね。私はアニメについて書きたいな。」や「I like Tokyo Disney Resort better than USJ. 理由も付けて伝えたいな。もうちょっと説明を加えてみよう。」とALTの表現を参考にしながら、どのように比較表現を使ったら良いか考えながら英文を書く。また、個別最適な学びになるよう、ワークシートに手書きをする、ロイロノートに入力する、タッチパネル機能で書き込むというように学習方法を選択させ、生徒一人一人にとって学習しやすい環境を整える。生徒は自分の英文が完成すると、みんなに自分の気持ちを伝えたり、友達の意見を聞いたりしたいと感じるだろう。「Aさんはこんなアニメが好きなんだ、私と同じだ。」や「Bさんはフィリピン料理について詳しく説明している。フィリピンにはこんな料理があるのか。」、「Cさんはディズニーリゾートについて伝えている。日本のディズニーリゾートは世界に誇れるものだ。」と自分の考えや気持ちを相手に伝え合う。授業が終わったときに、「英語で自分の考えを伝えられてうれしい。」や「改めて日本の文化やフィリピンの文化の良さを再認識した。」という感想をもつことを期待する。

生徒はこれまで、日本とフィリピンを関連させて比較をする英文をいくつか書きためているので、それらを使い発表したいという思いをもつだろう。そこで第7時では、これまで学習したことを活用して、プレゼンテーション資料を作成する。今まで考えた英文を組み合わせたり、順番を変えたり、補足の説明を付け加えたりしながら、自分が伝えたい内容に編集してプレゼンテーション資料を作成していく。「食べ物について伝えたいな。」、「日本とフィリピンの人気のあるアニメやゲームについて教えたい。」、「日本とフィリピンの学校生活についてまとめよう。」など伝えたい内容をこれまで学習した表現を振り返りながら英文作りを進めていくことを期待する。

第8時では、ペアやグループの友達、ALTや担任など、自分が聞いてほしい相手に自分が作成したプレゼンテーションを発表する。「ここはこの言い方のほうがいいんじゃないかな。」や「こうやって言えばいいんだ。」と友達の発表を聞いて感想を伝え合ったり、アドバイスをしたりして、自分の発表を改善していく姿を期待する。単元の最後に行うALTとのプレゼンテーションの前に、自信をもって取り組むための準備の時間としたい。

単元の終末に、ALTに「日本とフィリピンを比較しながら両国の良さを伝えよう。」というテーマでプレゼンテーションをする。プレゼンテーションを通して「学習した英語表現を使えた。」や「日本の文化と外国の文化の良さを理解できた。」、「自分の話す英語が伝わってうれしい。」と英語が伝わる喜びや満足感を得ることを期待し、次單元へとつなげていきたいと考える。本単元を通して、

学習指導要領にもある「他者を配慮し受け入れる寛容の精神や平和・国際貢献などの精神を獲得し、多面的思考ができるような人材」として育ててほしいと願う。

5 単元の評価計画

時 数	学習内容	評価について				評価方法
		知	思	主	評価規準	
1	【フィリピンと日本にはどんな違いがあるかな】 ・ジェーン先生の家族が知りたいことについて理解する。 ・習得すべき表現を確認する。	○			知：A L Tの話す英語を聞き、内容を理解している。	・ワークシート ・ロイロノート ・観察
2	【日本のスカイツリーとフィリピンで有名な建造物はどちらが高いかな】 ・er thanの比較表現の特徴や用法を理解し、日本とフィリピンを関連させた文を少しずつ作成していく。	○			知：～er thanの比較表現の特徴や用法を理解している。	・ワークシート ・観察
3	【フィリピンで一番高い山は何か】 ・フィリピンで一番高い山など、提示された情報を比較表現を用いて英文を作る。	○			知：the ～estの比較表現の特徴や用法を理解している。	・ワークシート ・観察
4	【フィリピンで一番人気のスポーツは何か】 ・日本やフィリピンで人気のあるアニメやスポーツなどについてmore than、the mostを用いて英文を作る。	○			知：more than、the mostの比較表現の特徴や用法を理解している。	・ワークシート ・観察
5	【日本とフィリピンの気温は同じくらい】 ・日本とフィリピンを比べて同じくらいなものをas～asを用いて英文を作る。	○			知：as～asの比較表現の特徴や用法を理解している。	・ワークシート ・観察

6	【日本とフィリピンの良さについて考えてみよう】 ・ better 、 best を使った比較表現の特徴や用法を理解する。 ・ 自分たちが考えた日本の文化の良さやフィリピンの文化の良さについて英文を書く。	○	○	○	知： better 、 best を使った比較表現の特徴や用法を理解している。 思： better、 the best を含んだ比較表現や既習表現を用いて、自分の考えや気持ちなどを表現したり、伝え合ったりしている。 主： better 、 best を使った比較表現やの特徴や用法について考えようとしている。	・ ワークシート ・ 観察
7	【日本とフィリピンの良さを伝えよう】 ・ ジェーン先生の家族に日本とフィリピンを比較しながら両国の良さを伝えるために、これまで学習した比較表現を活用し、伝えたい内容をまとめる。	○	○	○	知： 比較表現を理解し、活用している。 思： 日本とフィリピンについて比較し、これまで学習した比較表現を用いて英文を書いている。 主： これまで学習した比較表現を用いて英文を書くようとしている。	・ ワークシート ・ ロイロノート ・ 観察
8	【日本とフィリピンの良さを伝えよう】 ・ 友達のプレゼンを聞いて、お互いにアドバイスをしたり、感想を述べたりする。 ・ ペアでプレゼンの練習を繰り返し行い、自分のプレゼン内容や発表の仕方を改善する。		○	○	思： 比較表現を活用し、日本とフィリピンの違いを口頭で伝えている。 主： 自分の発表の仕方をよりよいものにしようとしている。	・ ワークシート ・ ロイロノート ・ 観察
9	【日本とフィリピンの良さを伝えよう】 ・ A L T にプレゼンテーションをする。	○	○	○	知： 比較表現を理解し、活用している。 思： 比較表現を活用し、日本とフィリピンの違いを口頭で伝えている。 主： 比較表現について学んだことを学習に生かそうとしている。	・ 発表の観察 ・ ロイロ録画

6 本時の授業

(1) 本時の目標

日本の文化の良さやフィリピンの文化の良さを伝えるために、どのように比較表現を使ったら良いか考えながらセンテンスを作ったり、日本やフィリピン両国の文化で自分がより好きなものを、理由を付けて答えたりする活動を通して、両国の文化に対する理解を深めながら、 better、 the best を含んだ比較表現を用いて、自分の考えや気持ちなどを表現したり、伝え合ったりすることができる。

(2) 授業過程

教師の発問と予想される生徒のあらわれ		形態等	◎教師の支援 ☆評価
お互いの国を知るために日本とフィリピンの文化の良さについて考えよう ・どんなジャンルを考えた？ [アニメ] 日本のアニメは世界中で人気がある。 [スポーツ] 日本とフィリピンで人気があるスポーツを考えたい。 [アミューズメントパーク]ディズニーについて詳しく伝えたい。 [食べ物] フィリピンで有名な食べ物を紹介したい。 better、best を使って日本とフィリピンの文化の良さを表現してみよう。 ・好きなものを比べるときは better を使うんだ。 ・I like soccer. ここまではわかった。 1 番好きって言いたいけど、どうすればいいんだ。 ・I like Tokyo Disney Resort better than USJ. 理由も伝えたいから、because・・・ ・I like detective Conan the best. It is the most famous anime in Japan. アニメについての説明を加えたほうが伝わりやすいかな。 友達のを聞いてみよう。 ・Aさんはこんなアニメが好きなんだね。 ・Bさんはフィリピン料理について詳しく説明している。 ・A L Tのジェーン先生はどんなフィリピン料理が好きなのか聞いてみたくなった。 ・Cさんはディズニーが好きなんだ。日本のディズニーは世界に誇れるものだな。 〈振り返り〉 ・better や best を使うと日本とフィリピンの文化を比較することができるんだね。 ・日本とフィリピンの文化の違いや良さが分かった。 ・今度はフィリピンだけでなく、いろいろな国の文化の良さを伝えてみたいな。		一斉 	

2年1組 理科授業案

授業者 齋藤 太嗣

1 日 時 令和7年11月6日(木曜日) 第5時

2 単元名 雲ができる仕組み (7/10)

3 単元目標

- ・天気に関する基本的な知識を身に付け、霧や雲の発生についての観察や実験を行い、雲ができる仕組みについて気圧、気温及び湿度の変化と関連付けて理解することができる。

(知識及び技能)

- ・単元で新しく身に付けた知識や既習事項を活用し、霧や雲ができる仕組みについて、実験を立案し、その結果を分析して解釈することで、規則性や関係性を見だし、その仕組みについて表現することができる。

(思考力、判断力、表現力等)

- ・霧や雲ができる仕組みを明らかにしていく過程で、実験内では仮説と結果を比較し、粘り強く考える姿、学習マップから問題解決のために見通しをもった計画や改善しようとする態度、仲間との共有から多様な考えを認め、より良く問題を解決しようとする態度を身に付ける。

(学びに向かう力、人間性等)

4 単元構想 ※網掛け部分…本構想において重要だと考えたスキル

本校理科部では、VUCAの時代の今、将来を担う子どもたちが生きていく上で必要となる資質・能力は、知的好奇心から主体的に問いを設定し、自立して学んでいく力だと考える。そのため、授業において、生徒が根拠になるものを自分自身で探し、分析することを大切にしている。単元ごとに生徒が自分の進捗で、実験方法の立案や検証を進めることができる探究的活動の時間を設定し、生徒は縛られた発想にとらわれず、発想力を活かし、自分の考えを表現することを楽しむ様子が見られる。また、生徒自ら考える時間を多く確保することで、得られた結果や考察で生まれる違いから「結果の妥当性を判断するには、仲間と共有し、比較することが必要だ。」という考えが生徒に身に付いてきている。

本単元では、中学1年時に学んだ状態変化による物質の変化などの既習事項や単元で新しく学ぶ霧ができる仕組みを理解した上で、山頂に雲ができる仕組みの解明に挑む。生徒は、雲が朝以外にも常に生じるなどの霧との違いから「今まで学んだ知識だけでは、課題を解決できない。」と気付く。また、雲は昼間でも消えないことや海の上でも発生することから、「どのようにして、空気が冷えて雲ができたのだろうか。」という課題が浮き彫りになる。この疑問を探究的活動の課題として設定し、学びを進めていくことで「雲ができる仕組みは、気圧による空気の温度変化が影響しているんだ。」という新しい知識を身に付ける。そうして、単元の終わりに既存知識と新しい知識を身に付けた生徒が、雲ができる仕組みに再度挑み、科学的な根拠を基に自分の言葉で説明できるようになることがねらいである。

2年1組の生徒は知識がない問いに出会い、気付きや自分の考えを書く際に、「課題を理解するために時間が欲しい。」や「考えや気付いたことを書くのに時間が足りない。」とつぶやく生徒が多い。そのため、単元の序盤や雲の仕組みを考える際に、「じっくりと自分で考える時間が欲しい

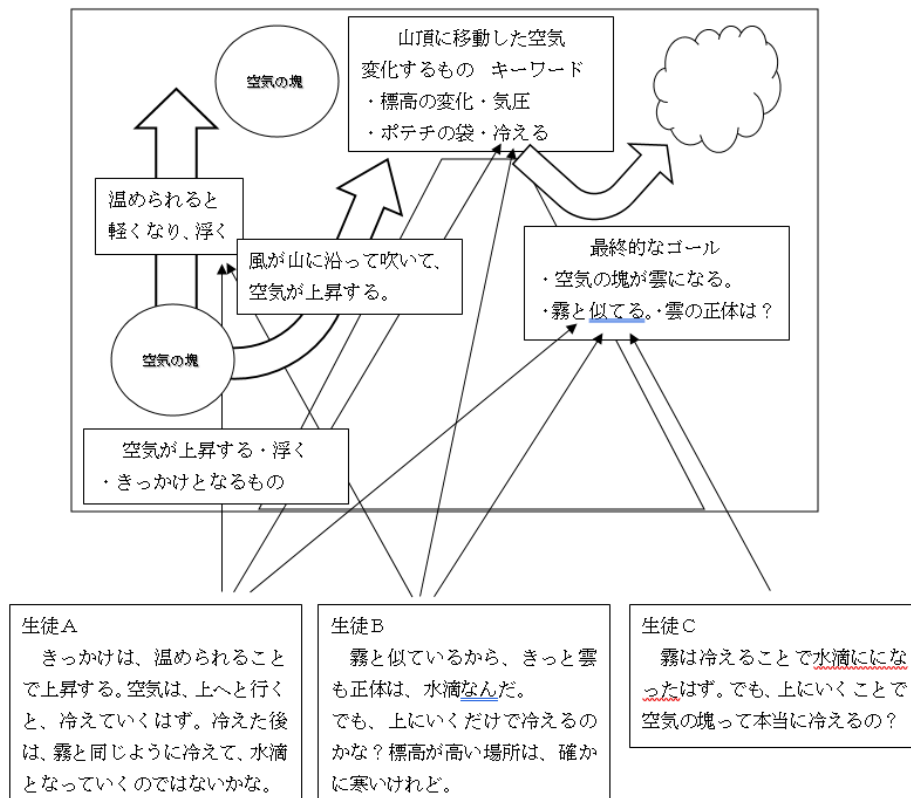
な。」とつぶやくことが予想される。そのため、個人で考える時間を十分に確保し、生徒一人一人が課題を理解して、自分の考えが書けるようにする。また、探究的活動の際に、「この実験は何を調べていたんだっけ。」と目的を見失ってしまうこともあるだろう。その際は、学習マップから自分たちの実験を振り返るように促すことで、何を調べていたのかを思い出すはずである。また、仲間との対話から共通点を見だし、必要なことや実験の目的を理解できるようにする。

単元の導入では、前単元で触れた気象要素の一つである湿度を深掘りしていき、霧ができる仕組みを明らかにするために必要となる①水蒸気量②飽和水蒸気量③露点④飽和水蒸気量を超えた水蒸気は水滴となるという知識との出会いの場とする。学びの始まりとして、「湿度とはそもそも何だろう。」と尋ねる。前単元で、気象要素について学んだ生徒は「湿度という言葉が湿気という言葉に似ているな。」や「梅雨になると、肌が湿気でベタベタとするから水が関係しているだろう。」と考えるだろう。また、中学1年時に学んだ状態変化から「目に見えない水は気体だ。」と思い出し、「湿度とは、空気中に存在する水蒸気の量だ。」と考えるだろう。そこで、「気温が下がると湿度はどうなっているの。」と問うと、「空気中の水分が液体となり、空気中の水蒸気が減るから湿度は下がるはずだ。」と考えるだろう。ここで、前単元で学んだ気象要素の関係性や規則性を振り返るように促すと、「気温が下がると、湿度は高くなるはずなのに矛盾している。」と気付く。そこで、湿度は空気中に存在する水蒸気の量ではなく、空気を含むことができる最大量である飽和水蒸気量と空気中存在する水蒸気の割合で表されていることを伝える。また、飽和水蒸気量曲線を用いて、温度の変化によって、水蒸気が水滴に変化していく様子を理解する。第2時では、湿度に関する知識を身に付けた生徒が、冷えたグラスの水滴について、飽和水蒸気量曲線を使い、水滴に変化していく様子を説明できるようにする。第1時で学んだ①空気が冷えることで、飽和水蒸気量が小さくなること②空気中存在する水蒸気の量が飽和水蒸気量を超えることで水滴に変化することという2つの知識を基に、現象を分析し、説明することを通して、学んだ知識が活かせる楽しさを味わってほしい。

第3時では、ビーカーと保冷剤を使い、霧を発生させる。この霧がどのように発生したかを問い、生徒は前時で学んだ2つの知識や生活体験を基に、現象と知識を結び付けていく。西湖の様子を思い出し、「西湖の朝は、気温が低かったよね。だから、気温差で冷えることが発生の仕組みに関わっているんじゃないか。」や「湖の近くということは、水も十分にあったのだろう。」と現象を経験と照らし合わせていく。また、コップや窓の結露を思い出し、「温度が下がって、水蒸気が水滴に変わる現象ってコップの現象と似ているな。」や「霧も水滴なのかもしれない。」と学んだ知識を使い、現象の仕組みを考えていく。また、飽和水蒸気量曲線を使う必要性も感じるだろう。そこで、実際に分析すると「空気中の温度が下がったから、夜から朝になって霧が発生したんだ。」や「温度が下がるということは、飽和水蒸気量が小さくなったんだね。」、「飽和水蒸気量を超えた水蒸気は水滴となるから、コップの水滴と同じように霧も水滴なんだ。」と理解していく。ここで、霧の正体が水滴であることを全体で共通理解していく。

第4時では、前時までの既習事項を基に、雲ができる仕組みに挑む。霧の正体や仕組みを理解した生徒に「雲はどうやってできるのだろう?」と尋ねる。霧の仕組みを理解した生徒は、「霧と雲は似ているから、雲も水滴だろう。」と考える。また、山の近くに雲ができるという日常経験から「雲は山の上でできるはずだ。」や「山登りをすると、寒かった記憶があるから空気が冷えて、水滴となったのだろう。」と考える。しかし、雲は霧と異なり、昼間でも消えないことや海の上でも発生することから「霧と雲は似ている気がするけど、何か違うのだろう。」という疑問が生まれ

る。そこで、「雲はどのようにしてできたのだろう。」と残りの単元を貫く課題を設定し、明らかにしていく。生徒は、富士山のタイムラプス動画を見て、雲ができる仕組みを考える。すると、「山の上は風が強い気がする。だから、風によって山自体が冷えているんじゃないかな。」や「霧と違って、雲から雨が降ることもあるから水蒸気の量が多いのではないか」、「登山したときに気温が寒かったり、ポテトチップスの袋が膨らんだりしたことから、空気も膨らむことで何か起きるのかもしれない。」など、様々な視点から空気が雲へと変わる過程や考えを表現していく。また、その考えを共有し、繋ぎ合わせ、雲ができる仕組みを解明するためのいくつかの課題をクラス全体で確認する。こうして、それぞれの疑問や仮説を共有し、分類した学習マップが今後の分析の拠り所となるはずである。



学習マップは、探究的活動において、自分たちが何を解決したいのかという目的確認や学級全体の見通しをもったり、ここまでの活動を振り返ったりするツールとして活用されることを期待したい。そのため、授業の最後に、自分の考えや新しく身に付いた知識などを学習マップに書き込み、学習マップをアップデートしていく時間を設定する。すると、自分の最初の考えからどのように変化したのかや学習マップのどの場所が明らかになったのかを自分自身で認識し、成長を実感できるようになる。

本時を含む第5時～第7時では、雲ができる仕組みの仮説を立てた生徒が検証する実験を選択し、探究的活動を進めていく。学習マップから、雲ができる仕組みを明らかにするために解決が必要な課題は、①温められた空気は本当に上昇するのか。②山頂に移動することで生じる変化は何か。③空気塊から雲が発生する仕組みは何か。に分類される。多くの生徒は、山頂に移動した空気の冷え方の知識がないため、②を確かめる実験を立案することは困難だと予想される。「山頂は強い風が吹いているという経験から、風による風圧で空気塊が冷えるのではないか。」と考えるグループもあるだろう。そのグループには、富士山や愛鷹山の山頂データやアメダスの情報を閲覧

できるようにすることで、「確かに山頂には、強い風が吹いているな。」や「風が吹いているのに、晴れの日も曇りの日もあるな。」、「山頂の強風で冷えるわけじゃないんだ。」と気付くだろう。標高の高さが関係していると考えたグループでは、「標高が変わると、何が変わるのかな。」や「気圧かな。温度かな。」と気圧の変化に気付かないことも考えられる。そのグループには、前単元の振り返りや学習マップを見直すように促すことで、「標高が高くなると、気圧が小さくなったはずだ。」と思い出し、気圧の存在に気付くようになるだろう。また、「気圧の変化が大事な。でも、気圧の実験って何をしたら良いのだろう。」や「気圧が変わる実験って何をしたら良いのだろう。」と気圧を確かめる実験の立案に困る生徒もいるだろう。実験の立案の手助けとなるように、フラスコやピストンなど気圧に繋がるような実験道具を準備しておく。教科書や生成AIを活用しても良いと伝え、立案に活かせるようにする。自分たちの立てた仮説を基に検証を進め、原因や考察を深めていくことができるようにする。

本時である第7時は、授業者から各グループに、自分たちの実験の振り返りや仲間の実験を知る機会をつくる。仮説や実験方法をロイロノート上で閲覧できるようにすることで、各グループがどの課題に注目しているかを把握する。すると、「なぜこんな実験をしたのだろう」や「詳しい実験内容が知りたい」という思いが生まれる。情報共有を通じることで、仮説は似ているが、実験方法が異なるグループ同士を繋げ、「自分たちの実験結果や考えは正しい可能性が高いはずだ。」と思いを強めるだろう。また、同じような実験であるのに、異なる結果が出ているグループもあるだろう。「どちらのグループの結果が正しいのかな。」や「雲ができるために必要なことは何か」など、比較から自分たちの結果の妥当性に疑いの目を向けるようになる。こうして、他のグループとの比較や再実験など、さらなる検証を進めていくだろう。検証から得られた知識や考えを学習マップに表現することで、自分の学びを振り返り、メタ認知していく。生徒は、①温められた空気が上昇すること。②気圧によって温度が変化すること。③気圧による温度が変化が生じ、霧と同様に飽和水蒸気量が小さくなり、水蒸気水滴となること。を理解する。

第8時では、前時で②気圧による温度変化が雲のできる仕組みの一つに関係することを理解したが、生徒は「気圧が下がると、空気の温度が低くなるのはなぜだろう。」と感じるだろう。そのため、粒子モデルを使い、熱という概念が粒子の衝突回数であることや空気が膨張することで、粒子が動き回る範囲が大きくなり、温度が下がる仕組みを理解し、原理の理解まで深めていく。そうして、第9時では、第4時に立てた雲ができる仕組みへと戻る。単元の中で必要となった科学的な根拠を使い、雲ができる仕組みをまとめていく。学習マップと見比べたり、付け加えたりしながら山頂に雲ができる仕組みについて再度挑み、本単元で学んだことや自分の考えが変化した様子を振り返っていく。本単元の最後に、霧と雲の違いや霧や雲ができる仕組みを理解した生徒が、飛行機雲が長く残る日とすぐに消える日の違いや燕が低いところを飛ぶと、雨が降るなどの観天望気など、日常的な雲に関する現象を科学的に分析し、身に付けた知識を基に説明する時間を設定する。日常的な現象に注目し、身に付けた力を活かして現象を分析し、説明することを楽しむことができるようにしていきたい。

以上の構想により、冒頭で挙げた理科が年間を通じて大切にしていることに迫り、生徒も授業者も見通しをもった学習ができるようにし、次單元へと繋げていく。

5 単元の評価計画

時 数	学習内容	評価について				評価方法
		知	思	主	評価規準	
1 2	【湿度】 - 湿度の理解を深める。 - 湿度は、飽和水蒸気量と水蒸気量の関係で表せることを理解する。 - 冷えたグラスに水滴が生じる現象を飽和水蒸気量や水蒸気量、露点という言葉を使って表現する。	○	○		知：飽和水蒸気量と水蒸気量という言葉を使って、湿度を理解している。 思：グラスについた水滴を飽和水蒸気量や水蒸気量、露点を使って説明している。	- ノート記述 - 観察
3	【霧ができる仕組み】 - 林間学校の動画から霧ができる仕組みを分析し飽和水蒸気量等の言葉を使って表現する。 - 霧は、コップの水滴と同じように水蒸気が冷えて、水滴として生じたことを理解する。	○	○		思：霧ができる仕組みについて、飽和水蒸気量や水蒸気量、露点という言葉を使って、表現している。 知：霧について、飽和水蒸気量や水蒸気量、露点という言葉を使って、理解している。	- ロイロノート記述 - ノート記述
4	【学習マップ作成】 空気が雲へと変わる過程を想像し、自分の考えを書き込む。			○	主：自分の考えを粘り強くもち、雲ができる仕組みを明らかにするために、必要となる課題をまとめた学習マップを作成しようとしている。	- 振り返り - ノート記述
5 6 7	【雲ができる仕組み】 - 学習マップを基に、実験を立案したり、検証したりする。 - 結果を仲間と共有し、結果の妥当性を検証したり、実験をやり直したりする。 - 学習マップを参考に、見通しをもって学習を進める。 - 雲ができる仕組みは、気圧が関係していることを理解する。	○	○	○	知：気圧による温度変化が生じていることを科学的な根拠を基に理解している。 思：実験結果や共有から、雲ができる仕組みに気圧の変化が関係していることを見いだしたり、考えたりしている。 主：仲間の意見を参考にし、学習マップを使って探究的活動に粘り強く取り組んでいる。	- 実験 - ノート記述 - ロイロノート記述
8	【気圧と温度変化】 気圧の変化によって、温度変化が生じる仕組みを理解する。	○			知：粒子モデルを使い、気圧によって温度変化する仕組みを理解している。	- 活動 - ノート記述

9	【振り返り】 ・学習マップを使い、自分の学習を振り返る。 ・雲ができる仕組みを身に付けた知識を基に自分の言葉で説明する。		○	○	思：雲が発生する仕組みについて理解し、自分の言葉で表現できている。 主：雲が発生する仕組みについて学習マップを使い、学習を振り返っている。	・学習マップ ・ノート記述 ・ロイロノート記述
10	【まとめ】 ・飛行機雲が長く残る日とすぐに消える日の違いや観天望気など、日常的な雲に関する現象を科学的に分析し、身に付けた知識を基に説明する。		○	○	思：雲が発生する条件や仕組みについて理解し、観天望気を科学的な根拠を使って、表現できている。 主：ロイロノート等を使って学びを振り返り、科学的な根拠は何かを粘り強く探そうとしている。	・ノート記述

6 本時の授業

(1) 本時の目標

I C Tを活用した情報の共有や仲間との議論、仮説の検証を通じて、雲がどのようにできるかを科学的な根拠から明らかにし、自分の言葉で表現できるようになる。

(2) 授業過程

教室の発問と予想される生徒のあらわれ	学び方	◎教師の支援 ☆評価
みんなが学習マップのどの分野に注目して、どんな実験を計画したのかを確認しよう。 <pre> graph TD A[みんなが学習マップのどの分野に注目して、どんな実験を計画したのかを確認しよう。] --> B[山に吹く強風が空気を冷やす原因と考えたけど、データで調べたら天気関係なく風は吹いていた。] A --> C[水蒸気の量を増やして、霧と似た実験をして、雲のようなものができたけど、これは霧と変わらない。] A --> D[ペットボトルに空気を入れてから、蓋を一気に開けると雲のようなものができたよ。] A --> E[フラスコに注射器を付けた実験から注射器を思い切って引いたら雲のような物ができた。] </pre> ・山に吹く強風が空気を冷やす原因と考えたけど、データで調べたら天気関係なく風は吹いていた。 ・水蒸気の量を増やして、霧と似た実験をして、雲のようなものができたけど、これは霧と変わらない。 ・ペットボトルに空気を入れてから、蓋を一気に開けると雲のようなものができたよ。 ・フラスコに注射器を付けた実験から注射器を思い切って引いたら雲のような物ができた。 ・雲ができたグループの共通点を探してみよう。 ・雲ができたグループが注目しているのは、空気が上へ移動することで何が変化したのかに注目しているね。 ・ポテトチップスの袋って山の頂上で膨らんだことから、気圧の変化に注目した実験が多いね。	個	◎生徒は、前時にロイロノートに自分の考えやグループでまとめた実験内容を提出し、全員が仲間の考えに触れられるような環境を整える。 ◎分かったことや気付いたことを記入した学習マップを提出箱に入れておき、生徒や各グループが何に注目しているかがわかるようにすることで、実験の立案に困った際、相談しやすい状態にしておく。

			グループ【スキルの活用】	◎雲ができる仕組みについて、標高や気圧へと繋がらない生徒に対して、「自分たちとは異なる仮説を立てたグループにどんな実験したのか聞いてみるといいかもしれないね。」と声を掛け、グループ同士を繋げ、自分たちの実験に活かしている様子を見届ける。
・ペットボトルやピストンの実験から雲ができるみたい。 ・山頂に移動した空気の塊は、何が変わるのかな。 ・標高の変化が重要なものかもしれない。 ・確かめるための実験をした方がいいのかもね。	・ペットボトルの実験は、気圧の変化が重要なはず。だから、ピストンの実験で気圧に関する実験をしよう。 ・ピストンの実験も、ペットボトルも、気圧の変化が重要なものかもしれない。 ・気圧の変化に注目した実験が必要だ。	・ペットボトルの実験やピストンを引いたときは、気圧が低くなっていることが重要だ。 ・気圧が低くなると、温度も低くなっているはず。実験で確かめてみよう。 ・気圧が低くなることで、温度が冷えて雲ができたのかも。		
この時間でどんなことをするか、グループで決めよう。				
・標高の変化に注目した実験が確かめられていないから、他のグループの実験を参考に計画して、実験しよう。 ・同じ実験なのに、結果が異なるグループがあるからどちらが正しいのかを調べよう。 ・雲ができる仕組みを説明するために、今までやってきた実験を振り返って、流れや根拠になっているものが何かをもう一				
雲はどのようにしてできたのだろう。				
・ペットボトルの実験やピストンの実験から他のグループと同じように雲が発生できた。 ・学習マップの山頂に移動した空気の塊は、気圧の変化が生じているんだ。 ・でも、気圧の変化で温度にどう繋がるのかな。	・ペットボトルを押した状態から戻す時とピストンを急に引くときの共通点は何だろう。 ・気圧が低くなることが共通しているんだ。 ・上昇した空気の塊は気圧が低くなると、温度が冷えて雲になったんだね。	・条件を整理すると、上昇することがきっかけとなる。上昇すると、気圧が低くなって温度が冷える。その後は、霧ができる仕組みと同じなんだね。 ・どうして、気圧が低くなると温度が低くなるのかな。		

◎雲を再現することがうまくいっていないグループに対して、雲が発生したグループの結果との違いや共通点に注目するように促す。
◎雲が発生する仕組みを明らかにするために必要な課題は理解したが、実験の立案に結びつかない生徒に対して、教科書や生成AIを使っても良いと声を掛け、実験を立案するためのヒントとなるように促す。

・ 温められたり、風がきっかけで上へと上昇する。 ・ 上昇した空気の塊が、気圧の変化で膨張することで温度が低くなる。 ・ 温度が低くなると、霧と同じように水蒸気が水滴に変わるんだね。			
今日分かったことを学習マップに記入しよう。			
・ 山に沿った風や何が温められることによって上昇する空気の流れは、気圧の変化を生むきっかけになっているのかだろう。 ・ 体積が押されている状態から膨らむことからヒントを得て、気圧に関係する実験を立案できた。 ・ 標高が低い状況から高い状態に変わることが重要だと気付いた。 ・ 空気の塊が上へと移動すると、標高すなわち、気圧の大きさが変わることがわかった。 ・ 標高や気圧の変化によって、温度が変化する。気圧が低くなった場所では温度が下がることが分かった。 ・ 気圧によって温度が下がった後は、霧と同じ仕組みで水蒸気が水滴になったものなんだ。 ・ 最初に考えていた予想よりも、意外と簡単に説明することができたな。 ・ 気圧の変化によって、温度の変化が表れる仕組みが気になるな。 ・ どうして、気圧が低くなると温度が下がるのだろう。		個	☆ICTを活用した情報の共有や仲間との議論、仮説の検証を通じて、雲がどのようにできるかを科学的な根拠から明らかにし、学習マップに自分の言葉で表現している。 〈【表】ノート記述〉 ◎何を調べていたのかがわからなくなってしまった生徒に対して、他のグループの実験を見たり、助言をもらったりするように声を掛け、温度変化を生じているきっかけを理解し、学習マップを使って、実験結果を分析する様子を見届ける。

1年3組 数学科授業案

授業者 渡辺 美帆

1 日 時 令和7年11月6(木曜日) 第5時

2 単元名 比例・反比例(12/20)

3 単元目標

- ・関数関係や座標、比例や反比例の意味について理解する。また、比例や反比例の関係を表、式、グラフに表したり読み取ったりすることができる。(知識及び技能)
- ・比例、反比例として捉えられる2つの数量について、それらの変化や対応の特徴を表、式、グラフを用いて見いだすとともに、具体的な事象を考察することができる。(思考力、判断力、表現力等)
- ・関数を学ぶよさや必要性を感じるとともに、比例や反比例の考えを使って具体的な事象の問題を解決しようとしたり、生活に生かそうとしたりする。(学びに向かう力、人間性等)

4 単元構想 ※網掛け部分…本構想において重要だと考えたスキル

本校数学科では、単元構想を構築するにあたり、単元のガイダンスで3観点のそれぞれの目標を一覧にして生徒と確認する時間を設け、単元で付けたい力を明確にすることを大切にしている。また、その目標を達成するために必要な手段、方法、技能、見方・考え方を『教科のスキル』と意図して定義している。生徒がスキルを獲得し、「この問題を解決するためにはこのスキルが必要だ。」と活用していくことに重きを置き、個別最適な学びを実現するための土台を育んでいく。同時に、5月に全校集会で確認した、どの仲間も大切に関わり合うための『岳陽中の学び方』を大切にすることで協働的な学びの実現を目指している。

小学校算数科では、変化の様子を表や式、折れ線グラフを用いて表したり、変化の特徴を読み取ったり、伴って変わる二つの数量を見いだして、それらの関係に着目し、変化や対応の特徴を考察してきたりしてきている。また、比例の関係を理解しこれを用いて問題を解決してきている。なお、反比例は比例の理解を促すために学習してきているが、中学校では関数という視点から反比例を定義し、それらの変化や対応の特徴を一般的に考察することになる。

1年3組の生徒は、『岳陽中の学び方』を身に付けようとする生徒が多く、協同的な学びを大切に、実践しようとしている。その中で、文字式の単元では「同じ数量を表しているのに、〇〇さんと〇〇君の文字式は形が違っているね。」や「僕より〇〇さんの式の方がスタイリッシュだ。」などと仲間との違いを楽しむ生徒が多く見られる。また、文字式で表しやすくするための『図(絵)をかく』というスキルを獲得した生徒は、文字式で表すことに困ったときノートに図(絵)をかいて解決しており、困ったらスキルに立ち返ろうとする生徒も増えてきている。しかし、基礎計算力の低さによって解決に時間がかかってしまうと、問題解決自体を諦めてしまう生徒もいる。

第1時の単元の導入では、プールに一定の割合で水を入れるとき、伴って変わる量について考える。生徒は、時間に伴って、水位、体積、満水になるまでの時間などといった量を見つけていく。その中で時間と水位に着目し、プールの形を、直方体から段差のあるプールや途中まで仕切りのあるプールに変えて「それぞれの水を入れる時間とプールの水位の関係をグラフに表すと、どれになるだろうか。」という問題を提示する。「いろんなグラフの形があるね。」や「このグラフは傾き具合が途中で変わ

っているね。」「これは小学校で学習した比例のグラフみたいじゃない?」「仕切りのあるプールがどれになるか分からないよ。」などと考えを進めていく。そして、凹みのあるプールではグラフはどのような形になるか予想すると「自信はないけど、こんな形になるのではないか。」と周りそれぞれの考えを共有する中で「変化の様子が理解できれば、グラフの形を予想できそうだ。」と結論付けていく。活動の途中で出るであろう「小学校で学習した比例だ。」というつぶやきを生徒と共有し、この単元の3観点の目標と、「ともなった2つの数量の変化の様子を見つけ、理解し、人に説明することができる。」という単元のゴール、この単元を攻略するには『表』、『式』、『グラフ』の3要素を使いこなすことを確認する。水を入れる時間とプールの水位以外でも“合唱で使うスピーカーの音量調整ツマミと音量”、“動画の再生回数と収益”、“器具庫にある32個のバスケットボールを分けるグループの人数とグループの数”など、身の回りにはともなって変わる二つの数量があり、単元の内容と日常の事象との結びつきがあることを確認する。

第2時では、変数 x 、 y を使って“ y は x の関数である”という定義を知る。その上で、前回考えた身の回りにあるともなって変わる二つの数量について、“ y は x の関数”といえるか判断する技能を身に付けていく。さらに、具体的な事象では変数のとりうる値の範囲も考えていくことから、変域についても扱う。教科書の問題では、表にまとめたり式で表したりする問題もあるため、単元の学習を身に付けていく重要な要素だと印象付けていきたい。

第3時では、第1時で扱った比例の関係になっているプールを扱い、学習を進めていく。小学校で学習した比例の知識を確認した後、現在の水位(プールの縦の長さの半分の位置)を基準(0 m)と設定する。生徒は「何が変わったの?」や「0 mより下の水位を表現するためには、負の数が必要だよ。」「現在の時間が0分だから、-1分もあるってこと?」「比例って負の数もあるの?」と、扱える数の範囲が負の数まで拡張されたことに気付くだろう。その疑問を「変数を負の数まで広げても、時間と水位は比例していると言えるだろうか?」という課題として考えていく。表の横の関係に着目して調べることで、負の数まで範囲を広げても同様の特徴があることを確認していく。「今日学んだことを隣の人に説明してみよう。」と今日の学習を振り返ると「この表で、2倍、3倍…と考えると…」や「表の縦に注目して、 $y \div x$ をしてみると…」など、多くの生徒が表を使って説明するだろう。そこで、表のよさについて考え、『表は関係性を見いだすときに便利』や『式は、表の縦の関係に注目すれば立てられる』と生徒の言葉でまとめ、それを『表のスキル』として獲得していく。第4時では、第3時で扱ったプールにポンプをつけ、水を排出していく場面を考える。「水が減っていくものも比例なの?」や「この前、負の数が入っても比例の関係があったよね。」「でも小学校のときは、増えていく関係しかなかったよね。」「一定に減るときも、比例といえるのかな?」と疑問をもつだろう。それが「一定に減るときも、比例といってよいのだろうか?」という学習課題となり、全員の共通の課題として考えていく。生徒は前時の学習を生かして、表をつくって比例の関係性を見いだそうとするだろう。比例定数が負の数のときも、比例の関係であることや、そのときの x と y の増減の様子を確認し、式の形も確認する。授業の最後の振り返りでは、「今日は、この前の表のスキルを使うとこで、関係性を見いだすことができた。」という感想に焦点が集まり、「スキルを使ったから、学習を進めることができた!」という実感がもてるだろう。第5時では、比例の関係であるいくつかの表を見て、これらの表から式を求めることができるかを考えていく。生徒は試行錯誤しながらも、どの表からも、表の縦の関係に注目すると比例の式が求められることに気付くだろう。その後「式に表すと、どのようなよさがあるだろう?」と全体に問うと、「表だけだと変化の様子が分かりにくいけど、式にするといくつずつ変化するということが伝わる。」という生徒の意見を取り上げ、『式は、

関係を簡潔に表現することができる。』という『式のスキル』を獲得していく。第6時では、比例の関係をグラフで表すために、座標の考え方を学習する。小学校で使っていたグラフシートを使って負の数まで表そうとすると、生徒は「はみ出ないと表せない。」と気づき、 x 軸、 y 軸ともに変域を負の数まで広げグラフシートを作っていくと考えられ、その中で、用語を確認したり、練習問題に取り組んだりしていく。併せて、座標絵にも挑戦し、楽しみながら理解を深めていきたい。第7時では、前回作ったグラフシートに、比例のグラフを作っていく。生徒は表を作って、座標を書きこんでいけば解決できるのではないかと考えるため、グラフを作る見通しを全体で確認してから取り組む。その中で「一つ一つ点を打つのが大変だったな。」や「これって、線をつなげてもいいのかな？」などのやりとりが交わされるだろう。そこで「より正確なグラフをかくにはどうすればいいだろうか。」と問えば「もっと点を多く打とう。」や「点と点の間を調べよう。」と、点の数を増やしていくと考えられる。その後、点の集合が直線になることを確認し、完成したグラフを見ると「線対称になっているね。」「全部原点を通っている。」など特徴に気づき、見つけた特徴を共有することで、比例のグラフの特徴としてまとめていく。グラフの特徴を確認した後、『正しいグラフをかくためには、細かく点を打って調べる』必要があることを『グラフのスキル』として獲得する。

第7時は、前半は“誰一人見捨てないグループ学習” 後半は“仲間の意見を聞いて考えを深めるグループ学習” とする。そのため「SさんがAくんに最後まで寄り添ってグラフをつくっていたね。」や「Kくんの見付けたグラフの傾き具合の意見に、Yさんが「なるほど!」と納得して仲間の意見を取り入れていたね。」のように、協働的な学びの姿を意図的に価値付け、生徒と協働的な学びのよさを共有していく。振り返りとして、比例のグラフの特徴をペアで確認し、知識の定着を図る。第8時では、前時での「一つ一つ点を打つのが大変だったな。」という生徒の声を取り上げ、「もっと楽に比例のグラフをかく方法はないだろうか?」という学習課題へとつなげていく。前時に見つけた“形は直線” という特徴から、2点が分かればグラフをかくことができることを確認すると「前回比例のグラフには必ず原点を通るという特徴があったから、1つの点は原点にすればいい。」と、生徒は考えていく。もう1つの点をどのように選べばいいかを、式、表、グラフを見比べながら考えていくと、比例定数に注目していくだろう。表では $x=1$ のときの y の値であり、式では $y=ax$ の a であり、グラフでは x 軸方向に1進んだときの y の増加量であると全体で確認し、『比例のグラフは、原点と比例定数から点を決めると簡単につくることができる』という『グラフのスキル』を獲得して、練習問題に取り組んでいく。授業の最後に「今日分かったことは何だろう?」と問えば「グラフの形が直線だから2点分かればグラフが作れる。」と自分たちの言葉でまとめていくだろう。第9時間目は、比例のまとめとして時間を取り、表・式・グラフの知識・技能を定着する時間とする。この中で“グラフのよさ” に触れ、『グラフは、変化の様子が見える形として理解しやすい』という『グラフのスキル』も獲得していく。そして第10時の小テストにつなげていき、生徒が獲得してきたスキルを発揮し、自分の学習の定着の度合いを振り返ることができるようにする。

第11時間目から4時間は、反比例の学習へ進んでいく。まず、生徒は「面積が 24cm^2 のとき、横の長さを x cm、縦の長さを y cm とすると、 x と y はどのような関係になるだろう?」という問題と向き合う。生徒は、実際に面積が 24cm^2 になる長方形を何個か書いてみたり、表にしてみたり、グラフで表してみたりしながら考えていく。整数の値で考えている生徒が多い中「 $1.5 \times 16 = 24$ だ。」と、小数値でも成り立つか調べる生徒もいるだろう。グループ学習の中で今までの学習を踏まえて考えていくと、この関係は関数であることと比例ではないことに気付く。そして、この $x \times y = 24$ 、 $y = \frac{a}{x}$ という関係が反比例という関係であることを全体で確認する。その後、小数で考えていた生徒を取り上げ、

x の値を 1 よりも小さい小数を確認していく。生徒は、急激に数が大きくなることに気付く、「 x の値が減っていくと、 y はどんどん大きくなるね。」や「このままグラフシートに書けなくなるくらい大きくなるんじゃない?」と、負の数の変域について興味をもつだろう。 x の値を小さくして負の数まで考えたら、 y の値はどんどん大きくなるのではないかと予想したところで、「この x と y の関係を反比例と捉えなおすと、 $x=1$ から左側の y の値は、どんどん大きくなるのだろうか?」と考えていく。はじめはどんどん大きくなると予想していた生徒は、表の見方である『縦の関係を見ること』や、反比例の定義に戻って考えることを通して、 y の値が負の数になることに気付いていく。 $x<0$ のときの y の値が明確になっていき、最後に「 $x=0$ のときは、どうなるだろう?」という疑問にぶつかる。全体でこの問題を取り上げて「 $xy=24$ を満たす y はない。」と確認し、反比例は $x \neq 0$ という“条件付きの関数”であることを確認する。次の時間では、前時にグラフから課題を追究し分かったことを仲間に伝え、反比例のグラフについてまとめていく。ここでも『比例のときの正確なグラフは細かく点をとって考える』という『グラフスキル』を使い、双曲線になると理解していく。13 時間目は、反比例の式を求める学習をする。このときも『表の縦の関係から式を立てる』という『式のスキル』を使って学習する。14 時間目は反比例のまとめをしながら、反比例の学習は比例のスキルを使って特徴を発見できたことを生徒がメタ認知できるよう、スキルを使って学習してきたことを価値付けて反比例のまとめとしていきたい。

第 15 時間目からは、今までで獲得した比例・反比例のスキルを身の回りの問題の解決に活用していく。「マラソン大会で、兄と弟のゴールしたタイムの差はいくらだろうか?」や「2.0 より高い視力を測るためにはどうすればいいか?」、「手指消毒用アルコールは、何日後に空になってしまうか?」などの問題解決を目指していく。表・式・グラフの 3 つの要素を行き来しながら目的に応じて使い分け、それぞれのよさを実感していったほしい。2 つの数量の関係を比例や反比例とみなして考える、という関数の予想できるよさが実生活の問題にも生きていることも実感していきたい。

5 単元の評価計画

時数	学習内容	評価について				評価方法
		知	思	主	評価規準	
1	【ガイダンス】 ・ 単元目標を確認する。 ・ スキルを確認する。			○	主：具体的な事象の中から伴って変わる 2 つの数量を見いだそうとしている。	・ ワークシート記述 ・ 観察
2 3	【関数・変域】 ・ 関数関係の意味を理解する。 ・ 変域を、不等号を使って表すことができる。	○			知：関数関係の意味を理解している。	・ ノート記述
4 5 6 7 8 9 10	【比例】 ・ 比例、座標の意味を学習する。 ・ 比例について表、式、グラフに表す。 【小テスト I】 ・ ここまでの基本的内容の理解度を小テストで確かめる。	○	○	○	知：変域を負の数に拡張した比例の表、式、グラフについて理解できる。 思：複数の比例のグラフの比較を通して、比例のグラフの特徴を理解する。 主：比例の関係を、変域や比例定数を負の数まで広げて考えようとしている。	・ ワークシート記述 ・ 観察 ・ 小テスト

11 12 13 14	【反比例】 ・ 比例で学習した見方考え方のスキルを用いて、反比例の特徴を学習する。 【小テスト2】 ・ ここまでの基本的内容の理解度を小テストで確かめる。	○	○	○	知：反比例の関係を表、式、グラフに表したり読み取ったりすることができる。 思：反比例の事象を捉えるために、比例で獲得したスキルを使うことができる。 主：反比例の事象を、変域や比例定数を負の数まで広げて考えようとする。	・ ワークシート記述 ・ 観察 ・ 小テスト
15 16 17 18	【比例反比例の利用】 ・ 身のまわりの比例や反比例の関係にある問題について、今まで学んだスキルを生かして解決したり、未知の値を予測したりする。		○	○	思：比例、反比例として捉えられる2つの数量について、それらの変化や対応の特徴を表、式、グラフを用いて見出すとともに、具体的な事象を考察することができる。 主：関数を学ぶ良さや必要性を感じるとともに、比例や反比例の考え方をを使って具体的な事象の問題を解決しようとしたり、生活に生かそうとしたりする。	・ ワークシート記述
19 20	【単元テスト2枚】 ・ ここまでの基本的内容の理解度を単元テストで確かめる。			○	主：今までの学習内容の習熟を図る。	・ 単元テスト

6 本時の授業

(1) 本時の目標

反比例の定義に立ち返ったり、「比例の時はどう学習したか」という見方考え方をを使って反比例の事象を調べたりすることを通して、反比例の関係について変域を負の数まで広げて考えようとしている。

(2) 授業過程

教師の発問と予想される生徒のあらわれ	学び方	◎教師の支援 ☆評価
面積が 24cm^2 の長方形の、横の長さを $x\text{ cm}$ 、縦の長さを $y\text{ cm}$ とします。この x と y は、どんな関係になりますか？	一斉	
・ どういうこと？ ・ 例えば、縦が 4 cm 、横が 6 cm ってことだね？ ・ これって関数といえるのかな？ ・ 他の形も考えられるよね。 ・ いろいろな形の長方形がありそうだな。		

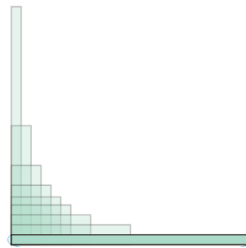
・表にすると、こういうこと？

x	1	2	3	...
y	24	12	8	...

- ・ x の値が増えると、 y の値は減るね。
- ・増え方が一定じゃないね。
- ・ $x \times y$ を計算すると、必ず24になるね。
- ・小数の値も考えられるよね。

・縦が2cmのとき、横が12cmになることを書き足してみたよ。

・もっと書き足してみよう。



- ・ x が1つ決まると必ず y がただ1つ決まるから、この y は、 x の関数であるといえるね。
- ・この関係は比例の表や式やグラフの特徴を満たしていないから、比例ではないね。
- ・ $y = \frac{a}{x}$ のような式で表されるとき、 y は x に反比例するというんだね。
- ・Aさんは、小数の値も考えているよ。もっと細かくするとどうなるのかな？

・ x の値を1よりも小さい小数にしていくと、 y の値はどんどん大きくなるね。

x	0.1	0.5	1	2	3	...
y	240	48	24	12	8	...

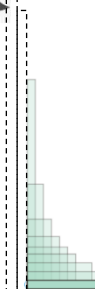
・これって、 x の値が0を超えてマイナスの数になったら、 y の値はもっともっと大きくなるんじゃない？

x	-2	-1	0	0.1	0.5	...
y	大	←		240	48	...

・ $x=0.5$ のときは、 $y=48$ になるから、グラフは $x=1$ のときの倍の高さになるね。

・どんどんグラフの背が高くなっていくね。

・これって、もっと左の方のグラフは、シートに書けないくらい大きくなるんじゃない？

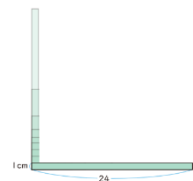


この x と y の関係を反比例と捉えなおすと、 $x = 1$ から左側の y の値は、どんどん大きくなるのだろうか？

グループ【スキルの活用】

一斉

◎手がかりがなく、どのように考えたら分からない生徒には、



のような関係であることを視覚的に示す。

◎どのように調べていけばよいか分からない生徒には、比例ではその要素はどう学習していったか(スキル)に立ち返るよう支援する。

- 大きくなるとしたら、どのように増えるのかな？
- y の値が 2 倍、10 倍と増えているから、同じように増えるんじゃない？

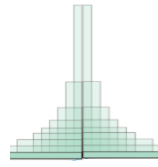
x	-1	0	0.1	0.5	1	...
y	?		240	48	24	...

- じゃ $x=-1$ のときは何倍？
- 横の関係を見るときは、 x と y の両方の変化を見たよね。
- 2 倍、10 倍と増えているのは、 x の値が $1/2$ 倍、 $1/10$ 倍となっているからだね。
- $x=1$ から $x=-1$ は、何倍になっているといえるのかな？
- $1 \times (-1) = -1$ だから、 -1 倍？
- そうなると、 y は何倍？
- うーん、分からないね。
- 表の横の関係が難しいなら、縦の関係を見るのはどう？
- この関係は $x \times y = 24$ だよな。
- $(-1) \times ? = 24$ ってことか。
- $? = -24$ になるよね。
- -24 って、数は減ってるね。
- じゃあどんどん大きくなってることじゃないのかな？
- $x \times y = 24$ で表を作ろう。
- こうなったよ。

x	...	-3	-2	-1	0	0.1	...
y	...	-8	-12	-24	?	240	...

- y は大きくなるわけじゃないんだね。
- ねえ、 $x=0$ のところはどうなるの？

- グラフを作ってみよう。
- $x \times y = 24$ になればいいよね。
- かけて 24 になるようにしたら、こんな感じになるんじゃないかな？



- $(-1) \times ? = 24$ を考えたら、 y の値は -24 だよ。
- え、マイナス？
- マイナスってことは、グラフは下を書くんじゃない？
- こんな感じ？



- そう、私もそうなると思う。
- もっと作ってみようよ。
- グラフは左上にできるんじゃないくて、左下にできるんだね！
- これって、点対称の形に見えるね。
- $x=0$ のところはどうなってるのかな？
- $x=0$ のときは $y=0$ なんじゃないの？

- 式にすると「 $0 \times ? = 24$ 」になるけど、そんな数ある？
- 1 章の学習のとき、「 $(+3) \div 0 = ?$ 」って考えたよね。
- ということだっけ？分からないから教えて。
- そんな計算はできないってやつだ。
- 反比例では、 $x=0$ であることは考えないんだね。

今日分かったことを、隣の仲間に話してみよう。

グループ【スキルの活用】

◎「面積が 24cm^2 」という関係から離れることができずに $x < 0$ の変域で考えることができない生徒には、反比例の定義で確認したことをもう一度伝え、今は「 $x \times y = 24$ 」の関係が成り立つものを考えていることを伝える。

◎何を手掛かりにして考えればよいか分からない生徒には、グループの仲間が取り組んでいる方法で追究してみよう伝える。

◎ $x \times y = 24$ の関係を基に考えることができない生徒には、考えの根拠になるものがどれか問いながら支援する。

◎0 で割ってはいけないことが分からない生徒がいるときは、ペアや班で確認する時間を十分にとる。

☆反比例の関係では、 $x=0$ のときや $x < 0$ の場合はどのようになるのか考えた跡が記されている

〈【主】ワークシート〉
◎記入できない生徒には、ペアで自分が話したことや相手が話したことをまとめて書くよう支援する。

一斉

1年2組 美術科授業案

授業者 本間 泉

1 日 時 令和7年11月6日(木曜日) 第5時

2 題材名 “NEO 土偶” ～縄文人との対話～ (6/11)

3 題材目標

- ・彫塑における造形の基礎及び用具の適切な扱い方を身に付け、見通しをもって表すことができる。
(知識及び技能)
- ・考えたこと、感じたことを基に主題を生み出し、創造的な構成を工夫し、心豊かに造形を練り、形を生み出すことができる。
(思考力、判断力、表現力等)
- ・縄文時代の生活と土偶との関連を理解し、自分の作品と対話しながら、日本古代の美術文化の良さや美しさを感じ取っている。
(思考力、判断力、表現力等)
- ・縄文人のアートをベースにして、自分の感覚を新たに加えた表現に積極的に挑もうとする。
(学びに向かう力、人間性等)

4 題材構想 ※網掛け部分…本構想において重要だと考えたスキル

美術科では、一つの題材の中で、必要に応じたタイミングでスキルを獲得し、十分に練習する場面を設定することで、生徒が自信をもってスムーズに活動に入り、自分のねらいに沿って、スキルを活用・応用しながら生き生きと表現することができるように題材構想をデザインしている。美術は技能教科であるため、イメージを形にする手段や方法を獲得することで、付けたい力に迫ることや、生徒自身が主体的に表現方法や内容を選択する個別最適な学びへと導くことができる。

今回の題材は、赤い土粘土を使って造形表現をしていく彫塑の学習である。中学1年生は、広見小、丘小で学んだ生徒がいるが、ひとつの小学校は、小学校6年時に紙粘土で人体を表現し、針金で芯材を作り肉付けし、絵の具で着色した経験がある。もう一方の小学校では、小学校3年時に紙粘土で小さな昆虫を作り、磁石を付け冷蔵庫などに貼り付けることができる小さなマグネット作品を制作した経験はあるが、小学校5～6年時には粘土を触らなかったと聞いている。また、どちらの小学校でも、小学校低学年時に粘土をちぎったり、丸めたりしながら造形した経験がある。手を使って粘土の感触を楽しみながら形を作るという基本的な技能や経験があることが実態である。

今回は、自分が描いたスケッチを立体として起こすために、さらにいくつかのスキルの獲得が不可欠になる。『塊(かたまり)をつかんでつける』、『塊から形を作る』、『つまみだす』、『伸ばす』、『曲げる』、『ひも状にして編む』、『ヘラの使い方』、『粘土を接着する方法』などのスキルをさらに獲得し、それを活用して自分の表したい形を豊かに表現できるようにすることで、生徒が自分で課題を解決しながら表現活動を主体的に進めていくことができる。このスキルを知らないと平面的な表現から抜け出せず、立体としての面白さや迫力を出すことが難しいだけでなく、作品の耐性が低くなり壊れやすくなってしまう。そこで粘土の扱いが始まる段階で、これらを一通り練習し、スキルを理解し、表現できるようになる時間をとる。そうすることで「このスキルを使えば、自分が描いたスケッチの通りに表現できそうだ。」という見通しをもち、意図してスキルを使いこなすことにより、創造的な活動にすることができる。このスキル獲得学

習は他者との対話を通して、グループ学習で助け合いながら体験を深めたい。

デジタルコンテンツが日常生活に普及し、タブレットやスマートフォン、オンラインゲーム、バーチャルコンテンツ等、生徒はそれらに自然に触れながら生活し、デジタルで平面的なデザインには慣れ親しんでいる。しかし、その一方で、粘土をこねる、木材を切る、紙を折る、重ねる、といった手で感じる、五感を使って形を生み出す、いう立体的なアナログ体験の機会は、失われつつある。立体的な造形感覚を育てる学習は、中学生の時期に、成長と共に豊かに育まれていく重要な資質・能力であるため、年間計画にその題材を配置している。立体造形に必要な素材と対話する感覚や手を動かしながら考える力は、単なる造形活動の技能向上だけでなく、創造力や空間認識、自己表現などの力を育むものであり、豊かな感性の土台を築く一助となる。完成した立体作品は、生徒の内面そのものとなり、どんな形でも「これは自分が生み出した形だ。」と、平面作品以上に、表現する喜びと自己肯定感につながるであろう。デジタル技術は便利で生徒の世界を広げてくれる素晴らしいツールであるが、同時に実際に手で触れ、重さを感じ、試行錯誤するリアルな体験もまた生徒の成長にとって欠かせないものである。近年、あらゆる教材の中でも、粘土に触る、木材に触ってもものづくりをする、というような彫塑、木工の題材に関して「とても楽しかった。」や「だんだん形になっていくことが面白い。」、「途中は悩んだけど完成したときは嬉しかった。」など、表現を楽しみ、制作過程と完成作品に満足している生徒の感想を多く得ており、立体造形を楽しみ夢中になる生徒の姿を実感している。自分でゼロから生み出すことが苦手な生徒は、平面表現においては、発想・構想の段階で、発想が生まれるまで時間がかかってしまう。しかし、そこに素材があり、それに触れながら五感を使って新しいものを生み出す過程は、素材が助けとなり、触っていくうちに見えてくるものがある。そのため、次第に何らかのきっかけをつかむことができ、どの生徒も少しの支援によって動き出すことができるのである。

この題材では、制作の過程で「ボリュームが乏しい」、「部分が平面的で面白みに欠ける」、「つけた粘土が簡単に取れてしまう」、「ひびが入って表面が美しくできない」などの多くの課題に直面するであろう。この題材は、それらの課題を、獲得したスキルを使って、毎回自分なりに解決しながら進んでいく問題解決型表現学習と言えるのである。

今回は、鑑賞と表現が相互に関連し合う題材とし、日本の縄文時代のアートについて考え、鑑賞しながら、縄文人が作った土偶を造形的になぞりつつ、自分の感性や表現を少し付加することで、縄文人との対話を楽しみたいと考えている。生徒は社会科で、すでに縄文時代について学習しているため、土偶の目的については知識をもっている。しかし、美術科として最も大切にしたいことは、1万年以上前の日本人が、人間が生きるために必要な衣食住関連の要素以外にも表現することに意味を見出していたということである。現在の日本の芸術や祈りなどの精神文化の源流にもなっていることに気付かせたい。日本人の美術や芸術の原点ともいえる“土偶”について考え、縄文人が生み出した土偶を現代人が真似て手作りしていく学習で、縄文人の美意識を感じ、芸術が、現代にいたるまで日本人の中に受け継がれ、時代と共に変化し発展していることにも思いを馳せてほしい。今回は、縄文人と現代人とのコラボともいえる“NEO 土偶”を作り、日本人の芸術文化のルーツに触れる機会としたい。

土偶は、作り手の美的感覚や創意工夫が表現されている。そのため、土偶の種類は豊富で、装飾も豊かである。縄文人が、生きるための切実な願いを込めて、そして一人一人の強い思いが形になっているからこそ多様なデザインの土偶が存在することに気付かせたい。題材の導入では、いくつかの土偶を紹介し、縄文人の生活や、土偶の目的などについて確認する。その後、自分が

インスピレーションを受けた土偶の造形やデザインを基に、自分が作る土偶のアイディアスケッチを描く。縄文人は、全力で生きており、子孫繁栄、豊漁・豊猟、安産、自然への畏敬の念、病気やけがの治癒の祈願などの祈りを土偶に込めてきた。アイディアスケッチを描くにあたり、今を生きる生徒たちが「NEO 土偶」にどんな思いを込めるのかが重要になる。なぜならそれが、形を決定する根拠になるためである。生徒は、縄文人とは異なる世界を生きており、縄文人のように生きることそのものが祈りにつながる生活ではなく、“今をどう生きるか”という願いや理想を改めて考えさせたい。今後3年間の中学校生活の中で「どのように成長したいか」、「どんな人間になりたいか」、「今の自分に足りていないものはないか」、「家族に願うことは何か」など、自分や家族を見守り共に自分の理想に気付かせてくれる存在となる土偶に込める思いや願いは何かを、ワークシートを活用し言語化する。その思いを土偶に込めると、「人の話をしっかり聞けるように耳を作りこむ。」や「部活で勝ちたいから足腰をがっちり」と、「美しくありたいから装飾を豊かに。」など、理由があるからこそその形が表れてくる。自分が描いたアイディアスケッチに、図解を入れながら思いや形が表れているワークシートを作成し、それを常に手元に置いて制作をすることで、自分の思いを確認しながら造形を進めるようにする。

次に、アイディアスケッチを基に芯材を作り、芯材の周りに粘土を薄くつけていく。これが乾くことによって、細部を作りこむ前までのだいたいの骨格(芯)が出来上がる。次に、体に肉付けをし、細部を作りこんでいくにあたり、「自分が描いたスケッチをどのように形にしたらいいのかわからない。」や「イメージした形を作ることが難しい。」と表現活動が止まる瞬間が訪れる生徒がいるであろう。または、小学校時代の経験を思い出し、「目を作って顔に貼り付けよう。」と考え、部分を作ってそれを芯材の上に貼り付ける、という表現を始める生徒も出始めるだろう。しかし、その表現は、どうしても平面的表現の延長であり、塊感がある360度の視点を意識した迫力ある造形にはならないことが予測できる。スケッチに描いた自分のイメージと自分の作品が次第に乖離していくことに違和感をもつ瞬間が訪れるであろう。そのつまずきの場面で、新たなスキル獲得の学習を行うのである。このスキルを獲得すると、大胆な肉付けが進み、「スケッチで描いたイメージ通りの形ができた!」や「コツがわかったから楽しい。」、「このスキルを使えば、こういう模様を表現できる!」などの手ごたえを実感しながら、主体的に自分の表現方法で造形活動を行うことができるようになるだろう。前時にスキル獲得の学習を行うが、どんなスキルを身に付けるのかがわかるような動画を見て、生徒はその時間の課題を理解する。『粘土の付け方』、『塊からつける』、『粘土と粘土の接着のコツ』、『ひも状の粘土を編む』などの複数のスキルを練習する。どんな練習になるのか見通しがもてるように、ゴールがわかる動画や画像を準備する。粘土は、何度でもやり直しができる素材であるという安心感をもてるようにすることや、乾燥してしまえば硬化し、加工はできないが、さらにその上から粘土をのせていくことができるという基本的な性質も確認する。また、ちまちまと小さな部分を作っては貼るような制作をするとボリュームがなく立体としての量感が不足するので、材料の粘土は、すべて使い切るように、粘土の塊をつかみながら大胆に造形していくとよいことも伝える。

本時は、前時に練習した新たなスキルを活用し、自分が作りたい形を作っていく実践の場面になる。自分が必要なスキルを正しく効果的に、そして創意工夫して使えているかが評価のポイントとなる。表現内容や方法は、もちろん表現者の数だけ存在するため、ここからは、スキルを選択し、自分の進度や方法で主体的に作品を作っていくだろう。つまりここからは、自由進度学習であり、個別最適な学びの場面になる。「わたしは『塊をつかんでつける』というスキルを使っ

て、まず肩の肉付けをもっと大胆にしていく。」や「もっと首元に装飾を増やして豪華にしていきたいから、『ひも状の粘土を編む』というスキルを使っていきたい。」、「『塊から形を作る』というスキルを使って遮光器土偶に負けないように大きな目にして、世の中をよく見る目を表現したい。」、「芯材を作る時にちゃんとバランスを意識しなかったから土偶が自立しない。だから『粘土の接着の仕方』というスキルを意識して、右足に肉を付けて立つように修正しよう。」など、各自が自分の課題をもち、使えそうなスキルを選択して自分の解決方法を試していく。また、グループの仲間との対話や、技能を見て真似ることなどでも自分の表現に生かすことができると考えている。

作品完成後は、鑑賞会を行うと同時に、自分の制作について振り返る。どんなスキルを、何のために使ったか、どのように応用したか、などスキル学習がどのように生かされたかを検証していく予定である。生徒が、のびのびと空間を使い、独創的な自分の作品に対して満足感を得て、同時に、1万年以上前から続く、人間の芸術の追究について考える豊かな心を育む題材となることを期待している。

5 題材の評価計画

時 数	学習内容	評価について				評価方法
		知	思	主	評価規準	
1	鑑賞 ・縄文人の生活 ・土偶、火焰式土器の造形的な美しさ ・土偶に込めた思い	○			知：縄文人の生活、土偶の役割や意味、込めた思いなどがわかる。	ワークシート
2	“どう生きるか”理想や願い、成長したいことなどの自分の思いを込めてアイディアスケッチを描く。		○	○	思：モデルとなる土偶を基に、自分の思いをのせて新しい土偶をイメージし、アイディアスケッチを描いている。 主：自分の思い、願い、理想を考え、作品のテーマをもつ。	ワークシート
3	アイディアスケッチを基に、芯材を創る。	○			技：アイディアスケッチを基に、的確な芯材を作っている。	作品（芯）
4	芯材に薄く粘土を接着し、芯材の土台を作成	○			技：粘土の素材の適切な扱いを理解し、美しい表面に仕上がっている。	作品
5	スキル獲得及び練習 『塊をつかんでつける』 『塊から作る』『伸ばす』 『つまみだす』『曲げる』 『ひも状にして編む』 『ヘラを使う』	○		○	技：粘土造形に必要な基本的なスキルがわかり、できる。 主：スキルを確実に体験している。何度も繰り返しスキルの練習に取り組んでいる。	授業観察とロイロノートへの画像提出

時 数	学習内容	評価について				評価方法
		知	思	主	評価基準	
6 (本時) ～ 10	アイディアスケッチを形にしていく造形学習		○	○	思：基本的スキルを活用、応用し、表現を工夫して自分の思いを形にしている。 主：縄文人の美意識や土偶の装飾性を理解し、自分の見方・考え方を付加して形を生み出そうとしている。	授業観察 作品
11	鑑賞と振り返り ・友達の作品の良さを味わう ・自分の表現活動を振り返る		○	○	思：仲間の作品を鑑賞し、表現の良さや造形の工夫などについて文章で詳しく表現している。 〈鑑賞用紙〉 主：制作過程の振り返りを行い、スキルをどのように使ったか、課題をどのように解決したか、また自分のテーマと表現について文章で説明できる。 〈振り返りシート〉	鑑賞用紙と振り返りシート (ロイロノート)

6 本時の授業

(1) 本時の目標

前時に練習した『塊から形をつくる』、『へらの使い方』、『粘土を接着する方法』などのスキルを活用し、自分が考え、思いを込めた NEO 土偶の形を生み出している。

(2) 授業構想

前時に、粘土を使って『塊をつかんで肉付けする』、『塊から形を作る』、『へらの使い方』、『粘土を接着する方法』、『ひも状の粘土を編む』などのスキル獲得の学習を行っている。導入時にそのスキルについて生徒が実際に試し、提出したロイロノートの画像を使いながら確認をする。本時は、それらの有用性を意識しながら使い、創造的に表現しているかどうかの評価の視点となる。

生徒は、自分が描いたアイディアスケッチをもとに、「地に足を付けて落ち着いて考えるようにしていきたいから、足にボリュームを出す。そのために、前回体験した粘土の量感を意識して、足に粘土の塊を大胆に付けて肉付けしてみよう。」や、「視野を広くもてるようになることを願って、目を強調したい。遮光器土偶のように目に迫力を出すために、前時にやった目に当たる部分を盛り上げて眼球を埋めるように大胆に作る方法を試してみよう。」、「自分の美意識を表すために首回りを装飾したいから、粘土をひも状にして編み、それを接着してみよう。」など、獲得したスキルを使って、自ら生み出した主題の表現を試そうとするだろう。しかし、技能という

のは、簡単に活用、応用できるものではなく、思考錯誤しながら粘土を触り続け、次第にコツをつかむものであるため、初回となる本時は、スキルを試しながらできる事を探っていくような時間になることが予想できる。今回は、グループで学習を進めるが、自分で夢中になって表現を追究したい生徒もいれば、不安な技能面を仲間から学びながら制作したい生徒もいるであろう。机の形態はグループであっても、学びのスタイルは、いつも自分で選択するようにしているので、各自必要に応じて仲間と対話したり、自走して制作を進めたりしている生徒が混在していることになる。また、美術は“真似て学ぶ”ことが大切であり、グループ活動の中で、仲間の指先に注目して、まねをしながら納得する形になるまで、粘土と向き合うことができるようにしたい。粘土の良さは、何回でもやり直しができることであり、納得いかなければ付けた粘土を惜しまず取ってやり直してみるように助言する。

授業の中では、個別の支援を丁寧に行うが、前回のスキルがあまり理解できていなかった生徒を中心に声を掛けていく。特に、接着が甘く、時間経過とともに落下してしまうであろう生徒や、スケッチのアイディアをどのスキルを使えば形にできるのか迷い、動き出せない生徒を中心に個別に支援していく。それ以外の生徒は、スキルを応用しながら自分で考え、工夫を生み出し、どんどん造形をすることができているため、その表現を認め、価値づけする声掛けをするとともに、つまづいている生徒との交流ができるように班の中でつなげていく。「ひも状の粘土を編む方法を教えて。」や「ヘラに水を付けて粘土を接着剤代わりにすることがコツなんだね。」、「あなたの土偶の目は、すごく迫力があるね、どうやって作ったのか教えて。」など班の中で自分がつまづいている課題に関して対話しながら自分の表現へと生かすことができるように、必要に応じて関わりが自然発生的に生まれることを期待している。

最後に、スキルを効果的に活用、応用している生徒の作品を紹介し、その生徒がどのようにスキルを使ったかを説明する時間を取り、全体で共有できるようにする。スキルの有用性を全体で共有し、次時への意欲や目標へとつなげるようにする。

(3) 授業過程

教室の発問と予想される生徒のあらわれ	学び方	◎教師の支援 ☆評価
前回練習したスキルについて確認しよう。 塊をつかんで肉付け 指先でひねる ねじる つまみ出す 粘土の 接着の仕方 目の作り方 ひも状の粘土で 装飾的に ヘラで模様 を刻む 学んだスキルを活用して、自分の思いを込めた NEO 土偶をつくってみよう。 ・ヘラを使って模様を刻み、細かい部分をつくりこんでみよう。 ・ヘラを使って面白い模様ができた。細かい作業もやりやすい。 ↕ ・模様の刻み方を真似してみたい。 ・ひねる、ねじる、つまみ出すなどのスキルを使おう。 ・塊をねじって土偶の頭の飾りを作ることができた。 ↕ ・頭の飾りや耳をどうやって作ったの？ ・ひも状の粘土を編んで腰まわりの飾りをつくらう。 ・ひも状の粘土を編んで肩から斜めにかけて飾りを増やしたよ。 ↕ ・編むと切れてしまうんだけどコツを教えてほしい。 ・塊を大きくつけてそこから目を大きく作ってみる。 ・塊から臉を作って眼球を埋め込んだら、迫力のある目になったよ。 ↕ ・どのくらいの量の塊からそれが作れるの？	一斉 グループ 【スキルの活用・応用】	◎生徒作品の画像でスキルを確認する。 ◎どのスキルを使うと目指す表現が可能になるか、見通しをもてるようにする。 ◎粘土は、何度でも「取る、付ける」ができるため、安心して挑戦するよう伝える。 ◎黒板にスキルを思い出せる画像を提示。 見たい生徒には、前時の動画も視聴可能にしておく。各グループに複数種類のヘラを用意するなど、学びの環境を整える。 ◎机の上に置いたアイディアスケッチに触れながら、自分の思いを確認しながら表現できるように生徒と対話し、支援する。 ◎表現が難しい生徒には、個に応じて支援する。 ・部位の接着が甘い →乾いている部分を十分に濡らし、粘土を削りながら接着する。 ・ひび割れが予想できる →表面を濡らし、粘土で隙間を詰めて表面を美しくなるようにアドバイスをする。 ・スキル選択に迷っている →具体的なスキルを提案 ・ヘラの使い方が理解できていない →ヘラを水で濡らし、押し付けるように扱うようアドバイス

・コツがわかったから、部分がしっかりついた。 ・真似をしてへらをもっと使って模様を刻んでみる。 ・遮光器土偶の目を友達から聞いたやり方で作ってみる。眼球の表情は、自分で工夫してみたい。 ・ひも状の粘土でもっと装飾的にしてみたい。		一 斉	☆『塊から形をつくる』、『へらを使う』、『粘土を接着する』などのスキルを活用し、自分の土偶の形を生み出している。 〈【思】作品〉 ◎生徒の活動の様子から、広げたいと感じる表現をしている生徒を意図的に指名し、次回につなげるようにする。
どんなスキルを使って表現したか、説明しよう。			
・三つ編みの方法を覚えたので、三つ編みを作って、肩から胸元まで接着しました。飾りが増えて華やかになりました。 ・首元がさみしかったので、首飾りを作ることにしました。ひも状の粘土を少しの量を削り取りながらへらに水を付けて接着したら、きれいに部品が付いて安定しています。『粘土の接着』の方法を覚えたのでこれからも使えそうです。 ・遮光器土偶のような目を作りたいので『塊から作る』を使って目の形を大きくつけました。そのあと、指でへこませた後眼球を埋め込んでへらを使って無表情な目にしてみました。塊で作ると迫力がとても出ました。目の周りにもっと表現を工夫していけそうなので挑戦したいです。			

R 7 年度も 岳陽中学校授業案 ここがポイント！①

【単元構想】

『子どもの予想される考えや反応、多様な意見』を、
「 」を使って、子どもがそう言っているように書く

授業者の『〇〇したい』『〇〇していく』を、
生徒の「 」の前後に入れ、仕掛けと見取りとセット

- (1) 授業案の単元構想を読み返し、『子どもの予想される考えや反応、意見』をマーカーする。
- (2) 併せて、教師の『～する』『～したい』『～していきたい』等をマーカーする。
- (3) チェック。基本、「マーカー→マーカー」のセットになっている。時には、生徒のつまずきを狙うために、「マーカー→マーカー」になることもある。
- (4) ① 自分の授業案のマーカー部分を、「(カギカッコ)」に変換できませんか？
② 自分の授業案のマーカー部分の手前に、生徒のあらわれの部分のマーカーを入れることはできませんか？
③ 生徒のあらわれの部分のマーカーも、「(カギカッコ)」にできる所ありませんか？
- (5) 他の先生の授業案を読み、単元構想のどこにどのような「 」を入れられるかを考える。
- (6) マーカーが多い単元構想にならないように、日々の教科部会(評価計画)に生かす。

カ
ギ
カ
ッ
コ
研
修

〈数学の例〉

《before》

単元の導入では、①ロープを利用して長方形を作り、長方形の縦横の長さを求める問題を用意する。ここで、立てた方程式が2次式になることを押さえる。そして、② $ax^2 + bx + c = 0$ の形を作り、左辺を因数分解すれば方程式が解けることを学習することで、③既習事項を活用したい。

教師の『4連続〇〇する、〇〇したい』を、カギカッコを入れることで、



《after》

単元の導入問題①「長さが40mのロープで、面積が51㎡になる長方形を作る。」では、長方形の縦横の長さを求めるために立式すると2次方程式になり、②「これまでの方法では解けない」と、生徒は等式の性質の利用だけでは通用しないことに困惑することが予想できる。そこで、②「すべて左辺に移項して、右辺を0にするとどうなるだろう？」と問い掛けてみると、②③左辺が因数分解できることに気付く生徒が出てくるだろう。そして、③「2次方程式を解くためには、因数分解をすればいいんだ。」と、2次方程式の解法における因数分解の必要性と、既習の因数分解の有用性を同時に感じるはずである。

R 7 年度も 岳陽中学校授業案 ここがポイント！②

【発問、課題の設定】

発問、問い掛け、学習課題…は『子どもの表れ』を元に！

【学ぶ必要感、切実感】

- ① あれっ？
- ② どうなっているの？
- ③ やってみたい！
- ④ ～を知りたい！
- ⑤ ～を確かめたい！
- ⑥ 前の授業で～だと感じたんだけど…

【予想したくなる、解決したくなる】

- ① たぶん～かな？
- ② もしも〇〇なら…
- ③ もしかして～っていうこと？
- ④ うまくやるにはどうしたらいいかな？
- ⑤ ～してみようかな…
- ⑥ 見えてきた、やれそうだ！

子どもの予想されるあらわれ

【ズレ】

- ① どうしたらそんなふうに見えるの？
- ② 私のとちがう。どうして？
- ③ どう考えたらそうなるの？
- ④ 〇〇したけど、うまくいかない…
- ⑤ **納得いかない。〇〇ってどういうこと？**
- ⑥ 〇〇と考えられるよ。だって…

- ・例えば、この「納得いかない、どういうこと？」をみんなで解決する課題だと捉えて投げ掛ける。
→これを『発問』と言ったり、『学習課題』を設定する と言ったりする。
- ・本時の目標に迫るような『発問』であれば、二重線で

※生徒のあらわれのない状況に、（一方的な）教師の問い掛けや、（一方的な）学習課題の設定はない。

そもそも…

- ・生徒の「おもしろそう!」「どうなってるの?」「やってみたい!」などのワクワク感をくすぐるようなきっかけをつくっているか。
- ・生徒の前時まで振り返りや疑問を引き出そうとしているか。
- ・教師が一方的に学習課題を提示していないか。
- ・教師の都合(時間を気にして無理矢理…など)による学習課題になっていないか。
- ・「～してみよう!(Let's)」になっていないか。

〈例：国語〉

始めの問い掛けは、

前時の「振り返り」や、
生徒の「?」から設定され
ていると、より良い。

生徒の「?」や「ズレ」を予測

教師がみんなで考える課
題として設定している。

かぐや姫が帰る直前から、帰った後の場面のうち、もし紹介するなら、どんなところに注目したいですか。

- ・かぐや姫が月に帰る場面が神秘的だから紹介したい。天人が来たところから説明したい。
- ・富士山の名前の由来を紹介したい。どこから伝えようか。
- ・かぐや姫について注目したい。でも、罪を犯して地上に来ていたというのを長々説明してもわかりにくいし、**どんな言葉を入れればいんだろう。**

どんな言葉をポップの最初の部分に入れれば、その場面の紹介したいことが伝わるだろうか。

スキルを活用、スキル活用のための仕掛け

細案は must。 略案も可能な限り。

〈単元構想の構成について〉

- ①『〇〇科では、……』のような書き始めて、その教科で年間を通してどのようなことに重点を置いて取り組んでいるのかを、以下の観点から数行記述する。

☆指導要領が示す『資質・能力』を育むために取り組んでいることがわかるように
☆『教科特有のスキル』の獲得と活用を意識していることがわかるように
☆『学び方のスキル』の獲得と活用を意識していることがわかるように

- ②本単元を学習するにあたって、前学年（小学校時）や前単元とどのような繋がりがあるかを、数行記述する。

※最初に教材観がきたり、教材観の占める割合が多くなったりしないようにする。

教材観から書き始めると、「教師が教えたこと」が前面に出てしまい、教師主導の授業になってしまう。

- ③生徒の実態を交えながら、単元全体の流れ、子どもの表れ、それを引き出す仕掛け、または表れに対する次の手、そして、**どのように『教科特有のスキル』や『学び方のスキル』を獲得し、活用していくか**、が分かるように記述する。

- ④最後に、②と③の構想によって①の実現と結びつくようまとめる。また、次単元や次学年への繋がりも記述したい。

- ④略案はここまでを1枚目に収める。**細案は、1枚を超えてよい。**

※略案では、細かく書きすぎると1枚目に収まらない。

〈本時の授業構想も『単元構想』の中に組み込む〉

- 基本的には、この後に出てくる『6(2)授業過程』の流れの意図を記載。

☆授業過程では表現しきれない生徒の心情
☆課題設定や手立ての意図

※ここが膨らみ過ぎて、本時の前後が薄っぺらくならないよう注意する。（略案）

※**細案も、本時の授業構想をここに組み込む。（枚数は多くなっても良い）**

- 単元の中で、本時の授業の位置づけがはっきりするように意識。
- 子どもの実態をとらえ、前時（前単元）までに「どのような力がついてきているのか」「興味・関心はどのような方向に向かっているのか」「前時では、どのような思いが表れていたか」等をとらえる。
- 単元構想と同様、『実態＝生徒の予想される発言・反応・問い・疑問等』と捉え、その実態があるからどのような手を打つのか、どのような学習課題が設定できそうなのか、が決まってくることを意識する。
- 以上をふまえながら、本時の授業について、次の点が読み取れるように記述できると良い。

★本時で付けたい力は何か。
★そのために必要な手立ては何か。
（目標に迫る発問やその意図、教材・教具の工夫 等）
★Cの生徒にはどのような支援を行うのか。

- 次時の授業には、どのようにつながっていくのかについても触れる。

5 ●単元の評価計画

←細案のみ

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
全体	①○○○○○○○○○○○○○○○○ ○○○○○○○○○○○○○○○○ ○○○○○○○○○○○○○○○○ ○○○○○○○○○○○○○○○○ ○○○○○○○○○○○○○○○○ ○○○○○○○○○○○○○○○○	①○○○○○○○○○○○○○○○○ ○○○○○○○○○○○○○○○○ ○○○○○○○○○○○○○○○○ ②○○○○○○○○○○○○○○○○ ○○○○○○○○○○○○○○○○ ○○○○○○○○○○○○○○○○	①○○○○○○○○○○○○○○○○ ○○○○○○○○○○○○○○○○ ②○○○○○○○○○○○○○○○○ ○○○○○○○○○○○○○○○○ ③○○○○○○○○○○○○○○○○ ○○○○○○○○○○○○○○○○
第一次（○時間）	●○○○○○○○○○○○○○○○○ ○○○○○○○○○○○○○○○○ ○○○○○○○○○○○○○○○○ 〈ワークシート〉		●○○○○○○○○○○○○○○○○ ○○○○○○○○○○○○○○○○ ○○○○○○○○○○○○○○○○ 〈ノートの記述分析〉
第二次（○時間）			●○○○○○○○○○○○○○○○○ ○○○○○○○○○○○○○○○○ ○○○○○○○○○○○○○○○○ 〈発表・ノート〉
第三次（○時間）		●○○○○○○○○○○○○○○○○ ○○○○○○○○○○○○○○○○ ○○○○○○○○○○○○○○○○ 〈観察〉	

【全体】の書き方

『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』を参照する。その単元全体の評価規準を明記する。

【第○次（第○時）】の書き方

- ・一般的な授業案の『授業過程』の右側欄に記載する、『評価』の部分だけを一覧にする。
- ・『第○次』とは、数時間をひとまとまりとして考えたもの。（小単元という場合もある）
- ・単元の時数が短いときは、『第○時』として、一時間ごとのものを作成する。
- ・〈 〉内には、何で評価をするのかを記載する。

教師の発問と予想される生徒のあらわれ	形態等	◎教師の支援 ☆評価
発問は1本実線の枠に書く。→導入は前時からのつながりを意識 ・予想される生徒の発言やあらわれ →たくさん予測する！ 本時の目標にせまる中心的な発問(学習課題)は2重線の枠に書く C (低) B (中) A (高) ※予想される生徒の考え方を記入する際、考え方の程度があれば、左からC(低)→B(中)→A(高)の順番にする。 (低) (中) (高) A 中 B 高 C のように種類別も可 【スキル獲得】の場面に記載。 ※活用場面は入れない。 ※アップデートされた新たなスキルがあるなら、それも獲得として入れる。 ※思考の深まりが感じられる順番で記述する。 ①下に行けば行くほど思考が深まったあらわれ ②ABCのようにパターン別等に予想される場合、右に行けば行くほど思考が深まったあらわれ	一斉・ペア 個・グループ グループ 【スキル獲得】 個	◎～な生徒には(見取り)、～することで(関わり)、～できるようにする。等 ※子供のつまずきや困り感をイメージし、それに対する具体的な支援を書く。 ※支援は個或小集団に。基本は個。 ☆ (例) 酸とアルカリの反応で水ができること、またこの実験では塩化ナトリウムができたことをイオンモデルを用いて説明している。 《【思】観察、プリント》 ※文末は「～している」等の子どもの言動で書く。本時の目標と呼応した評価になるようにする。付けたい力を身に付けた子どもの姿をイメージし、子どもの姿・行動で記述。評価は1つか多くても2つ。 ◎~~~~~ ※評価の後には必ず支援が入る。B評価に至らないC評価の生徒に対する具体的な支援を記述。

【『教師の発問と予想される生徒のあらわれ』の記述に関する注意点】

- ・多様な考え方が分岐するような授業案を考える。
- ・本時の目標にせまる発問(目標に迫る学習課題や問い)を2重線で、それ以外の発問は細線で、生徒の予想される発言は点線で囲む。
- ・予想される生徒の考え方を記入する際、考え方の程度があれば左からC→B→Aの順に書く。また、思考の深まりが感じられる順で書く。(下に行けば行くほど、思考が深まったあらわれ)

【『☆評価』と『◎支援』の記述に関する注意点】

- ・右側の欄は、支援と評価のみ記入する。(留意点は記述しない。)
- ・支援は個(または小グループ)に対して。集団(班や全体)への記述になっていないか注意する。
- ・支援は、主に、学習課題や問いをつかめていないレベルの生徒への支援、追求の方向性が違っていたり、追求できずにいたりするレベルの生徒への支援を記述。(高位な考えの生徒に対する支援は、基本的に授業案には記述しない。…が、そのような生徒への支援は準備しておく。))
- ・評価と支援の一体化に留意して支援を書いてあるか。また、評価は本時の目標と一致していること。その際、「～している」等子どもの言動で書く。
- ・評価と支援は一体化すべきなので、評価の後のCのあらわれの生徒への支援を必ず記載する。

〈本時の目標の書き方〉

- ・『手立て→A'』の構成で書きます。
- ・『手立て』は、「…グループ学習を通して…」では不十分です。
グループ学習で何をするのか(具体的にどのような仕掛けや活動をするのか)を明確に記述する。
- ・A'は、各教科の学習指導要領に定められている、その単元の目標に即して書く。
- ・人事管理訪問のときのことを思い出してください。

〈人事管理訪問「目標づくり」から感じたこと…〉

① 書いてある目標、本当にその授業のゴールになっていますか？

→「この流れだと、目標はここに書いてあるものにはなりませんよね？」
となったケースがありました。

② 右の流れで目標を考えていくと、自然と授業構想が必要になってきます。そうすると、『(2)授業過程』が膨らんでいきます。

何を解決できるようになってほしい？
何ができるようになっていけばいい？ ……

本時の目標決定

どんな手立てなら、目標を達成できるか

